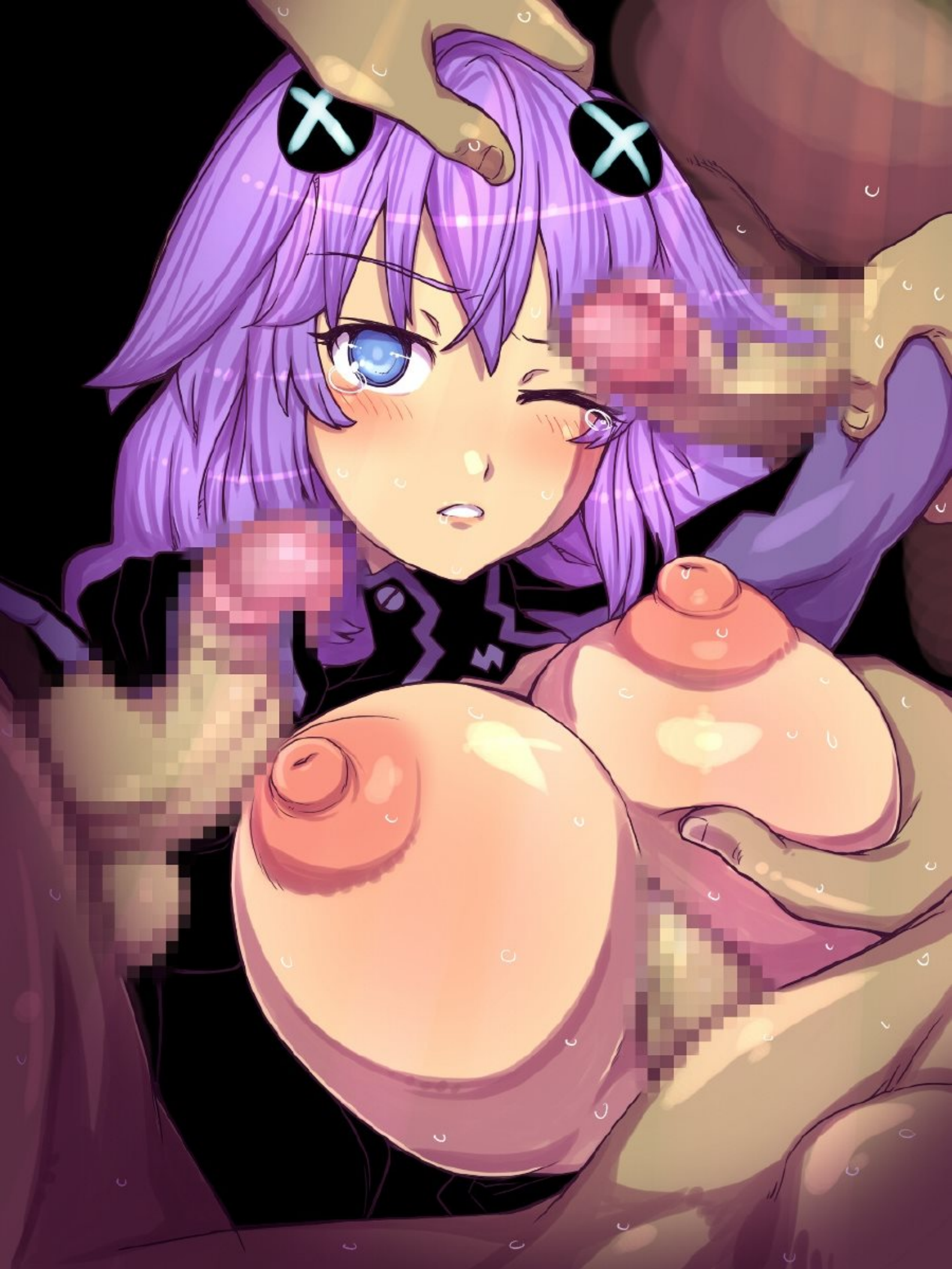
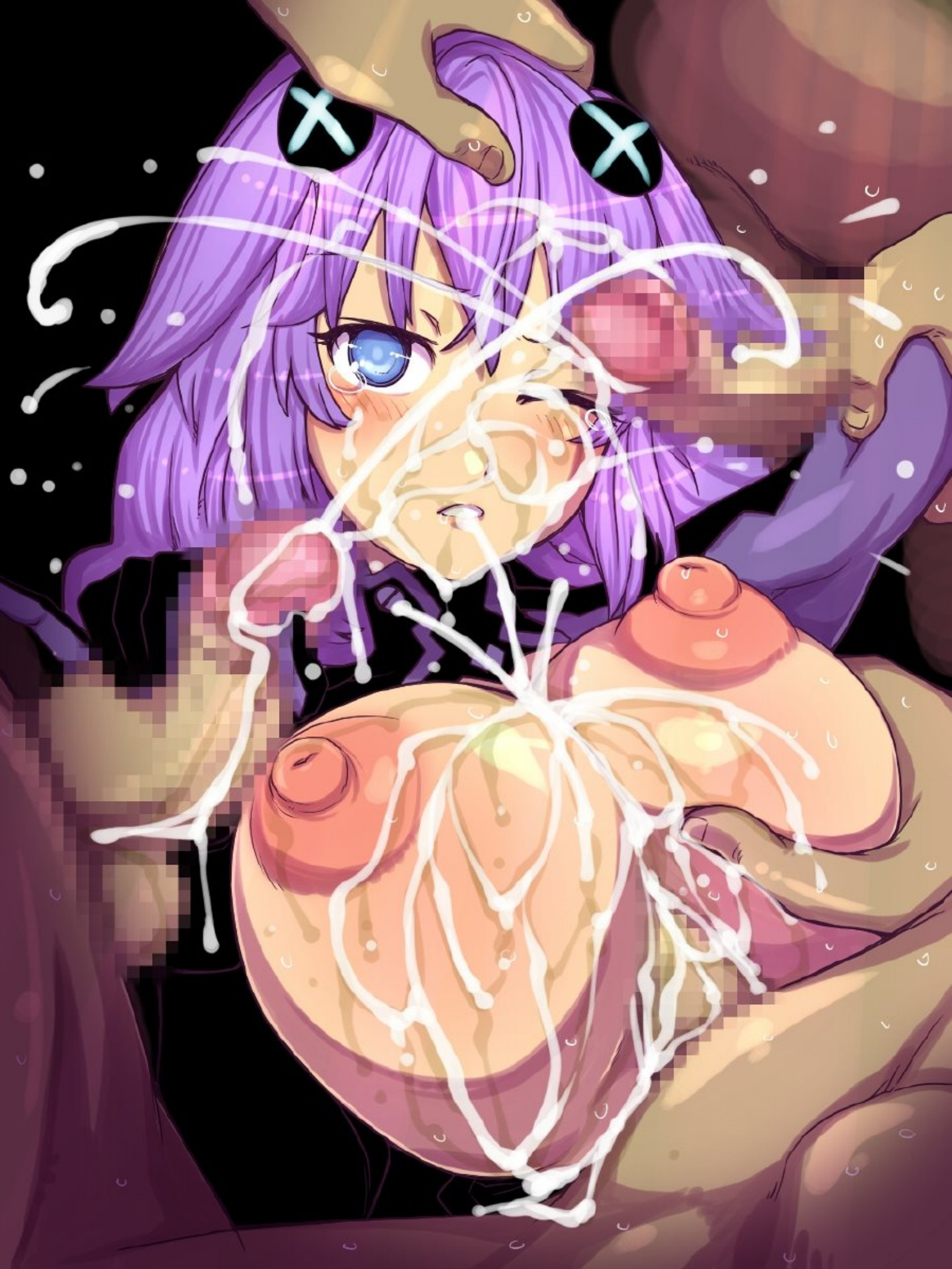


お色直し大放送 Season 5



あの娘もこの娘も承っかけるさ！中出しパイ入り顔射手コキ
大量射精容赦なし！大ボリューム承っかけて6集第五弾！







顔打パン!

尻ニキス! トク!

出音...

ハッ!

はなま

トク!

天音...

んんん

んんん

んんんんん

おっぱい...

おっぱい...

おっぱい...

おっぱい...

おっぱい...

おっぱい...

おっぱい...

おっぱい...



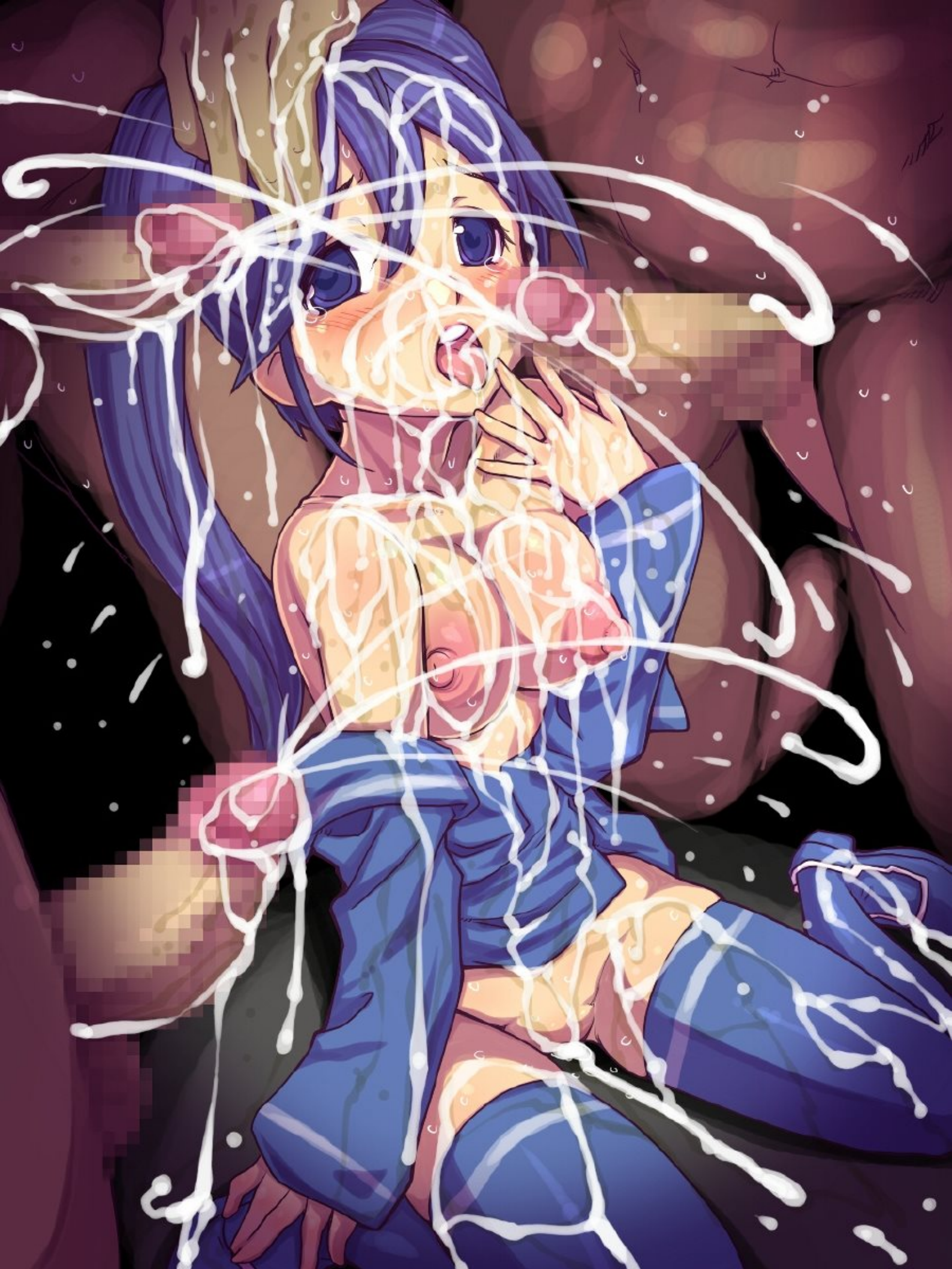




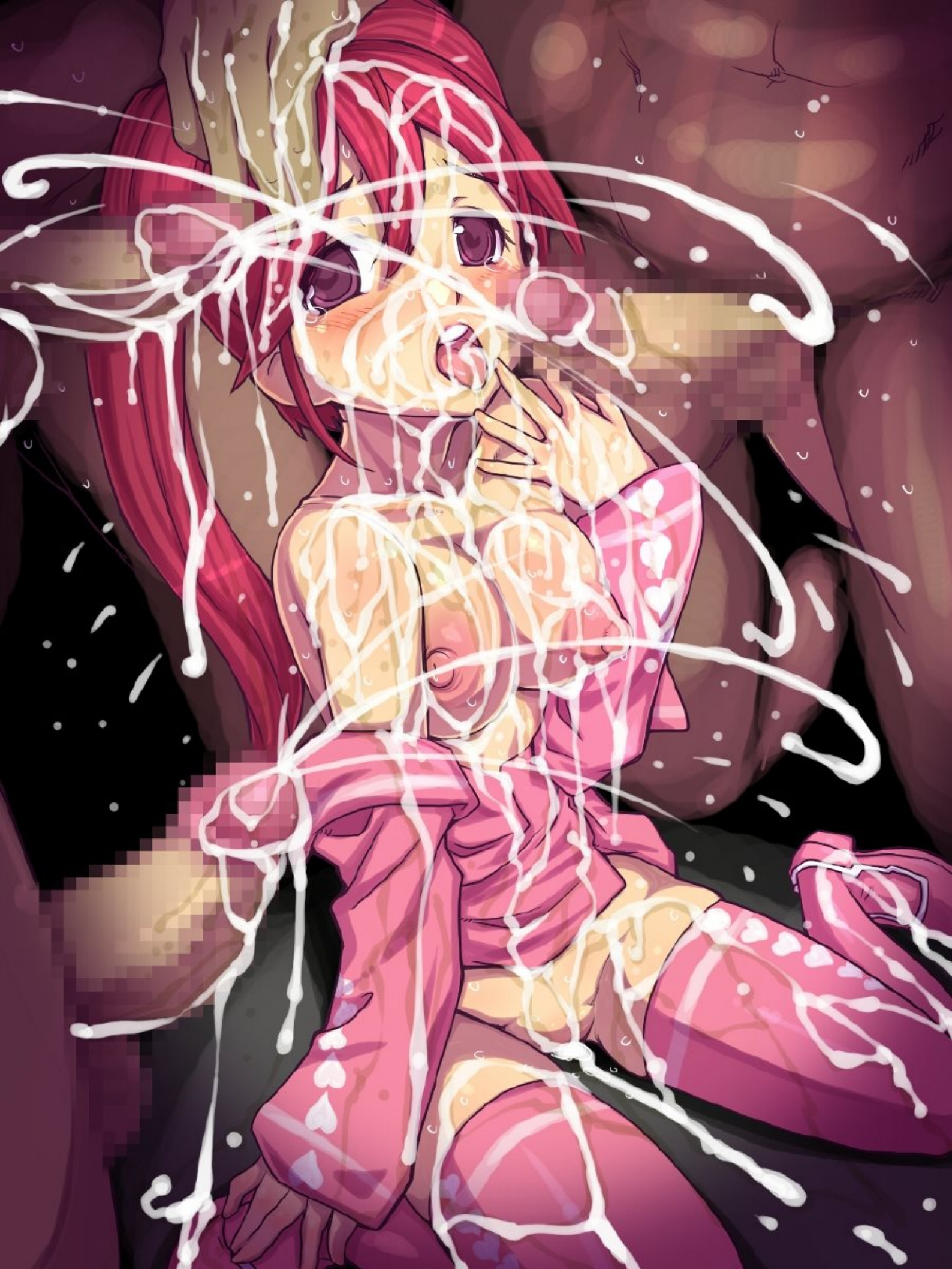


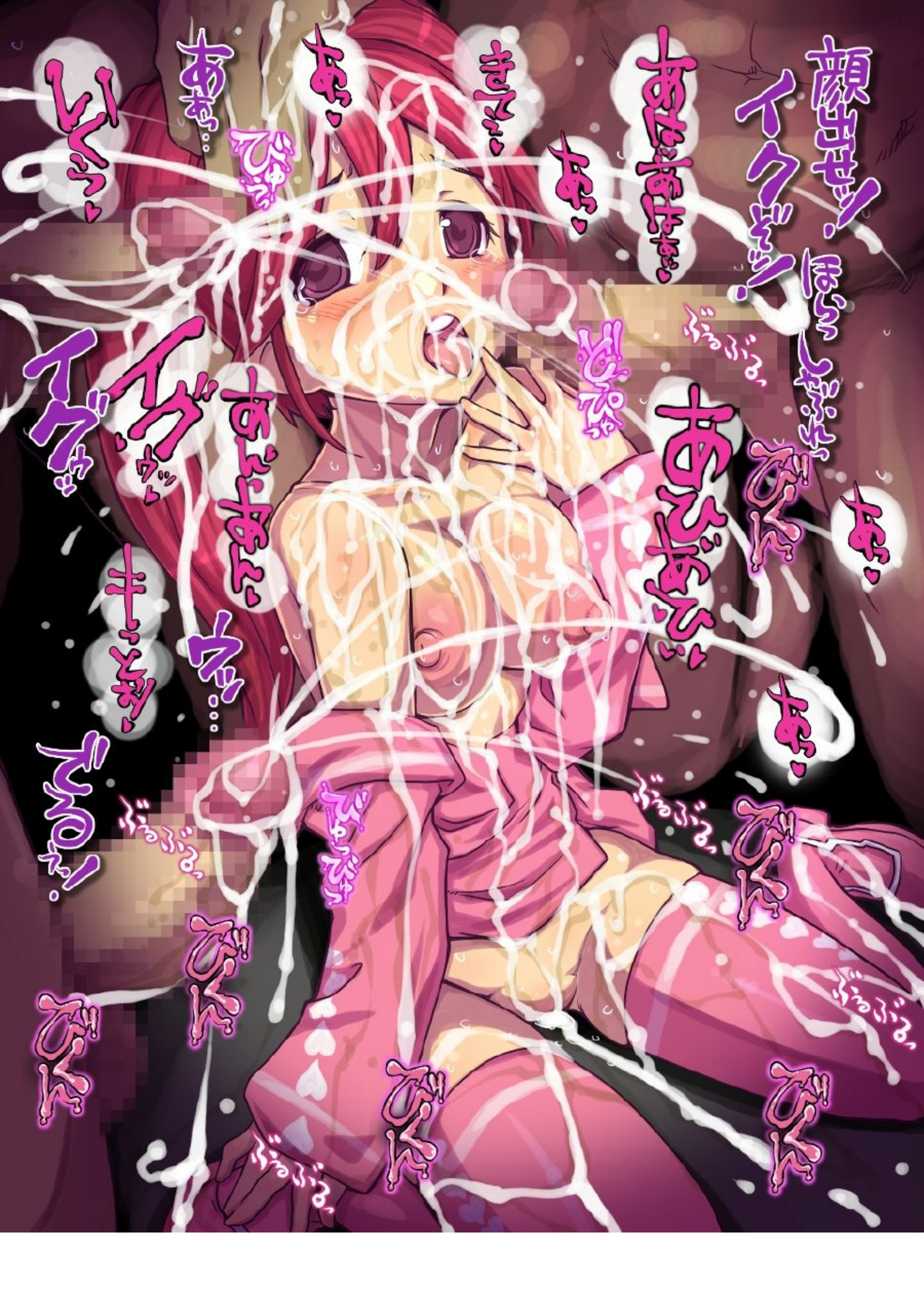












顔がギョ!

トクミン!

トクミン!

トクミン!

トクミン!

トクミン!

トクミン!

トクミン!

トクミン!

トクミン!

トクミン!

トクミン!

トクミン!

トクミン!

トクミン!

トクミン!

トクミン!

トクミン!

トクミン!

トクミン!

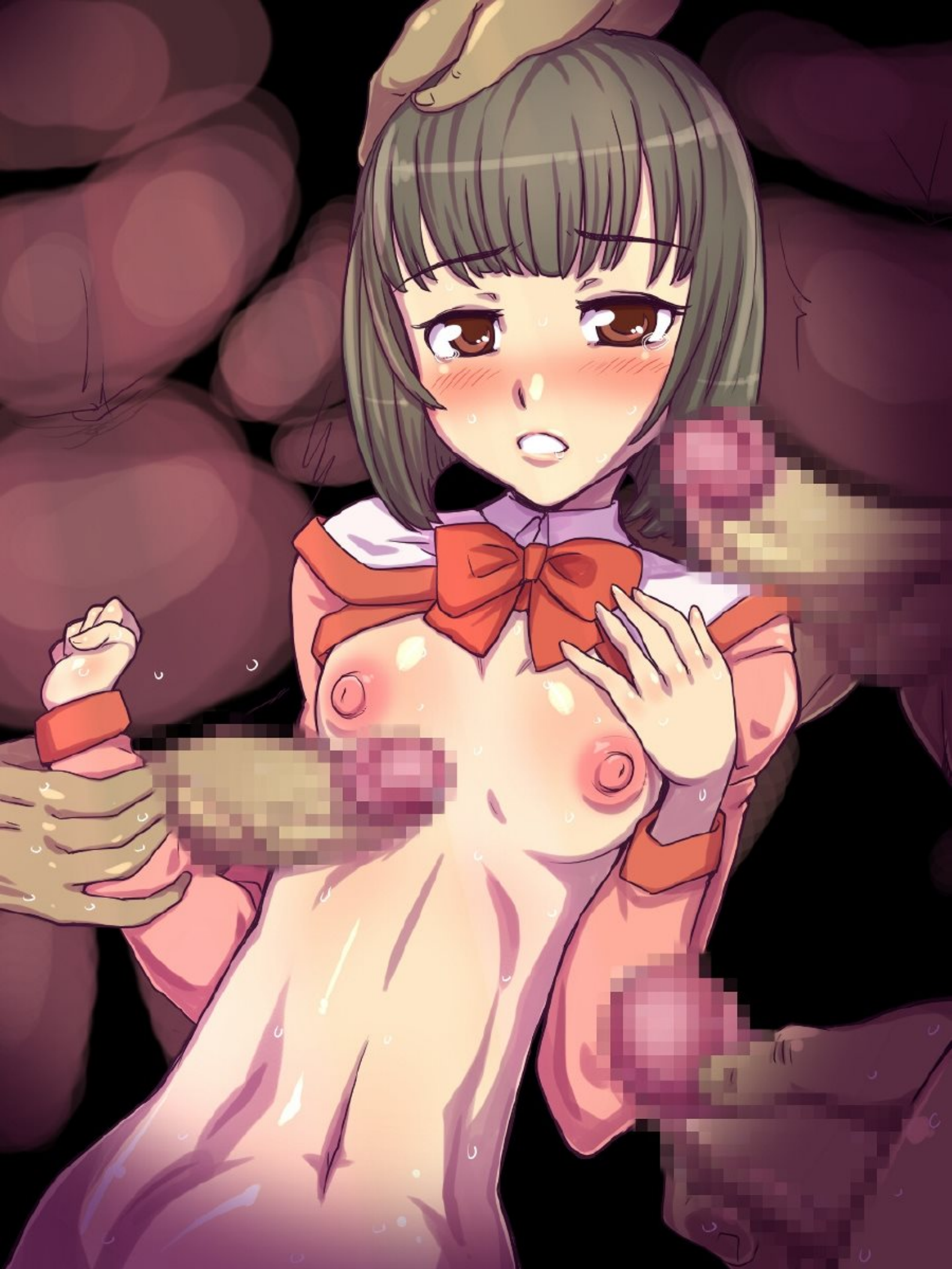
トクミン!

トクミン!

トクミン!

トクミン!

トクミン!







洗一洗吧!

汪汪汪

汪汪汪

汪汪汪

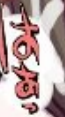
汪汪汪...
汪汪汪...

汪汪汪!

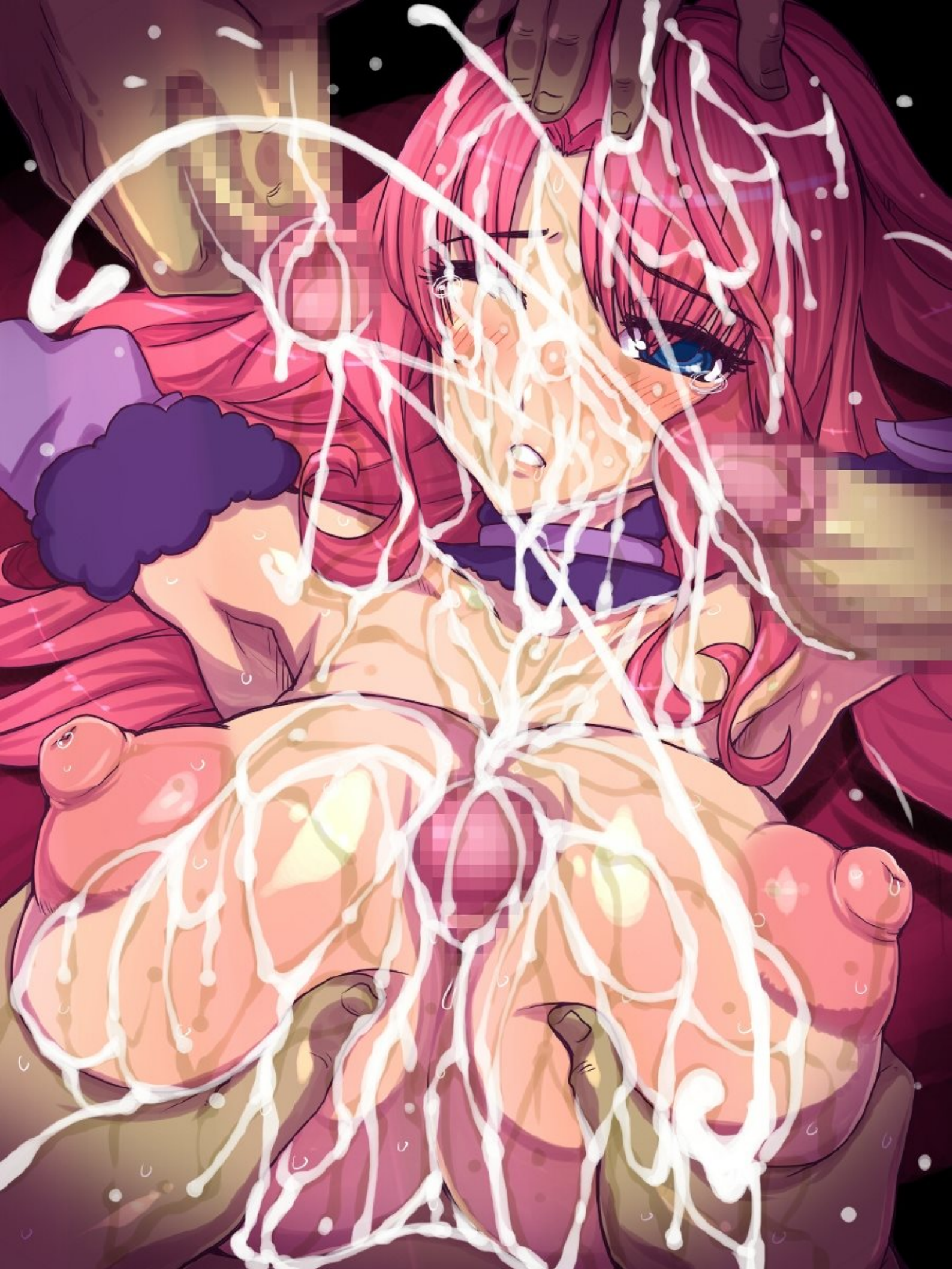
汪汪汪

汪汪汪

汪汪汪













あー... はなま... あー

はなま... あー

顔が... あー

あー

あー

あー

あー

あー

あー

あー

あー

あー

あー

あー

あー

あー

あー



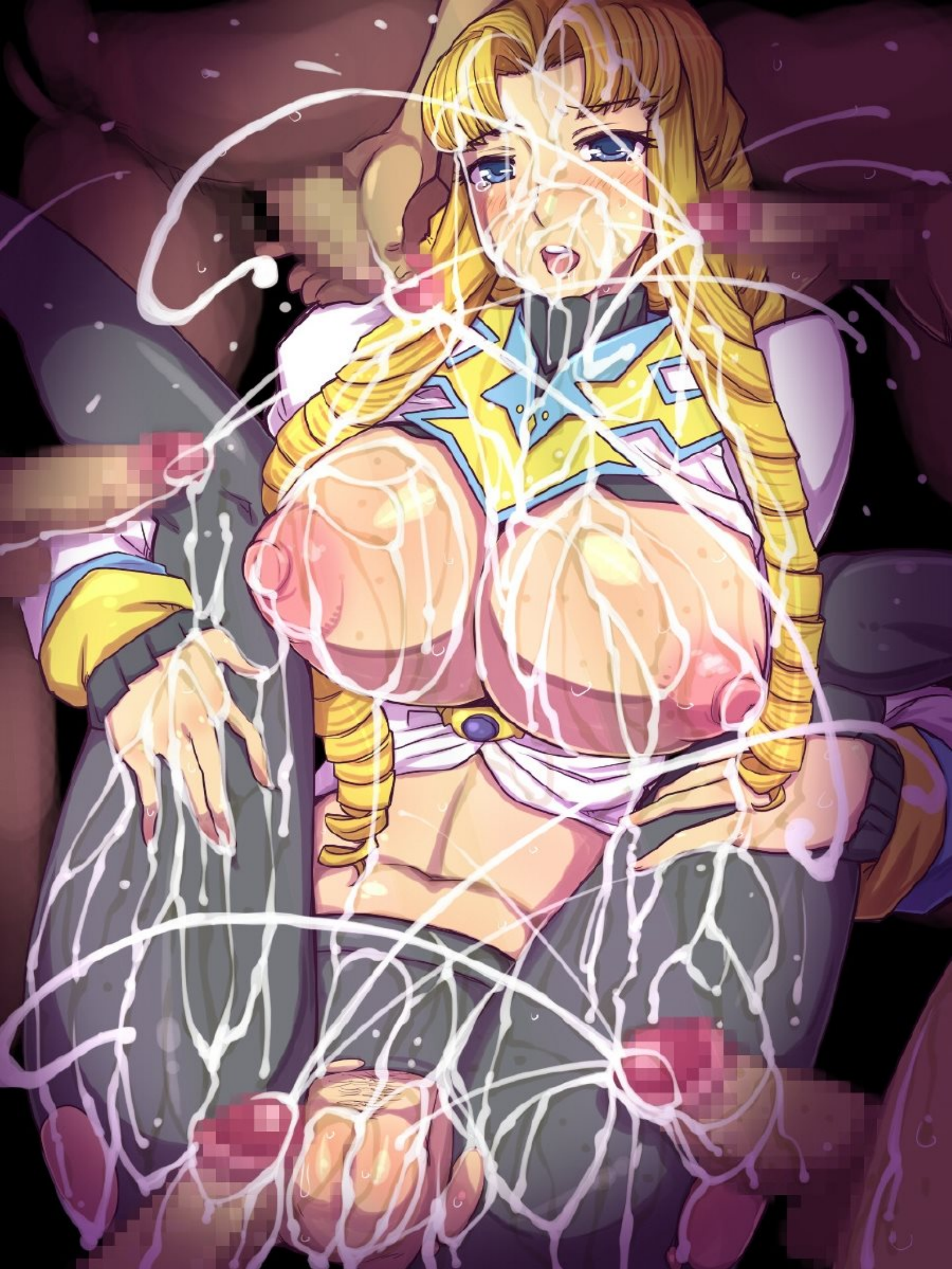


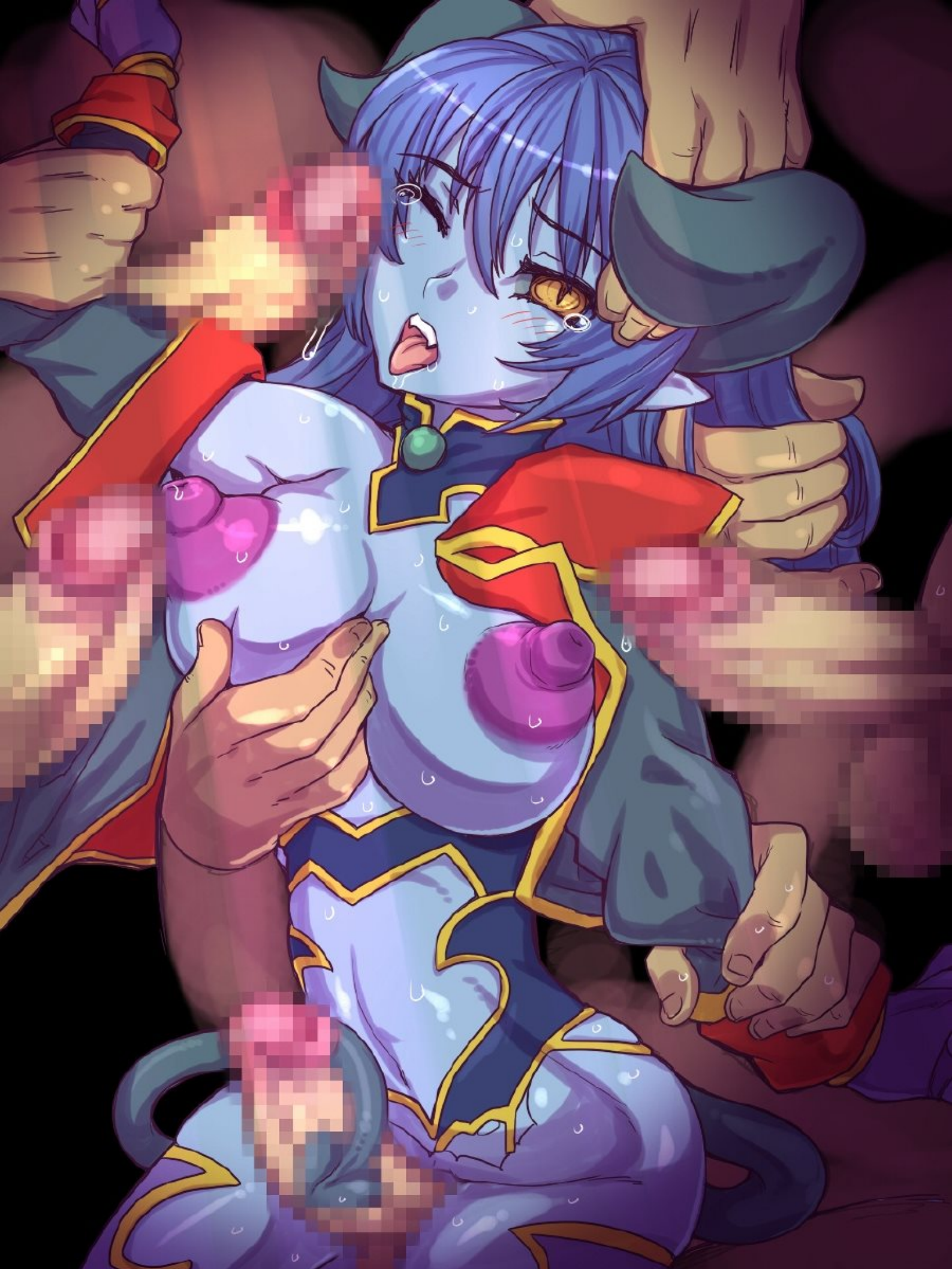


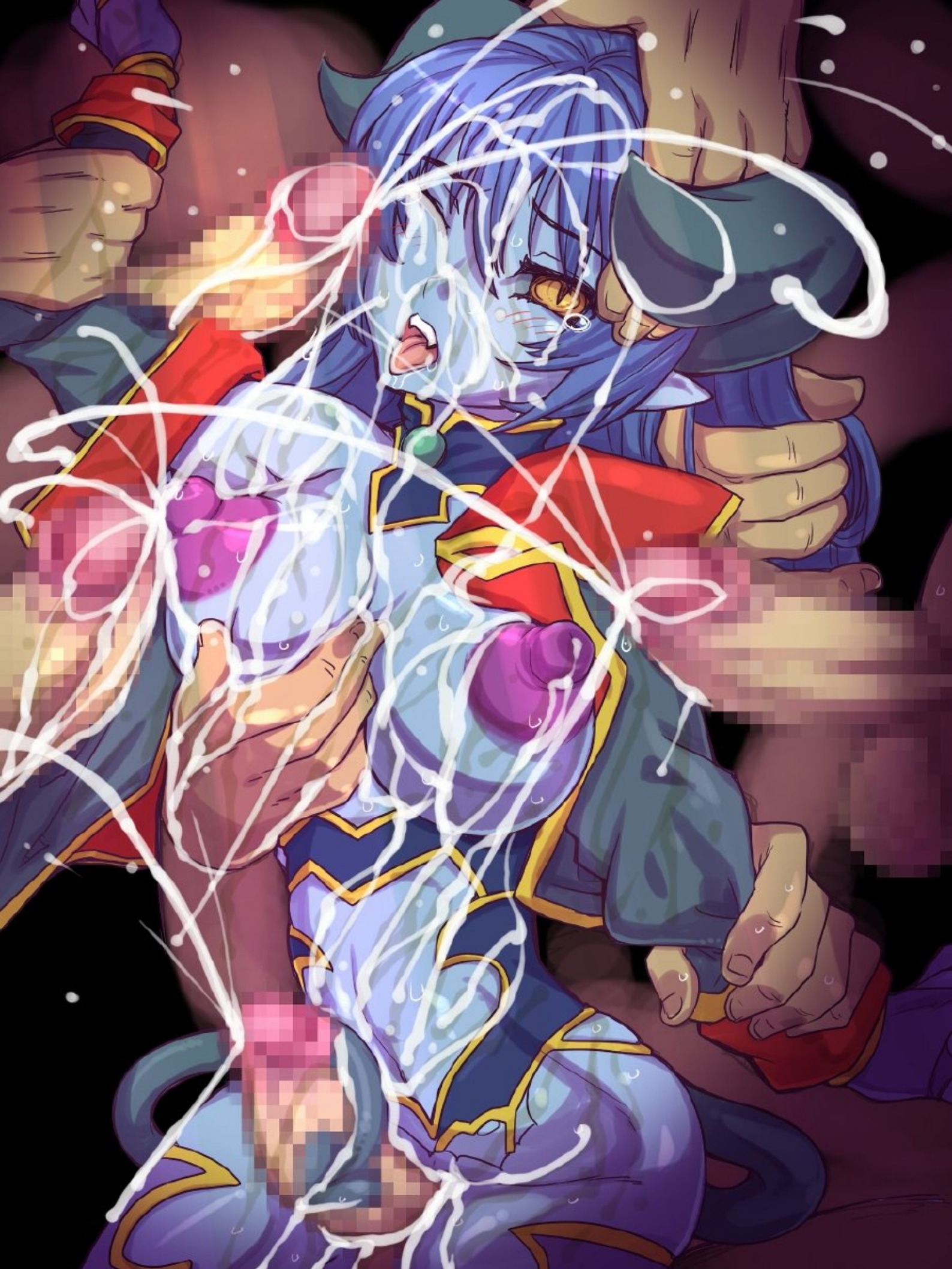










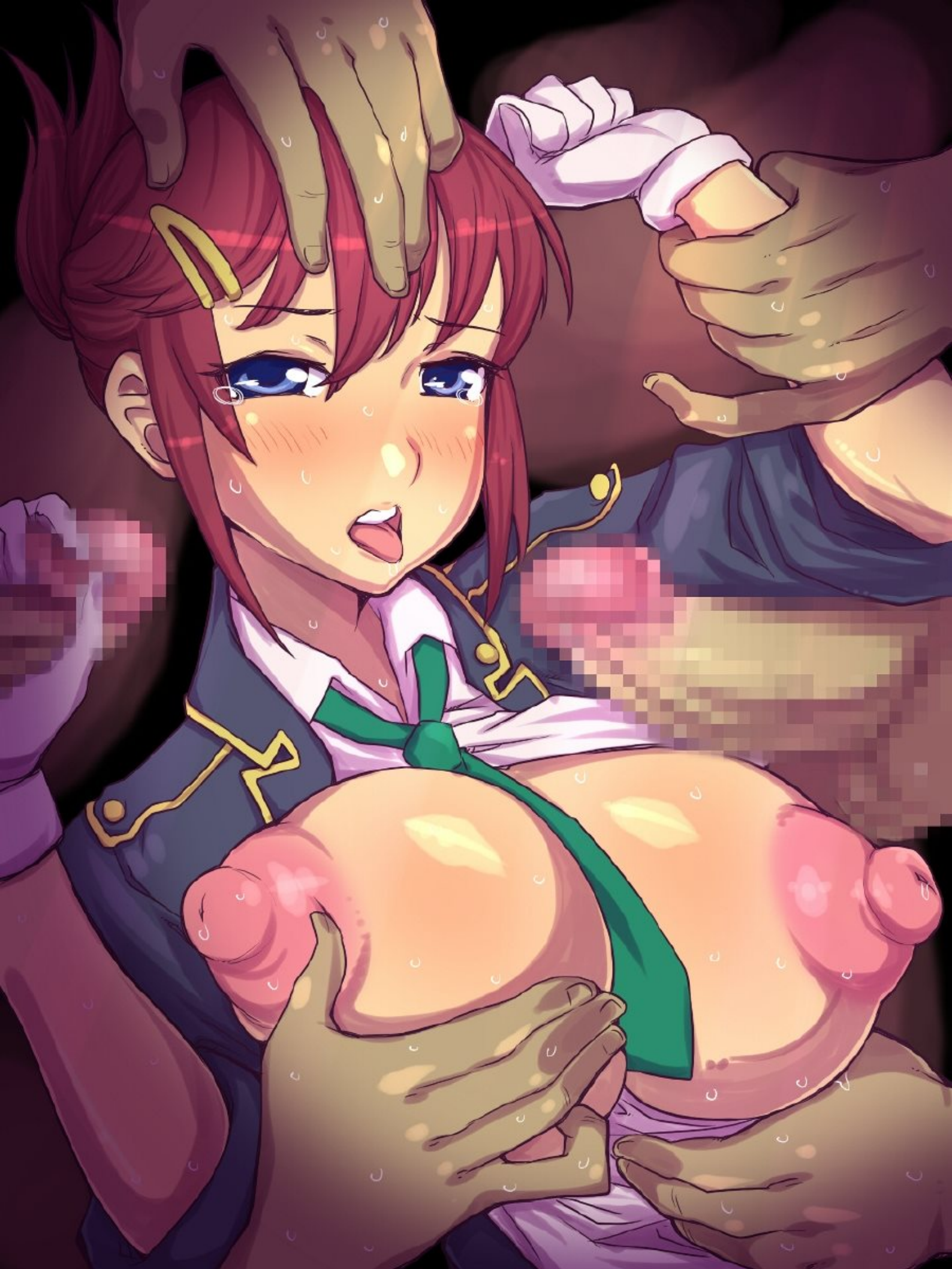


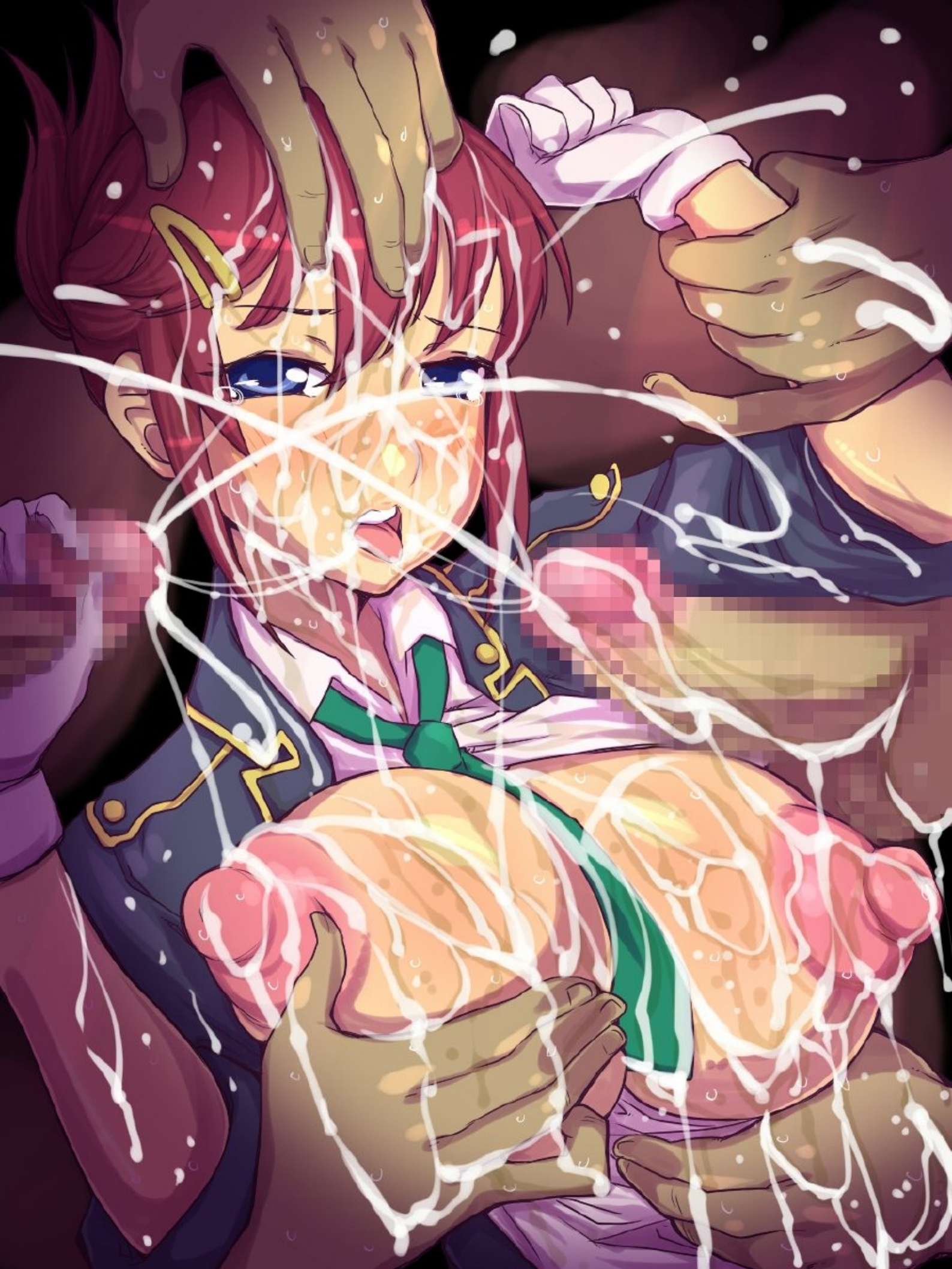














あー トクセン!
ズン!

お母さん! はなす
クニタイム!

お母さん!

お母さん!

お母さん!

お母さん!

お母さん!

お母さん!

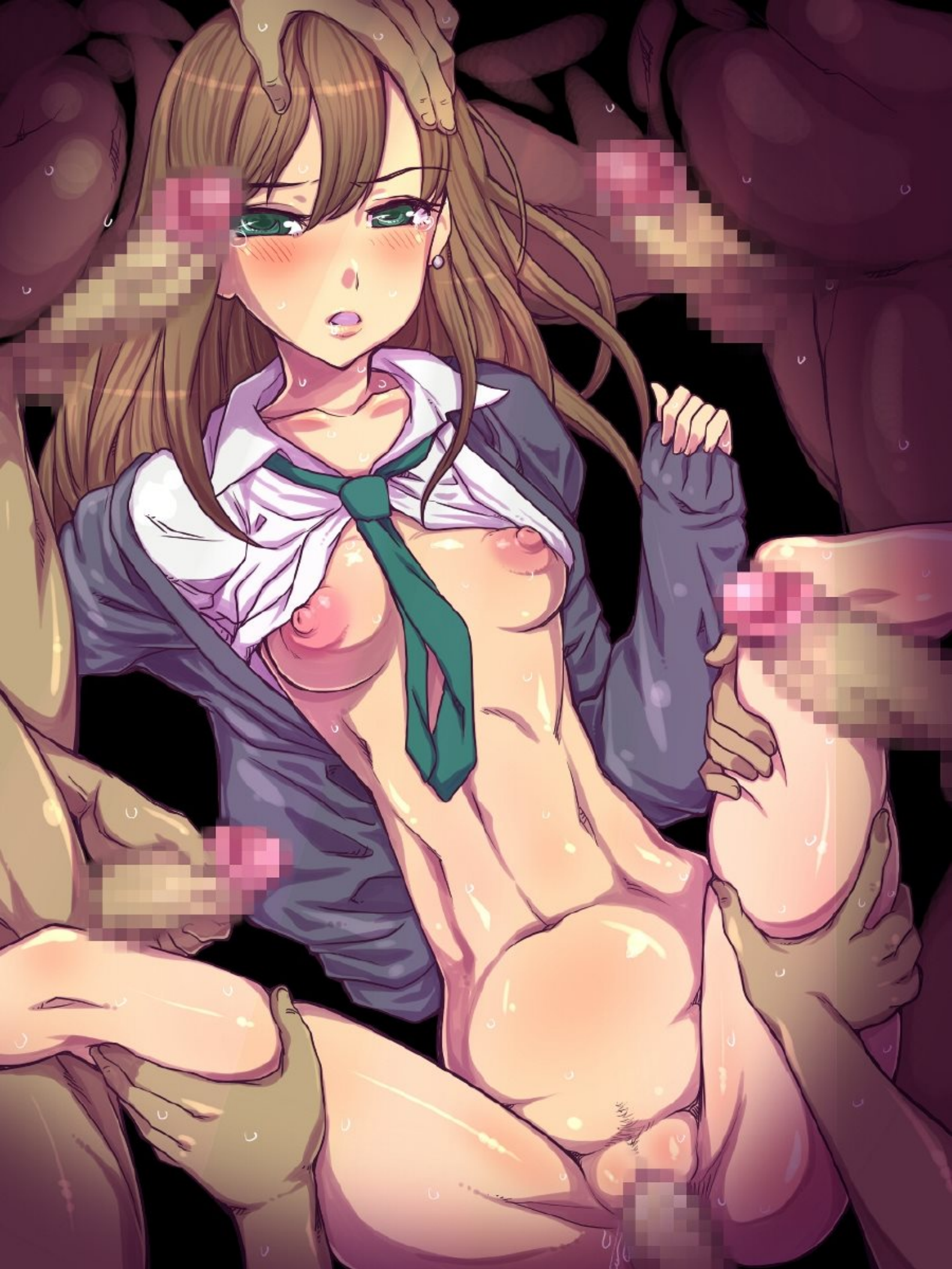
お母さん!

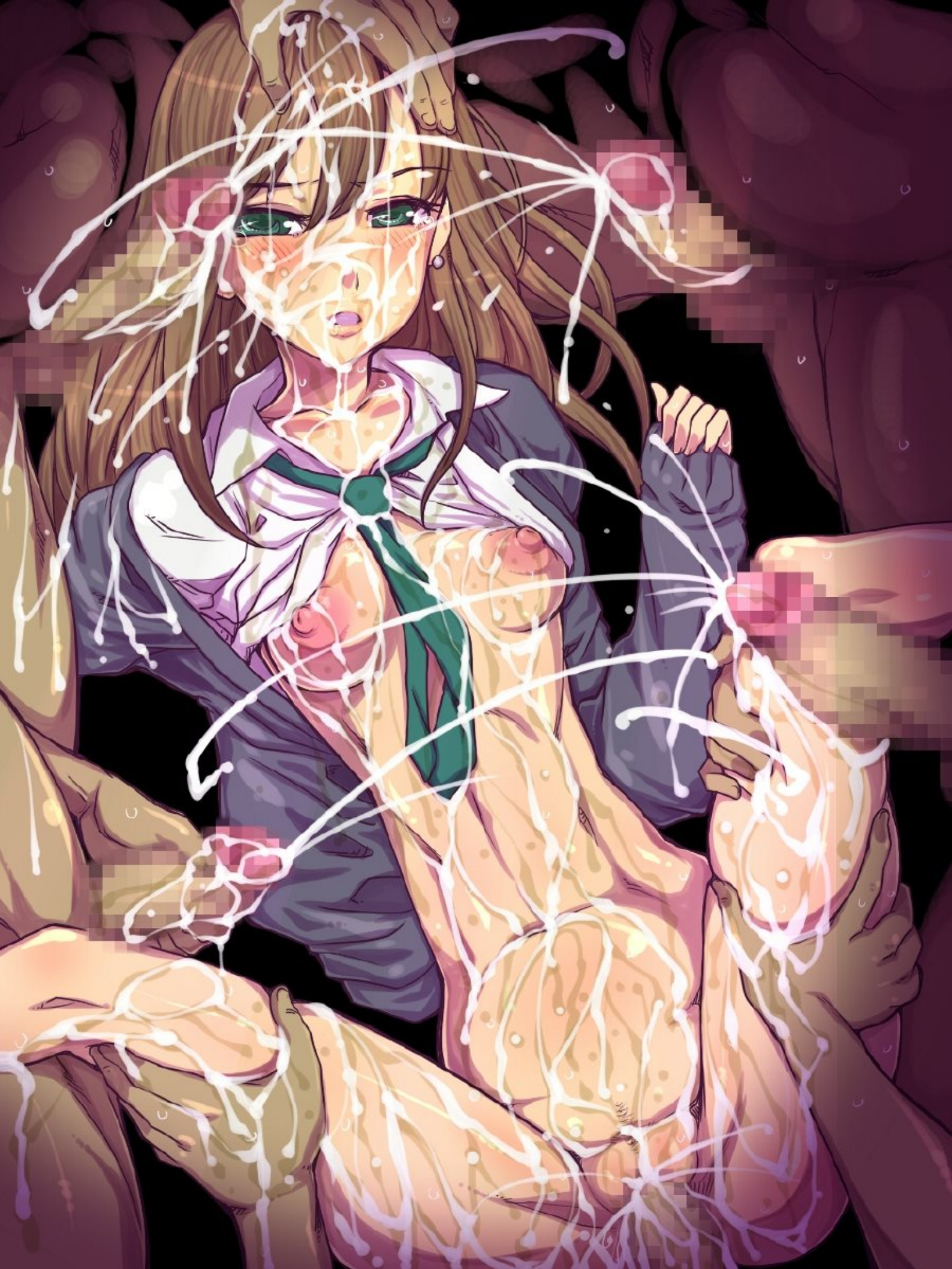
お母さん!

お母さん!

お母さん!

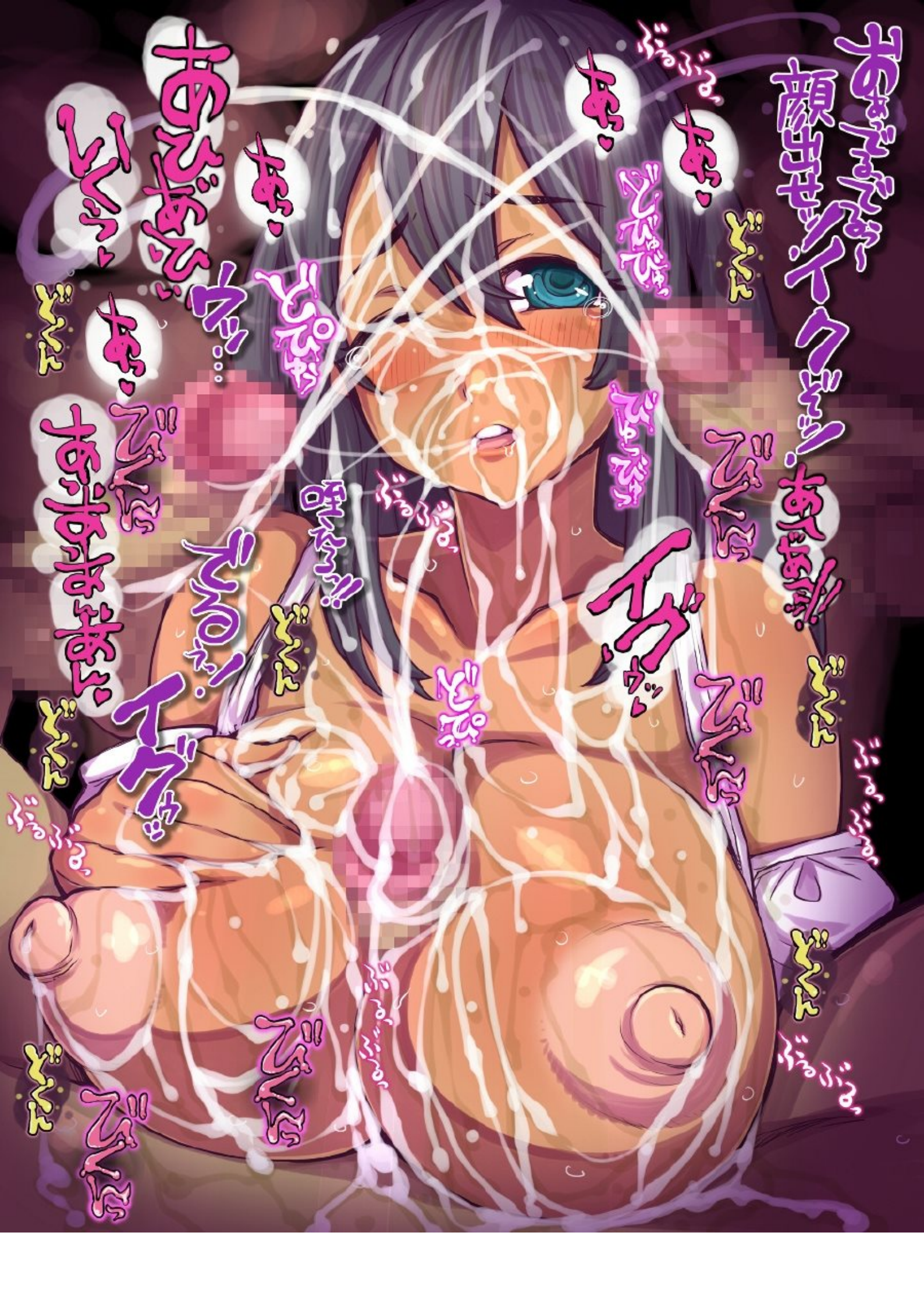
お母さん!











おっぱいおっぱい
顔おまんこくさす！おまんこ

おまんこ

おまんこ

おまんこ

おまんこ

おまんこ

おまんこ

おまんこ

おまんこ

おまんこ

おまんこ

おまんこ

おまんこ

おまんこ

おまんこ

おまんこ

おまんこ

おまんこ

おまんこ

おまんこ







汗心! 汗心!
汗心! 汗心!

おっおっおっ

おっお

おっお
おっお

おっお

おっおっおっ

おっおっおっ

おっお

おっお

おっお

おっお

おっお

おっお

おっお

おっお

おっお

おっお

おっお

おっお

おっお

おっお



★492枚目サモンナイト3 アティ

狂争の夜更け

運勢は最悪、絶対よくないことが起きる。
そんなことが分かっていたとしても、彼女は自分を変えようとしなかった。

「やめっ…ありえない…はなせ…ああ!」

フェーリはぷよぷよ勝負でボロケルにしてやった男たちに
侮蔑の言葉を浴びせた事を後悔はしていた。

あの余計な一言が男たちを怒らせた事は間違いないのだから。

後悔はしていたが、男たちに拉致され、潰れたゲームセンター跡地に監禁され
こんな目に合わされるていいとは思っていなかった。

「あ…うそお…いやよ!いやいやいやああああ!」

押さえつけられ、身動きを許してもらえないフェーリの
毛も生えていないそのかわいらしい割れ目に、いきり立ったペニスが
今突き刺さろうとしている。

勉強が苦手なフェーリでも、それが意味する事は良く分かっていた。

「やめてええええ! いやああああああ!」

悲鳴というよりは懇願だった。彼女の華奢な体では、男たちの屈強な腕で
押さえつけられてしまえば、出来ることは悲鳴か懇願しかない。

「さっきの威勢はどうしたあ? ほら、差し込むぞ…
おまえのつるぺたマンコにおしおき挿入う…ああ～ああ～!」



みちみちと入り込んでくる肉蟲。
勃起した男性のペニスはフェーリにとって未知の生物、
魔界から滲み出した汚らわしさを具現化した蟲のように思えた。

「いやああああ!いたいっ!いたいいいい!」

男の快樂のうめき声とは裏腹に、フェーリは苦痛の悲鳴をあげていた。
お構いナシに腰をガンガンと突き上げる男。

お仕置きというにはあまりに激しく、荒々しい動き。

「オラッ!オラッ!大人をナメてっとうなるか、おしえてやっからなあ」

「いや!いあっあっあうう!あんっ!あんっ!あうう!」

男の腰が突き上げられる度に、あげたくもない声が漏れる。
リズムカルに打ち上げられて、まるで歌うかのような悲鳴。

「たまらねえな、オレはもっとデカイパイオツがすきなんだが
コイツでもイケそうだ」

「こういうほうがやりがいがあるだろうよ、ウヒヒ、俺のも、おらあ握れ」

貫通されて痛みと絶望でフェーリの力が抜ける。

押さえつけることに加担していた男たちは、抵抗を諦めたと感じたのか
我も我もと勃起ペニスをさらけ出し彼女にそれを握らせたり
体に押し付けたりした。

「いやっ…いあっあっあんっあひっあっあっ!

おね…がい…なか…だめッ…あかちゃん…できっちゃうッ」



「フン、中に出して分からせてやんよッ孕んだってしったことかよお」
「おめえ、俺らも膣使うんだから中出しすんなよ!きったねえなあ」

フェーリは男たちの話をおぼろげながら聞き、
ああ、自分は道具みたいに思われてるんだと落胆する。

レイプされながらも、自分に色気があるんじゃないかと思いたかったのかと
自分自身もその落胆に驚いていた。

所詮、私なんて、性欲が満たせればいい、肉蟲の入る肉穴にすぎないんだ…

根暗と陰口を叩かれて、黒魔術やあやしいモノに引かれていく
土壌を気付くに十分な自身の性格。

そうなる運命だったのかもしれない、今日悪いことが起こるのも
男達に罵声を浴びせたのも、そんな性格になってしまったのも、運命…

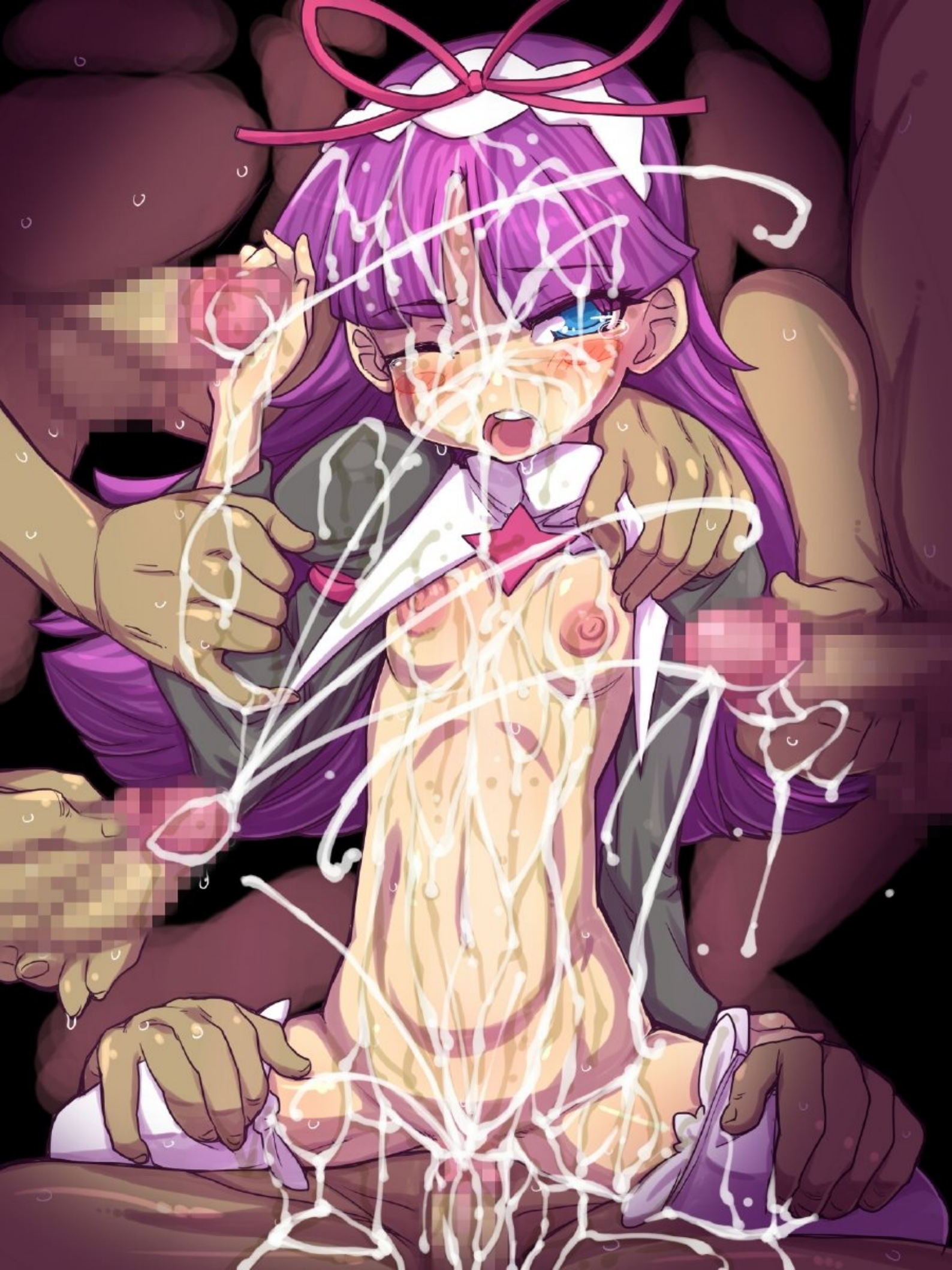
「あっあうっあんっあんっひどいよっそんなのっ ひどっ いっあひい」

このまま中に出されて、知らない男の子供を生まされて、
愛せない子供を育てる為に生きていくの?

それが私の運命…

そんなに、ひどいのが、今朝の占いで出たサイアクの一日、
サイアクの運命…

「じゃあ中に出すのはヤメてやるかぁ…ああ!イクッ!!」
「ああ〜おれもイクッ!」「いくぞお!いくいくいくううう!」



「あっひい!あはあああ!」

男たちが快感の奇声をあげて、体中に白くにこった粘液が飛び散る。執拗に彼女の体をのた打ち回り、打ち出される精液。

「ああ!もう限界!!!うううう!」

フェーリのナカで暴れていた肉蟲が引き抜かれ、膣の入り口でびゅっびゅっと噴水のように汁を吐き出した。

「はあッ!はあッ!はあッ!はあッ!はあッ!ああ〜!」

(膣の中に……出さなかったの………?)

「うわ、きったねえ〜膣の入り口にだしたら俺ら入れらんねえじゃん」

「拭いて使えよ」「そんなにしてまでヤリてえ訳じゃねえしw」

打ち捨てられるように地面に投げ出されると、男たちは満足したように服を着始めた。

「わかったか?ふざけた口きいてっ、同じ目に合わすからな」

吐き捨てるように言い男たちは去った。

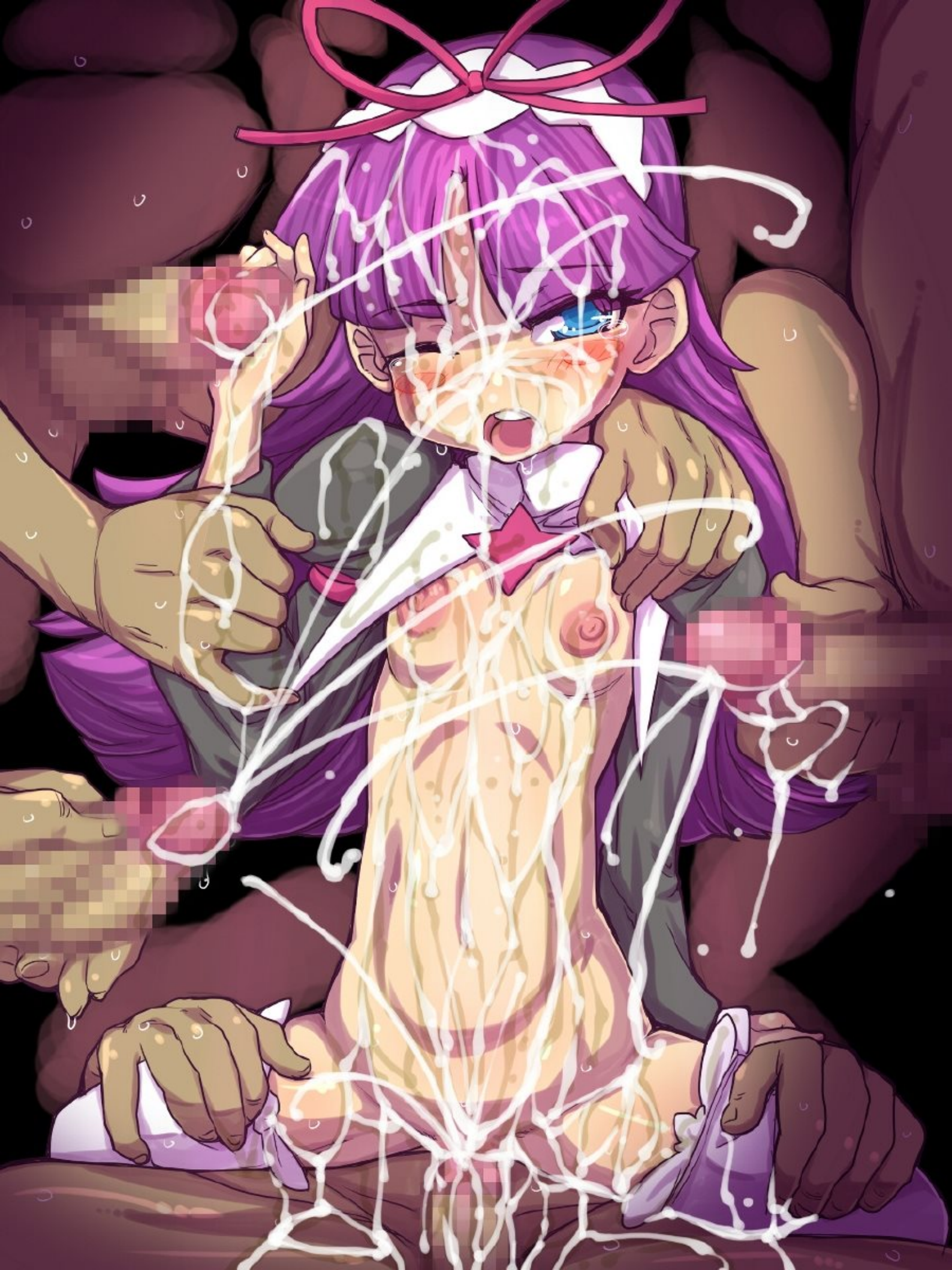
「最悪じゃ……なかった……」

少しだけ自分の想像と違う結末。安堵しながらも、それでもひどいことが起きたことには変わらない。

「運命……なのかな……?」

フェーリは汚れたカラダを引きずって、歩き始める。運命であろうとなかろうと、歩くしか、今はないのだから。

END









ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

ジュウジュウ

ジュウジュウ

ジュウジュウ

ジュウジュウ

ジュウジュウ

ジュウジュウ

ジュウジュウ

ジュウジュウ

ジュウジュウ

ジュウジュウ

ジュウジュウ





おっぱい...
おっぱい...
おっぱい...

あ

おっぱい...
おっぱい...
おっぱい...

あ

おっぱい...
おっぱい...
おっぱい...

おっぱい...
おっぱい...
おっぱい...

あ

おっぱい...
おっぱい...
おっぱい...

あ

あ

おっぱい...
おっぱい...
おっぱい...

あ

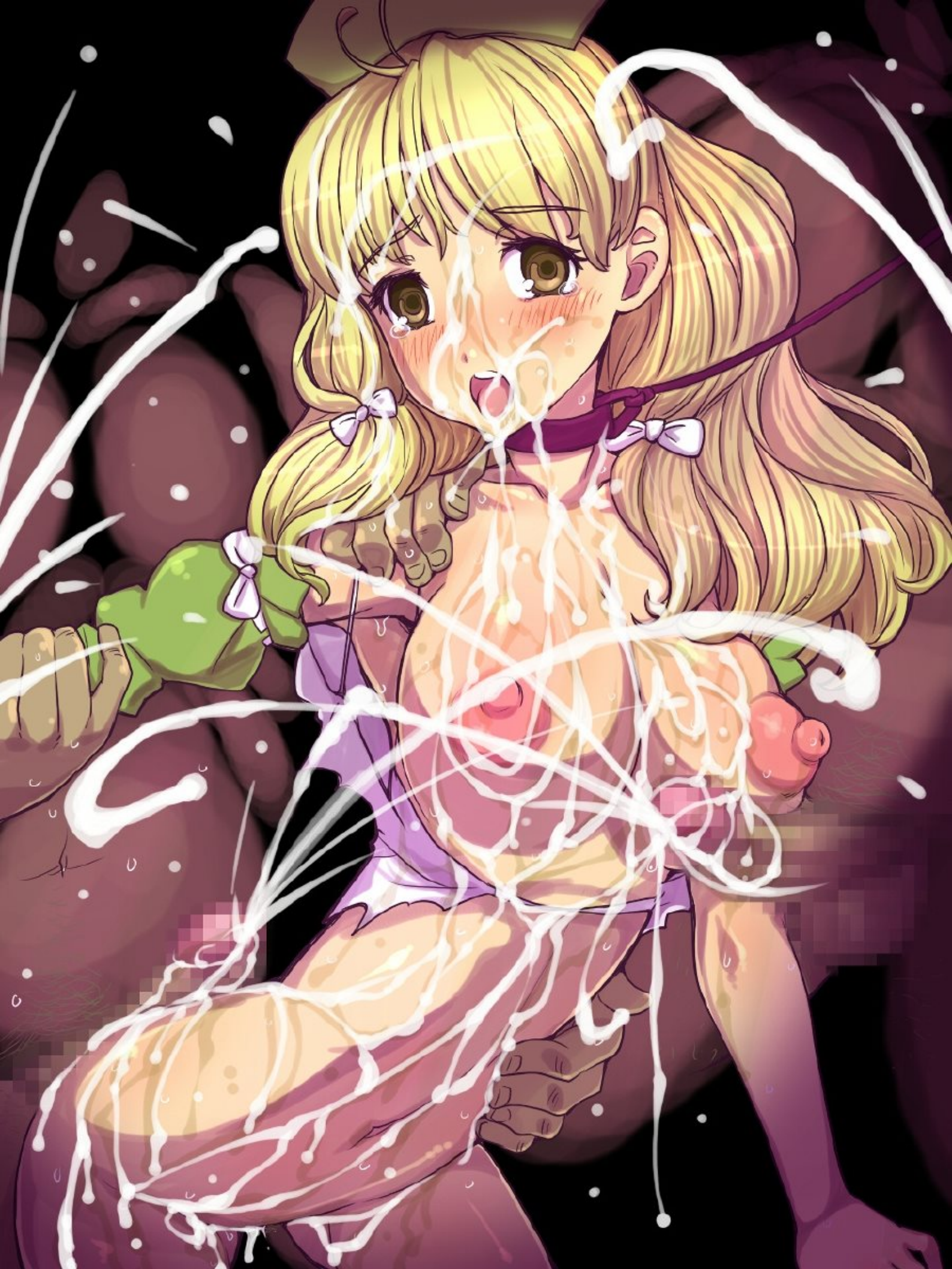
あ

あ

おっぱい...
おっぱい...
おっぱい...

あ



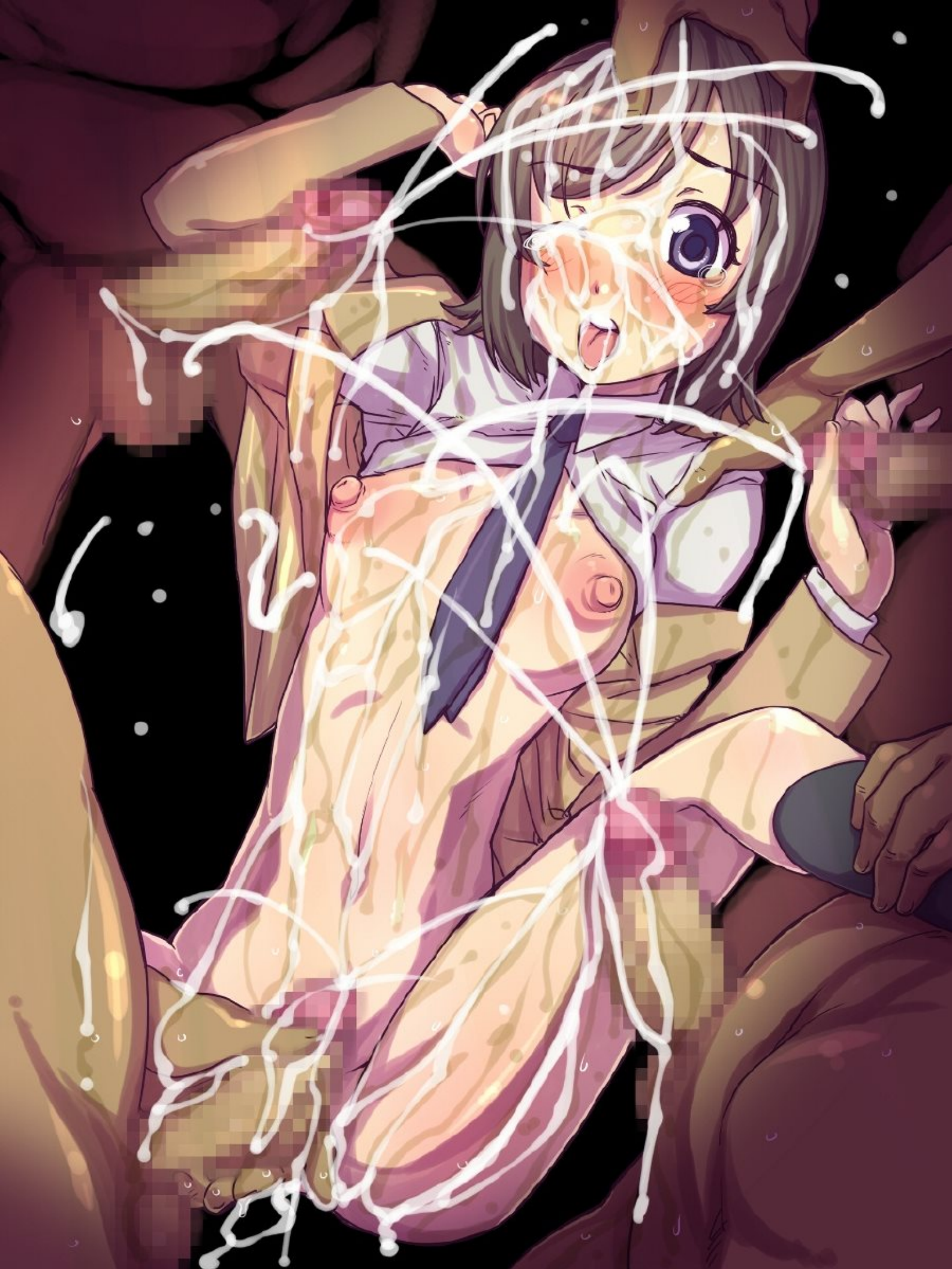














あーっ！ 汚い！ 汚い！

あーっ！

ズンズン...

ズンズン！

ズンズン

ズンズン

ズンズン...

ズンズン！

ズンズン

ズンズン！

あーっ！

あーっ！

ズンズン

ズンズン...

ズンズン！

顔が！

ズンズン！

ズンズン

ズンズン

ズンズン...

ズンズン！

あーっ！

あーっ！

ズンズン

ズンズン







あーあーあー ああああああ

あーあーあー ああああ

あーあー ああああああ

あーあーあー

あーあーあー

あーあーあーあーあーあー

あーあーあー

あーあーあーあーあー

あーあーあー

あーあーあーあーあーあー

あーあーあーあー

あーあーあー

あーあーあーあーあー

あーあーあーあー

あーあーあーあー

あーあーあー

あーあーあーあーあーあー

あーあーあー

あーあーあー

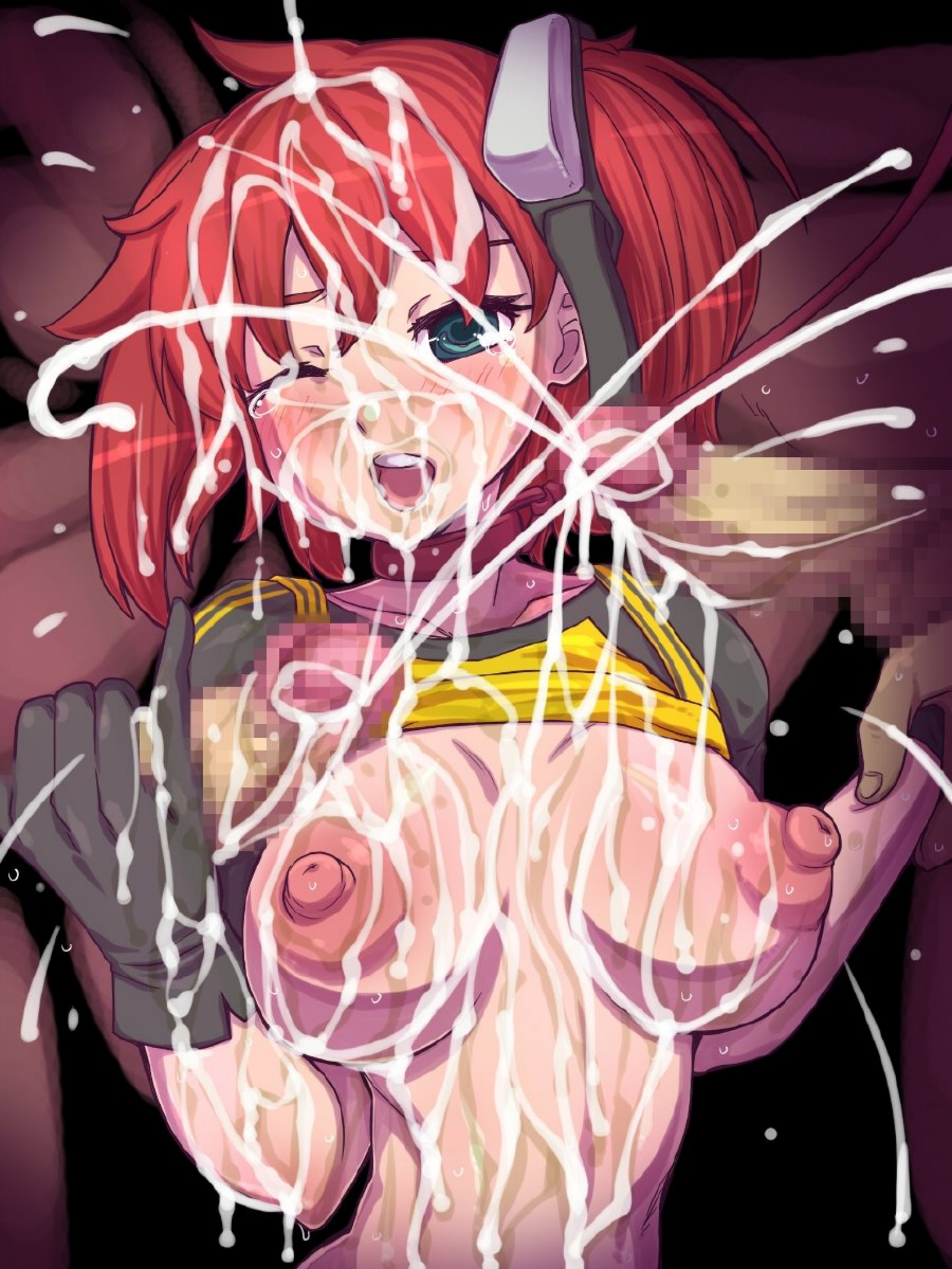
あーあーあーあーあーあー

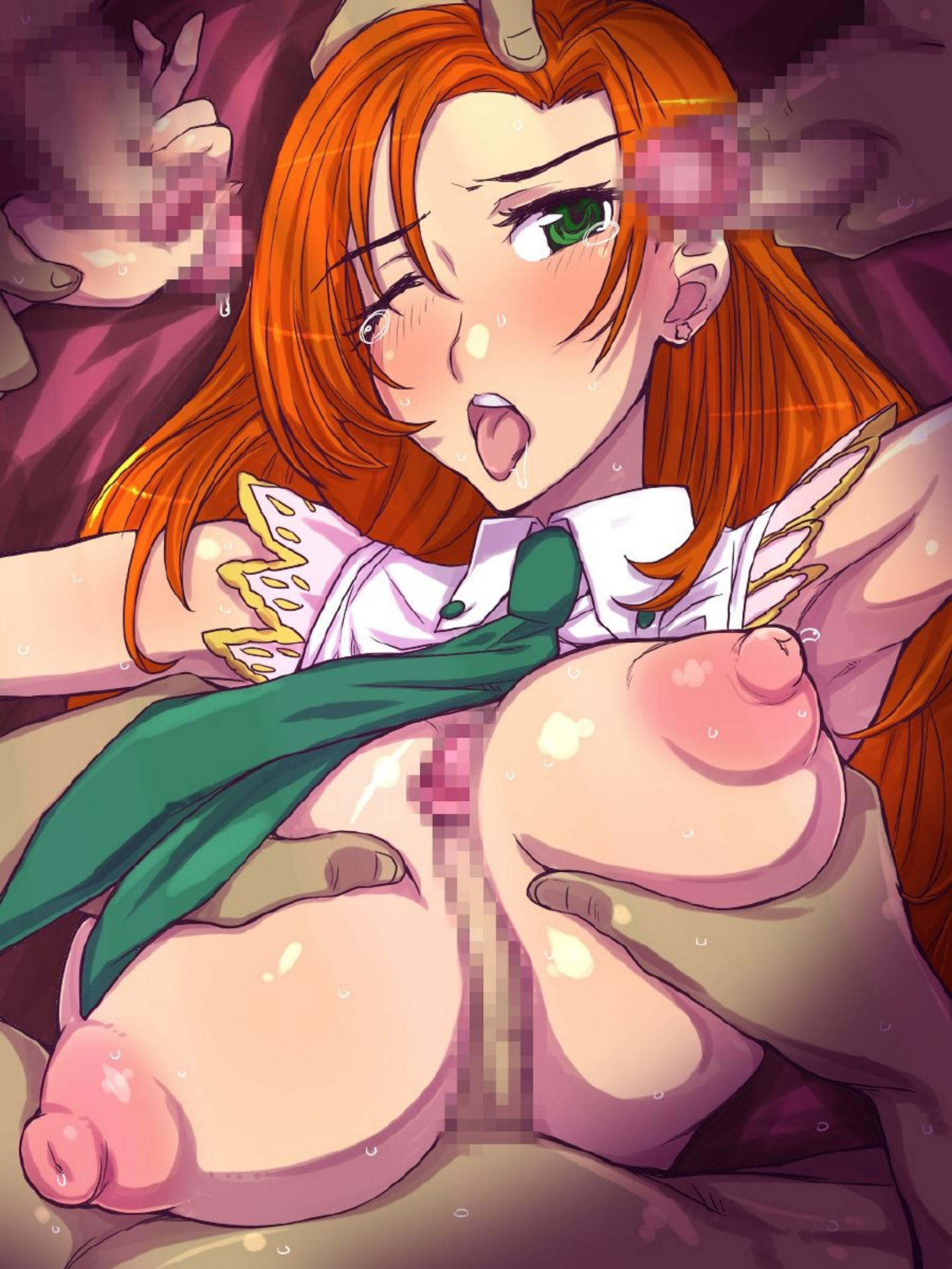
あーあーあー

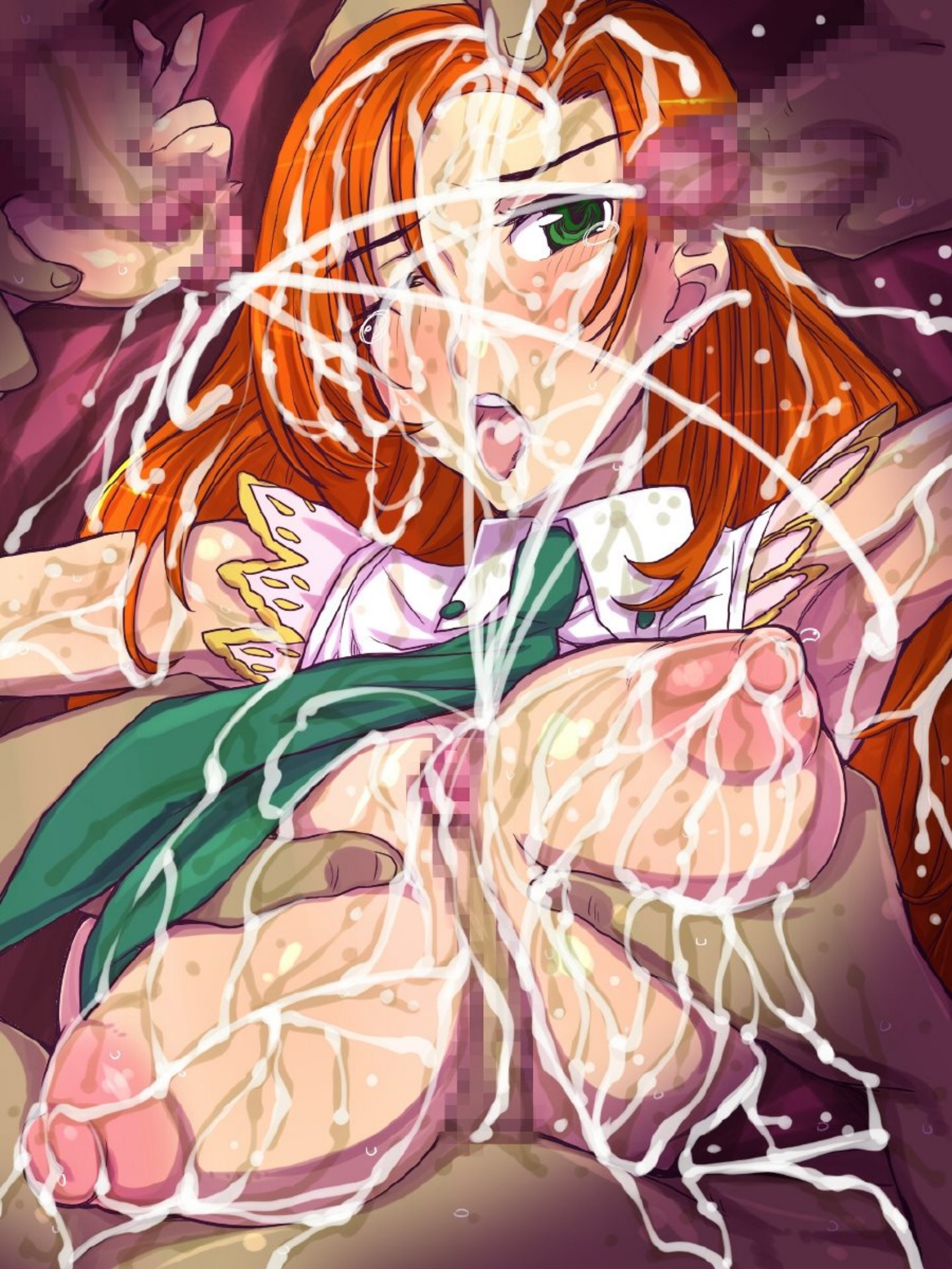
あーあーあーあーあーあー

あーあーあーあー











ハヤッ! はなま...
クタイッ! マッ! マッ!

ハッ! ハッ!
ヤッ! ヤッ!
だ...
た...
め...

クタイッ! マッ! マッ!
クタイッ! マッ! マッ!

クタイッ! マッ! マッ!
クタイッ! マッ! マッ!

アッ!
アッ!
アッ!

アッ!
アッ!
アッ!







おーっ

おっおっおっ

おっおっおっ

おっ

おっ

おっ

おっおっおっ

おっ

おっ

おっ

おっ

おっ

おっ

おっおっおっ

おっおっおっ

おっおっおっ

おっ

おっおっおっ

おっおっおっ

おっ











ゴクゴク

ジュウジュウ

どろり

ゴクゴク

ジュウジュウ

どろり

ジュウジュウ

どろり

ジュウジュウ

どろり

ジュウジュウ

どろり

ジュウジュウ

ジュウジュウ

どろり

ジュウジュウ

どろり

ジュウジュウ

ジュウジュウ

どろり

ジュウジュウ

ジュウジュウ

ジュウジュウ







おっぱい

おっぱいおっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おまんこ

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おまんこ

おっぱいおっぱい

おまんこ

おっぱいおっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい

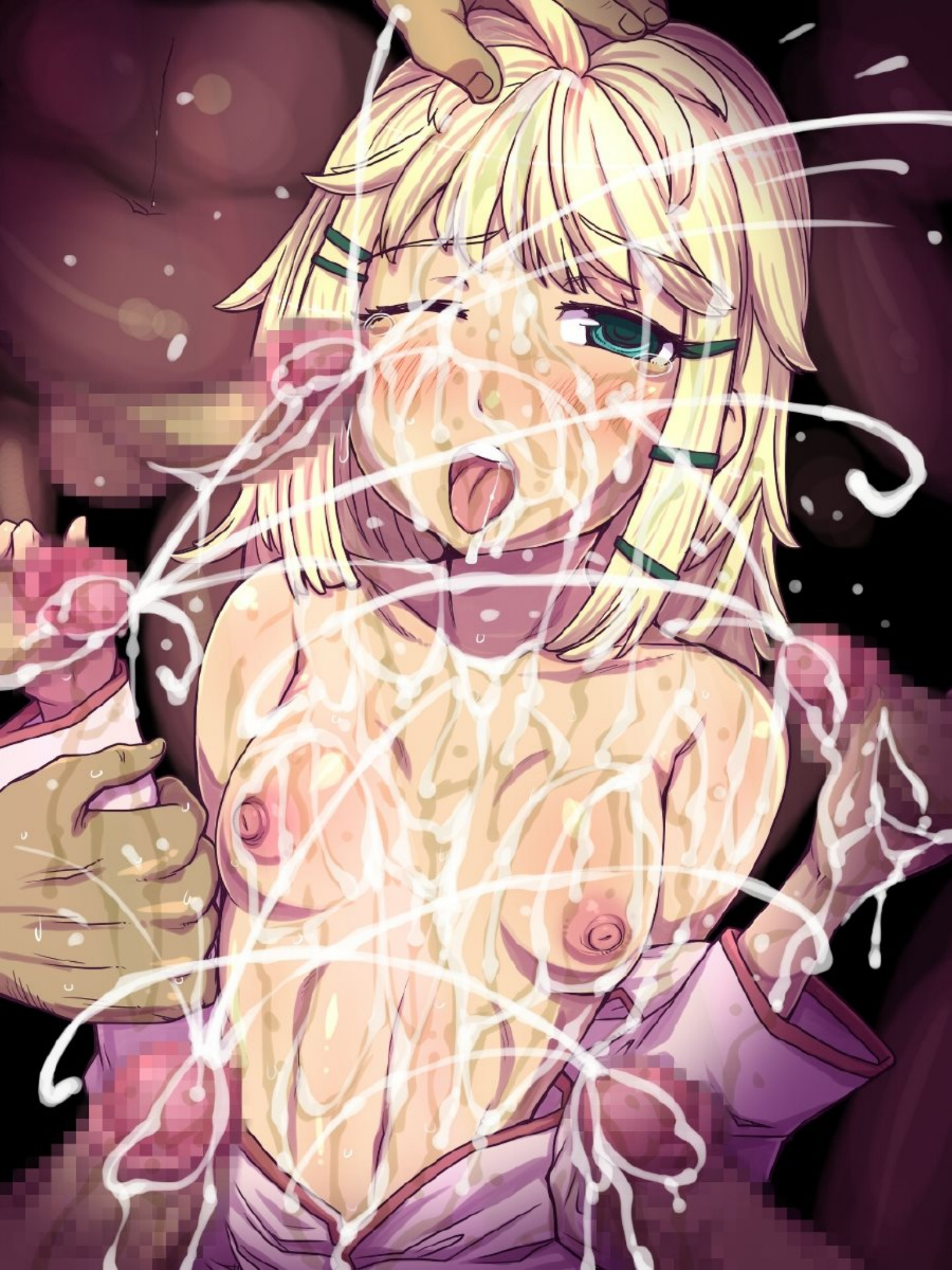
おっぱいおっぱい

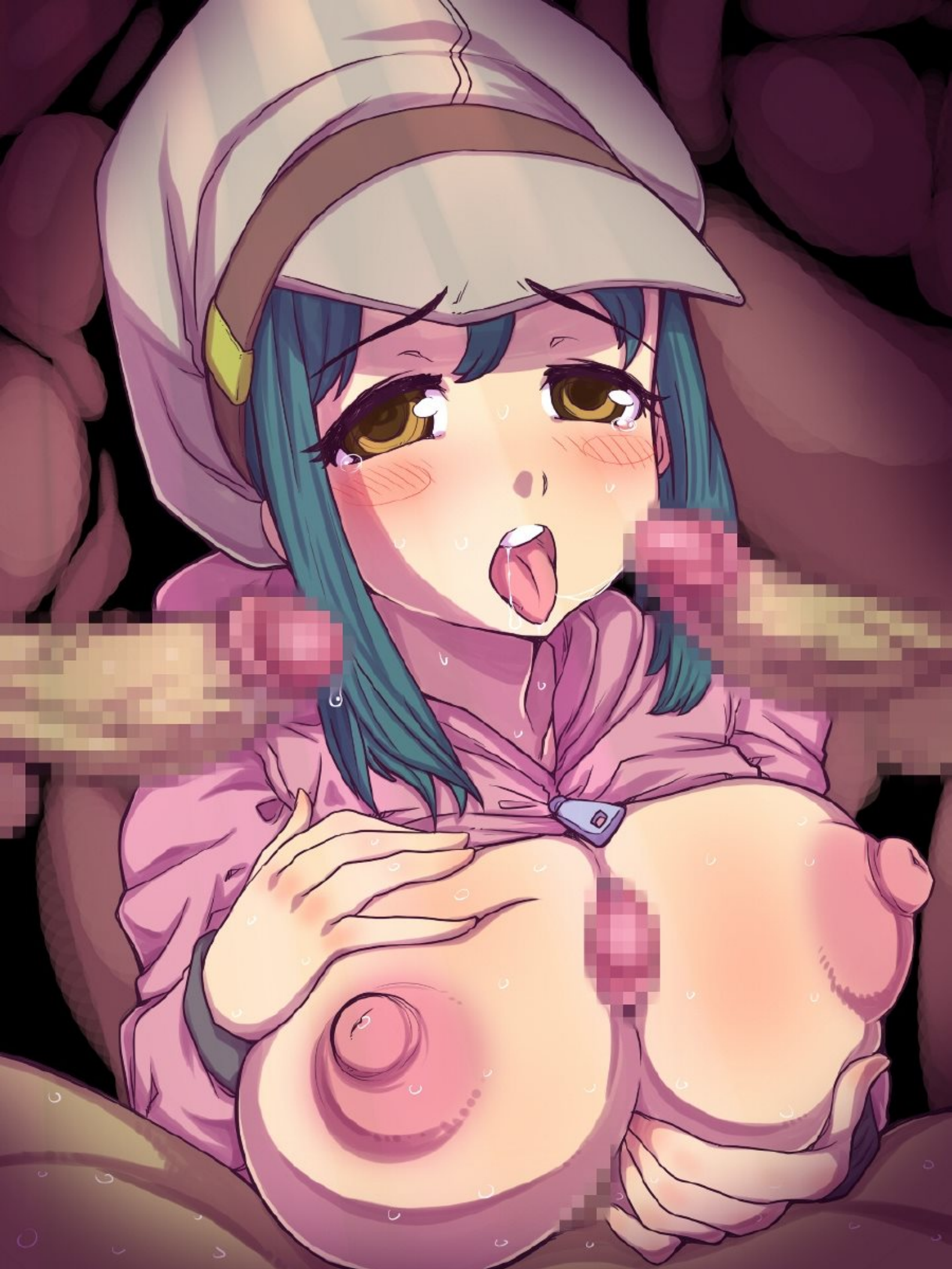
おっぱい

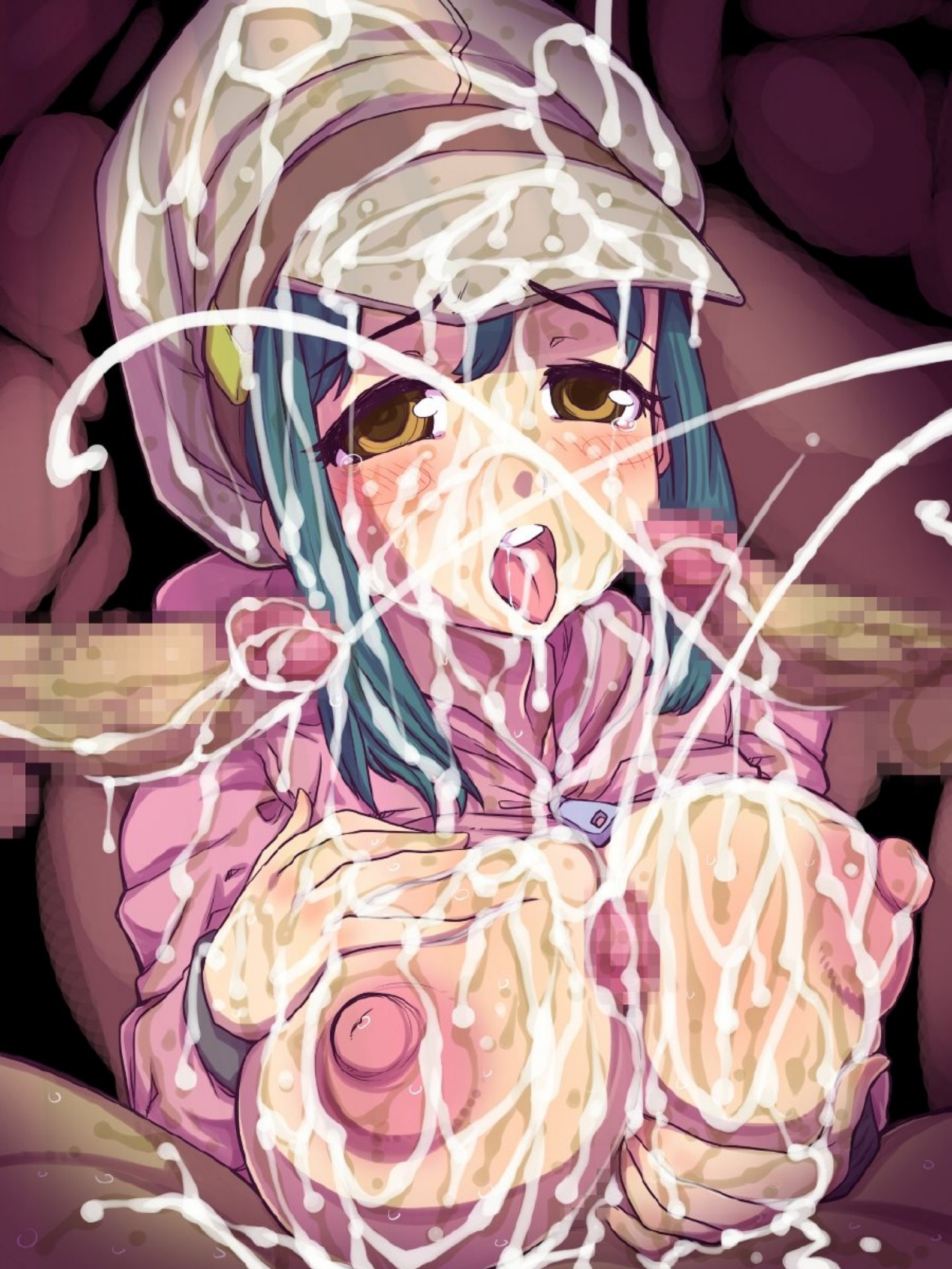
おっぱい

おっぱい











アッ! ぽろぽろ

ぽろぽろ! ぽろぽろぽろ

ぽろぽろ

ぽろぽろ

ぽろ

アッ!

ぽろ

ぽろぽろ

ぽろぽろ

ぽろ

ぽろぽろ

ぽろ

ぽろ

ぽろ

ぽろ

ぽろ

ぽろ

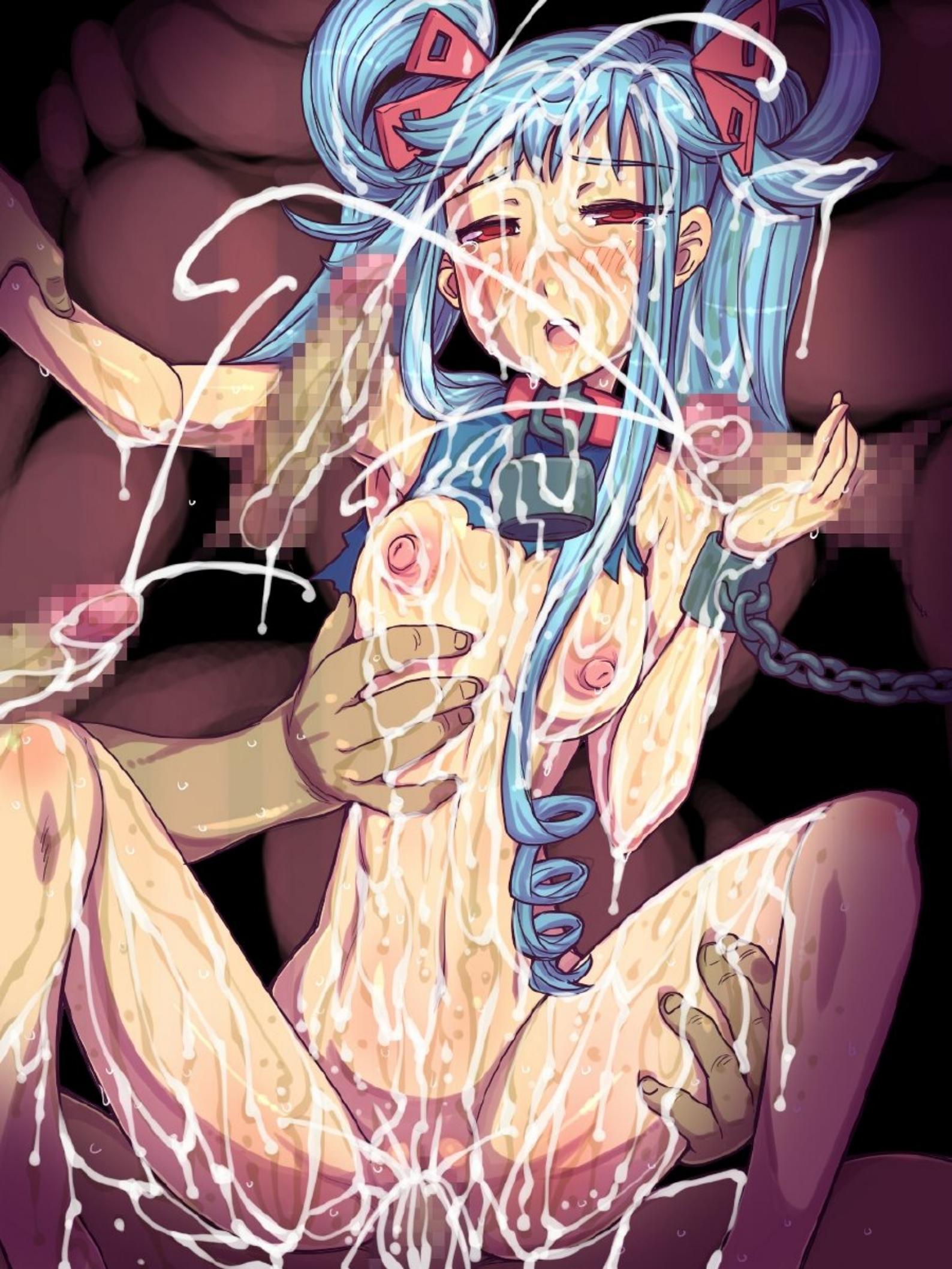
ぽろ

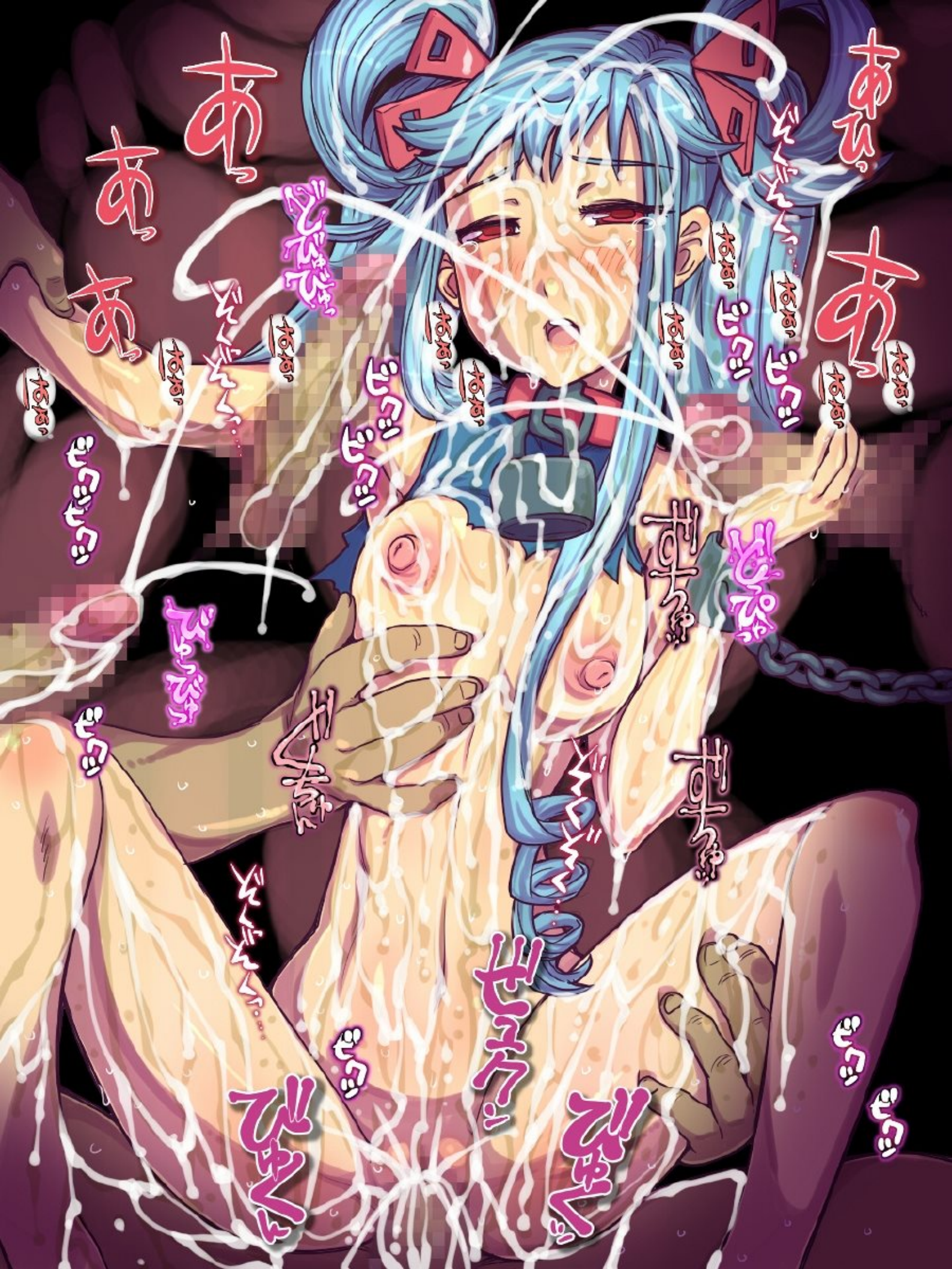
ぽろ

ぽろ

ぽろ













「いただきます...」
「いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

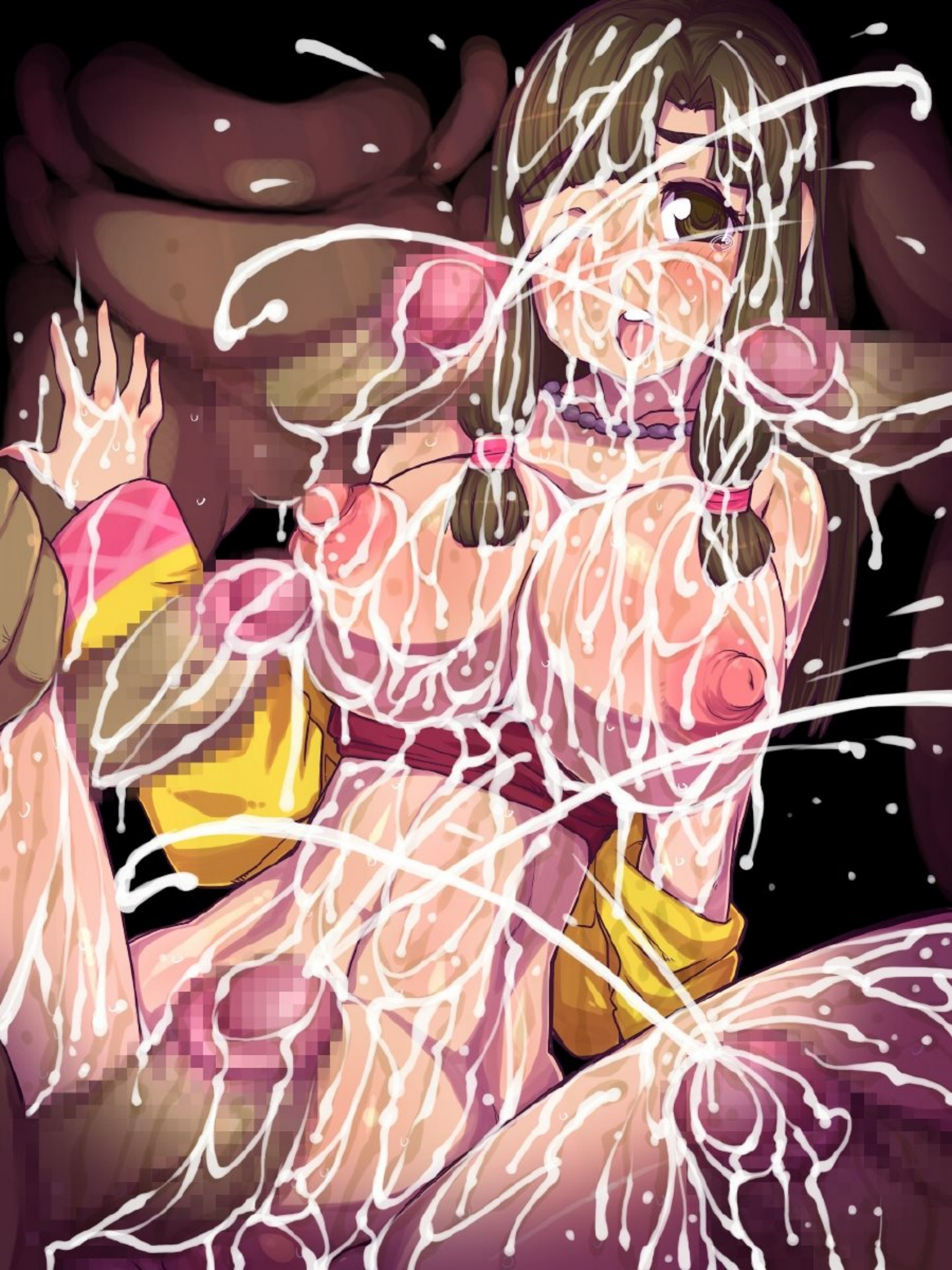
「いただきます」

「いただきます」











牛乳が...
まわって...
あんなに...
いっぱい...
あんなに...
いっぱい...
あんなに...
いっぱい...

あんなに...
いっぱい...
あんなに...
いっぱい...

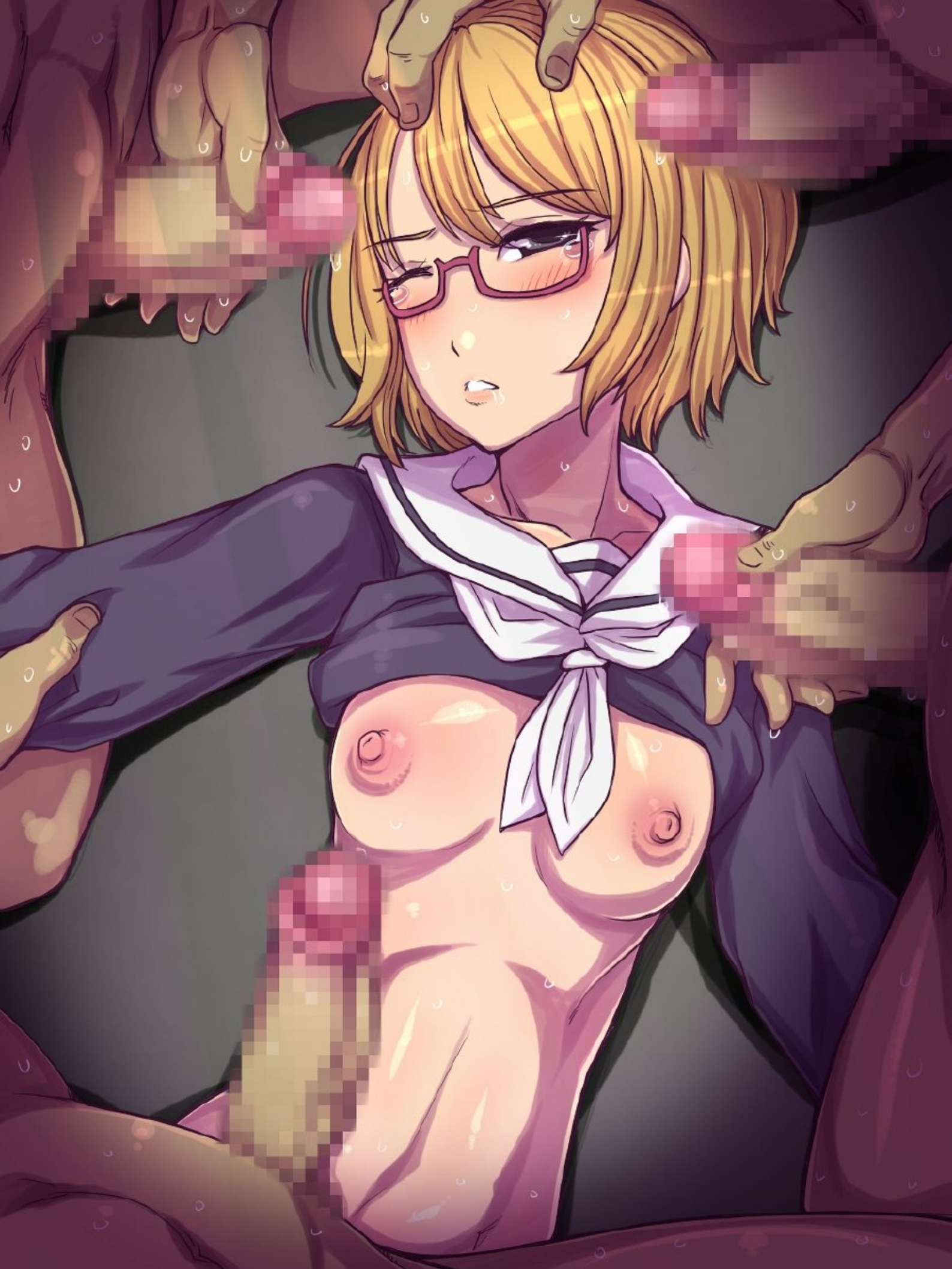
あんなに...
いっぱい...
あんなに...
いっぱい...
あんなに...
いっぱい...
あんなに...
いっぱい...
あんなに...
いっぱい...
あんなに...
いっぱい...



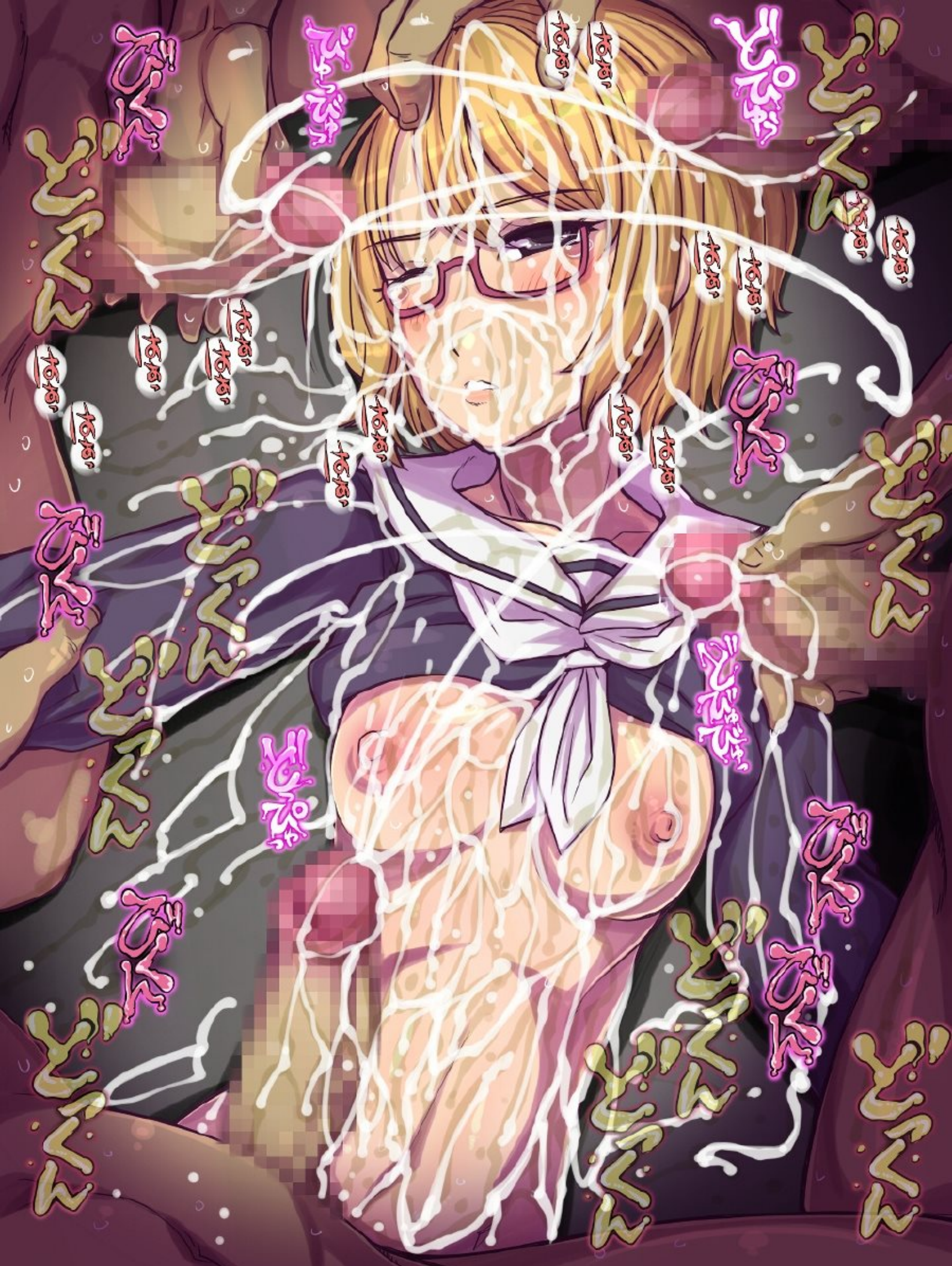




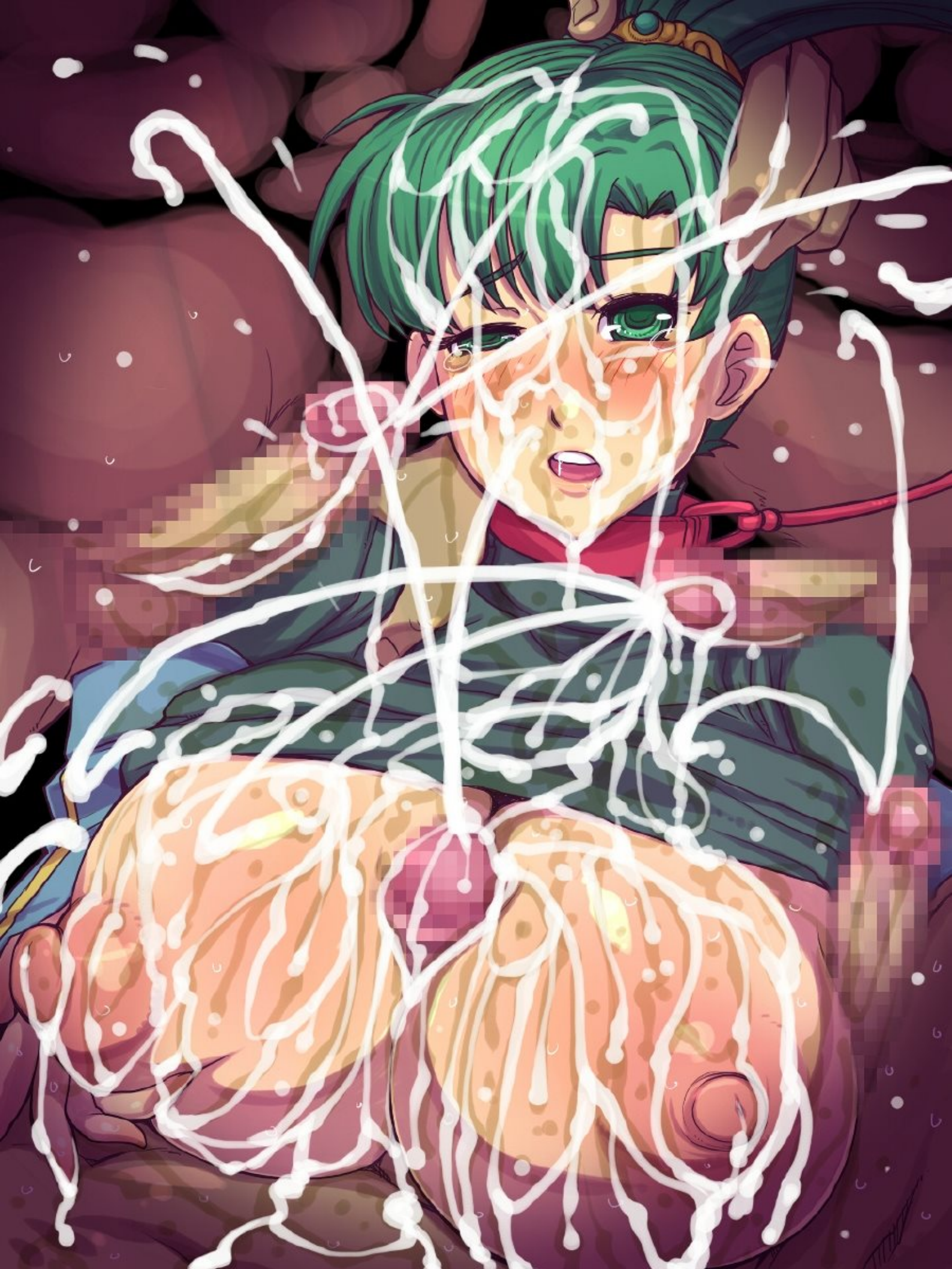














Yes! Yes! Yes!

Yes! Yes! Yes!

Yes!

Yes! Yes! Yes!

Yes! Yes! Yes!

Yes! Yes! Yes!

Yes! Yes! Yes!

Yes!

Yes!

Yes!

Yes!

Yes!

Yes!

Yes!

Yes!

Yes!

Yes! Yes! Yes!

Yes!

Yes!

Yes!

Yes! Yes! Yes!

Yes! Yes! Yes!

Yes! Yes! Yes!

Yes!







ゴッゴッ

ジュウジュウ

ゴクゴク

ジュウジュウ

ゴッゴッ

ジュウジュウ

ゴクゴク

ジュウジュウ

ゴッゴッ

ジュウジュウ

ゴッゴッ

ジュウジュウ

ジュウジュウ

ゴッゴッ

ジュウジュウ

ゴッゴッ

ジュウジュウ

ゴッゴッ

ジュウジュウ

ゴッゴッ

ジュウジュウ

ゴッゴッ

ジュウジュウ

ゴッゴッ

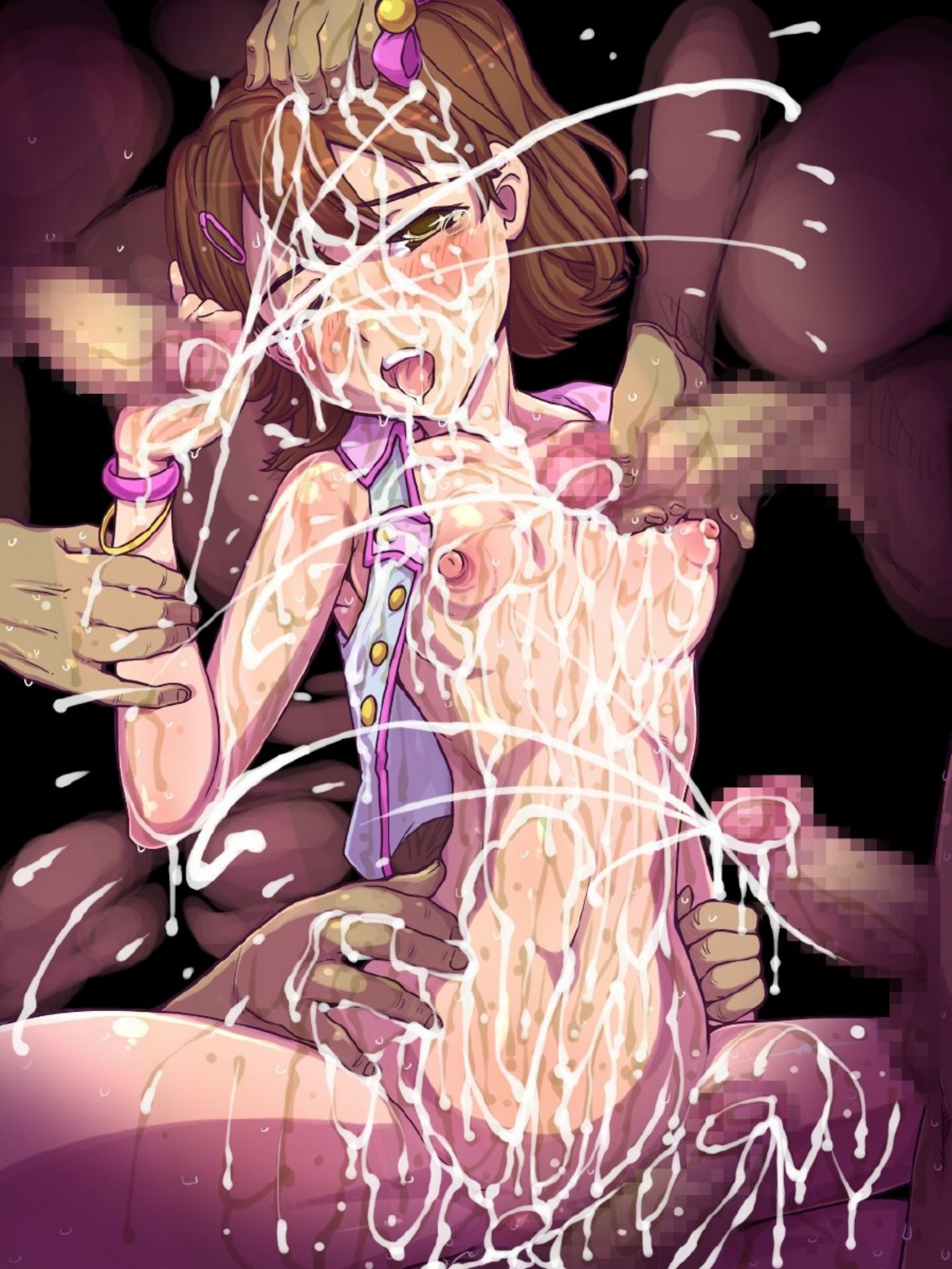
ジュウジュウ

ゴッゴッ

ジュウジュウ









1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1







おっぱいニミルク!

おっぱいニミルク!

ミルク

おっぱいニミルク!

ミルク

ミルク

ミルク

ミルク

おっぱい

ミルク

おっぱい

ミルク

ミルク

おっぱい







★445枚目FFX ユウナ

淫獣召喚

クリスタルドライブの開発と進展は数多ある幻想の世界との交信を可能にし莫大なる恩恵を世界にもたらした。

しかし、同時に多くの犯罪、差別、虐殺を生み出す。

召喚して使役する側、つまり召喚士が逆に、召喚され使役される側、

つまり、召喚獣になる日が来ると、誰が想像しただろうか。

「おねがい・・・おねがいだから・・・帰して・・・もう・・・」

今いる世界とは別の世界で、ユウナは召喚士だった。

だから自分が誰かに召喚され、この閉ざされた暗室に引き込まれた事は何が起きたのか理解できた。

「まだ自我を保っていられるとは、なかなかの精神だな」

暗闇から伝わる男たちの気配。

顔も体も暗闇の覆われて、その気配の正体は見えないもののそれが男であるという事は嫌というほど良く分かった。

突き出された肉の竿、勃起した男性器。

パンパンに膨れ上がって、意思を持ってるかのようにひくひくと蠢くそれがまるで自分に当てられたスポットライトの中で光を浴びるかのようにくっきりと見える。

「召喚獣として使役される気持ちはどうかね、ユウナ」



聞こえる声は人のものではないような気がした。
少なくとも、自分の住む世界の住人とは違う。

「おねがい…帰して…こんなの…ひどい…」

「ひどいだと?自分は散々召喚しておいて、自分がされるとひどいのかね?」

分かっていた。簡単に帰してくれないという事は。
しかし異世界という完全に別の世界で、彼女はあまりに無力だった。
それは四肢の自由を奪われているだけでなく、魔力をはじめとする
ありとあらゆるパワーが失われていたからだった。

「安心したまえ、仕事が終われば帰れるよ、君の召喚した者どもと同じように
我々に益をもたらせば帰れるんだ…フフフ」

蟲が隙間に潜り込むかのようにユウナの豊満な胸へはさまれていく男性器。
どうすればいいのかは分かっていた。そんな知識などないはずなのに。

それは召喚獣として召喚される時に、意識に埋め込まれる指令。
敵を滅ぼせ、あるいは虐殺しろ、そしてユウナが埋め込まれた指令は

「オレヲ悦コバセロ」

汚らしい意識、ユウナのカラダをめちゃくちゃに犯し、蹂躪し、
破壊されても修復され、何度も何度も汚す為に召喚行った者の意識。

「いやっ!いやあああああ!」

意識は声になり、拒否の悲鳴を上げるものの、カラダは男を喜ばせる為に
男性器を挟み込み締め付けながらグラインドする。

「そうだ、上手じゃないか…ああ…ずっと見ていたよ、ユウナ」



男性器がびくびくと働かし、射精の瞬間を待ちわびている。

射精というものがどういうものなのか、ユウナは知らないはずなのにそれが来ることを知っている。

召喚獣として、自分はそういう行為のために呼び出されたのだ。陰獣…ユウナの世界でも、肉欲を満たす為に性の快楽を得る召喚獣を呼び出す方法があると習った。

禁呪として扱われるというより、恥ずべき行為で汚らわしいもの。清純な恋愛の果てのセックスで満たすべき、性の行為を獣に押し付け我欲を満たす行為…

そして、その陰獣として自分が召喚されたという現実。崇高な精神を良しとしてきた自身の技が汚され、拳句自分も弄ばれて汚されるという屈辱。

そしてそんな思いも打ち消されるほど、卑猥で、淫乱で、肉欲を求めるように熱を帯び続ける自分のカラダ…

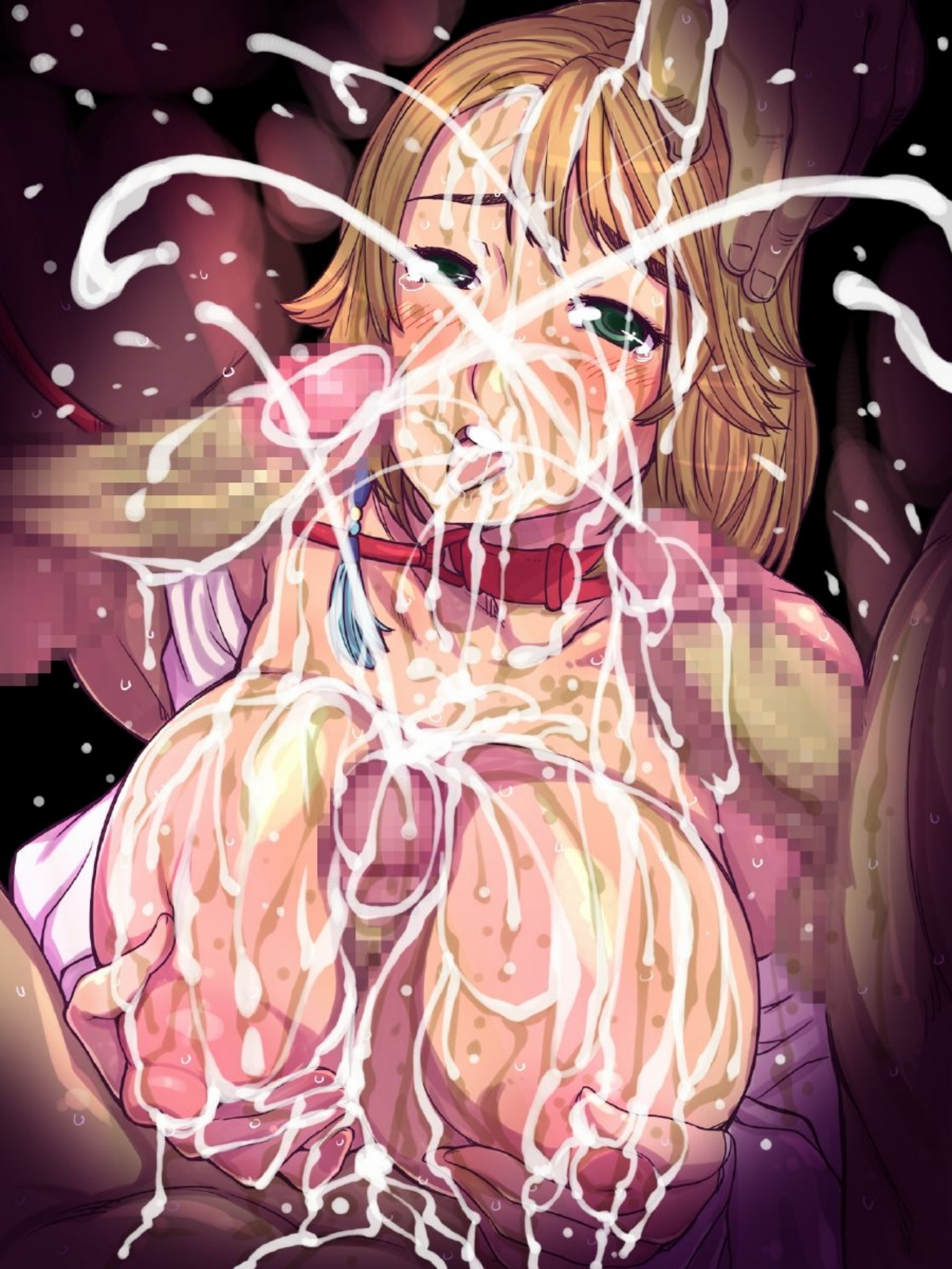
「ああ!いやあ! いくっ…でるう…汁が…ああああ!」

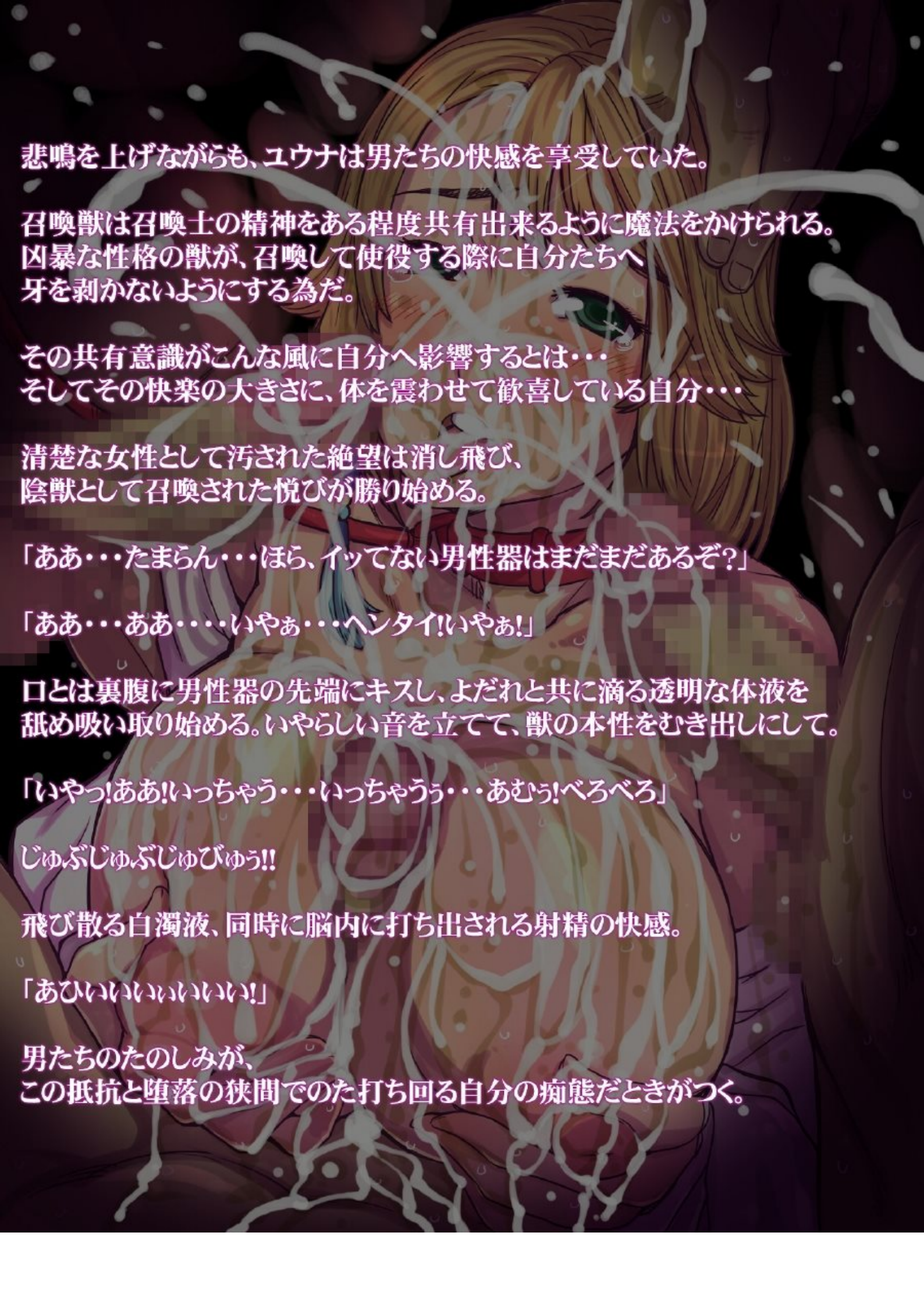
「ウウツ!」

男のうめき声と共に、果たしてそれは飛び出してきた。快楽の溶け合った体液。男の快感とともに打ち出される、肉欲のマグマ。

迸り、粘性を持ったまま顔に飛び掛ったそれは、上気したユウナの頬を滴り、帰るかのように胸の上、男性器の入り口へと滴り落ちていく。

「いやっ!いやあ!いやああああ!」





悲鳴を上げながらも、ユウナは男たちの快感を享受していた。

召喚獣は召喚士の精神をある程度共有出来るように魔法をかけられる。凶暴な性格の獣が、召喚して使役する際に自分たちへ牙を剥かないようにする為だ。

その共有意識がこんな風に自分へ影響するとは…
そしてその快樂の大きさに、体を震わせて歓喜している自分…

清楚な女性として汚された絶望は消し飛び、
陰獣として召喚された悦びが勝り始める。

「ああ…たまらん…ほら、イッてない男性器はまだまだあるぞ？」

「ああ…ああ…いやあ… Hentai! いやあ！」

口とは裏腹に男性器の先端にキスし、よだれと共に滴る透明な体液を舐め吸い取り始める。いやらしい音を立てて、獣の本性をむき出しにして。

「いやっ! ああ! いっちゃう… いっちゃう… あむう! べろべろ」

じゅぶじゅぶじゅびゅう!!

飛び散る白濁液、同時に脳内に打ち出される射精の快感。

「あひいひいひいひいひい!!」

男たちのたのしみが、
この抵抗と墮落の狭間でた打ち回る自分の痴態だときがつく。

女性を召喚し犯すだけなら自分より美しくかわいい女性などいくらでもいる。

ユウナである必要性、それは、召喚士として状況を理解できる知恵と召喚された際の指令に自身を完全に失わないだけの精神力を持っている事。

それが当てはまる素材だったからだ。

「あぐう!あひい!ひいひい!いくいくいく!だめだめだめだめええ!」

抵抗すればするほど男たちは喜ぶのだ。
散々女性を召喚し、肉欲のペットにしてきた彼らだからこそ抵抗する素材が欲しかったに違いない。

「でるぞ…全員一斉だ…
こんどのは凄い…快感だぞ…覚悟しろ…壊れないようにな」

ユウナたちも、素材の為、目的の為、召喚獣を散々使役してきたのだ。
そう、だから分かる、彼らが望むことのために、自分を弄ぶ理由が。

「ウッ!」「でるう!」「いぐうう!」

幾つもの快樂が一同にユウナの中へ流れ込む。
壊れそうになる自分を、抵抗の悲鳴で必至に守る。

しかしもうカラダはその快樂のために、男性器をしごき、しゃぶり、挟み、射精の瞬間をおねだりするケダモノに成り下がっていた。

「人間じゃない…ケダモノ…ヘンタイ…」

涙が溢れ、滴り落ちたはずだった。
しかし、それはもう顔にかかりまくった精液のせいで、どこへ消えたか分からない。

彼女のいった言葉も、男たちのことなのか、自分のことなのか分からなくなっていた…。

END



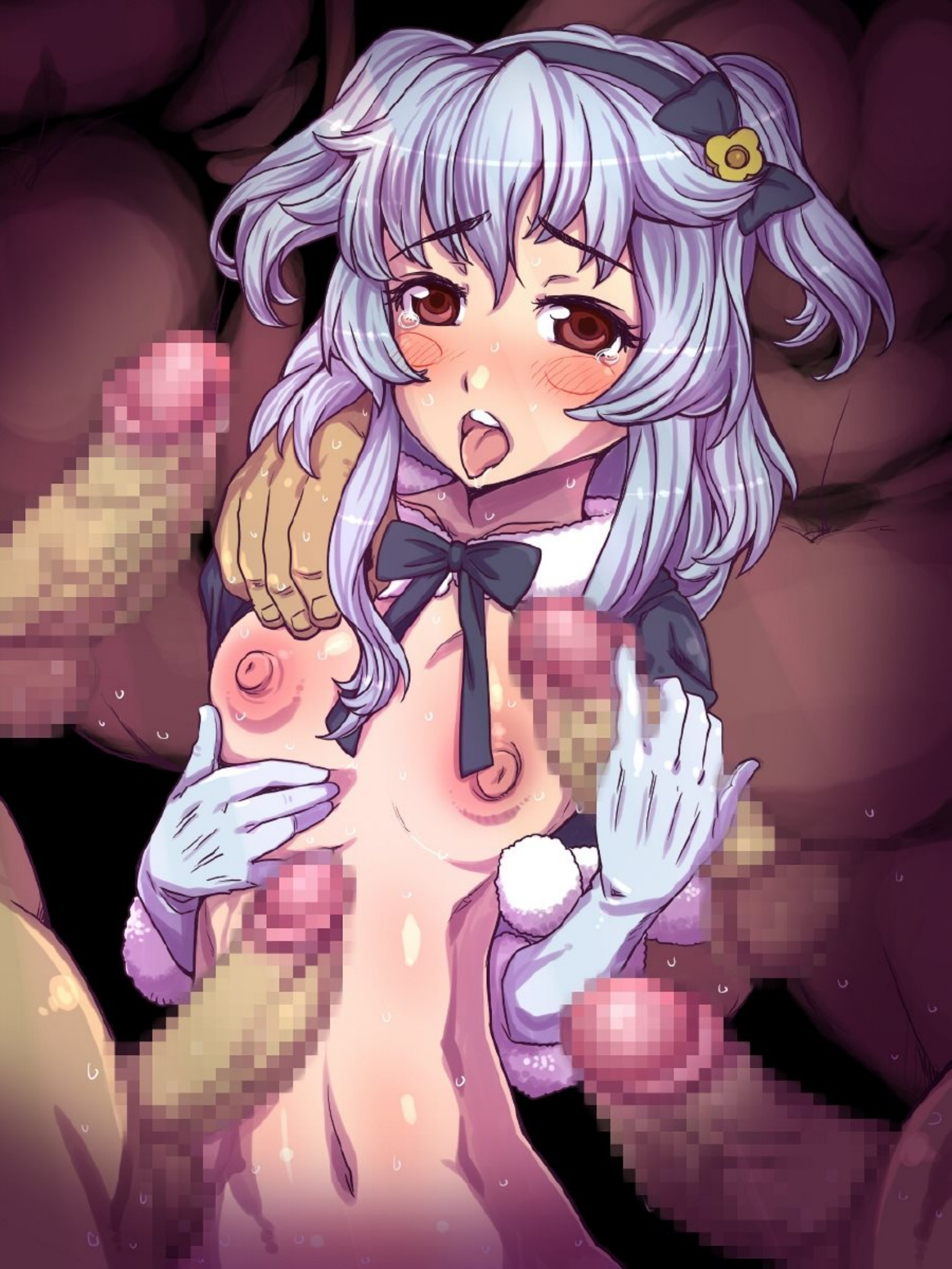


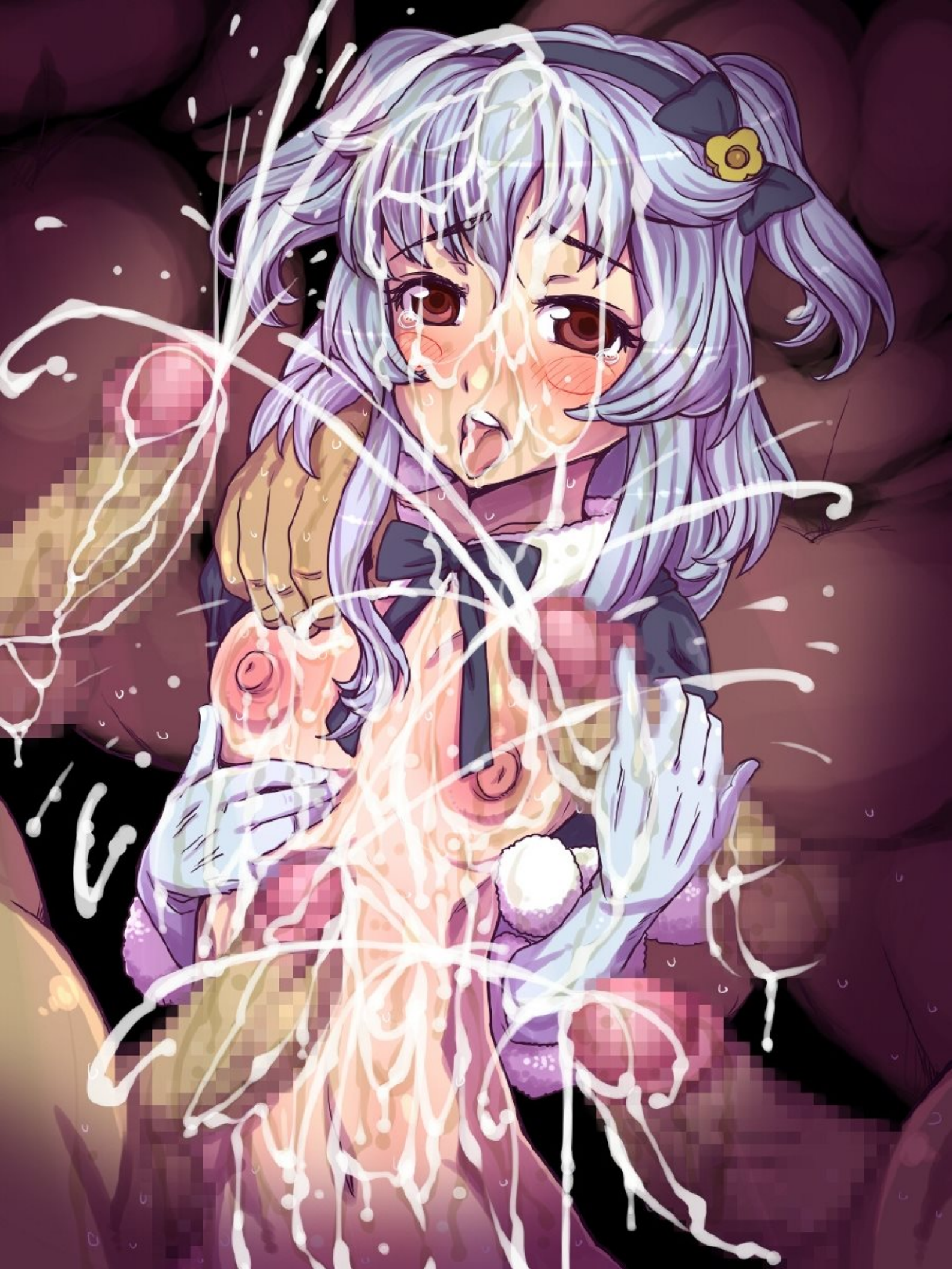


















ゴクゴクゴクゴク

ゴッ

ゴクゴクゴクゴク

ゴッ

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク
ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク







うわっ！おっぱい...
顔が...

おっぱい...
おっぱい...
おっぱい...

おっぱい...
おっぱい...

おっぱい...
おっぱい...

おっぱい...
おっぱい...
おっぱい...

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい

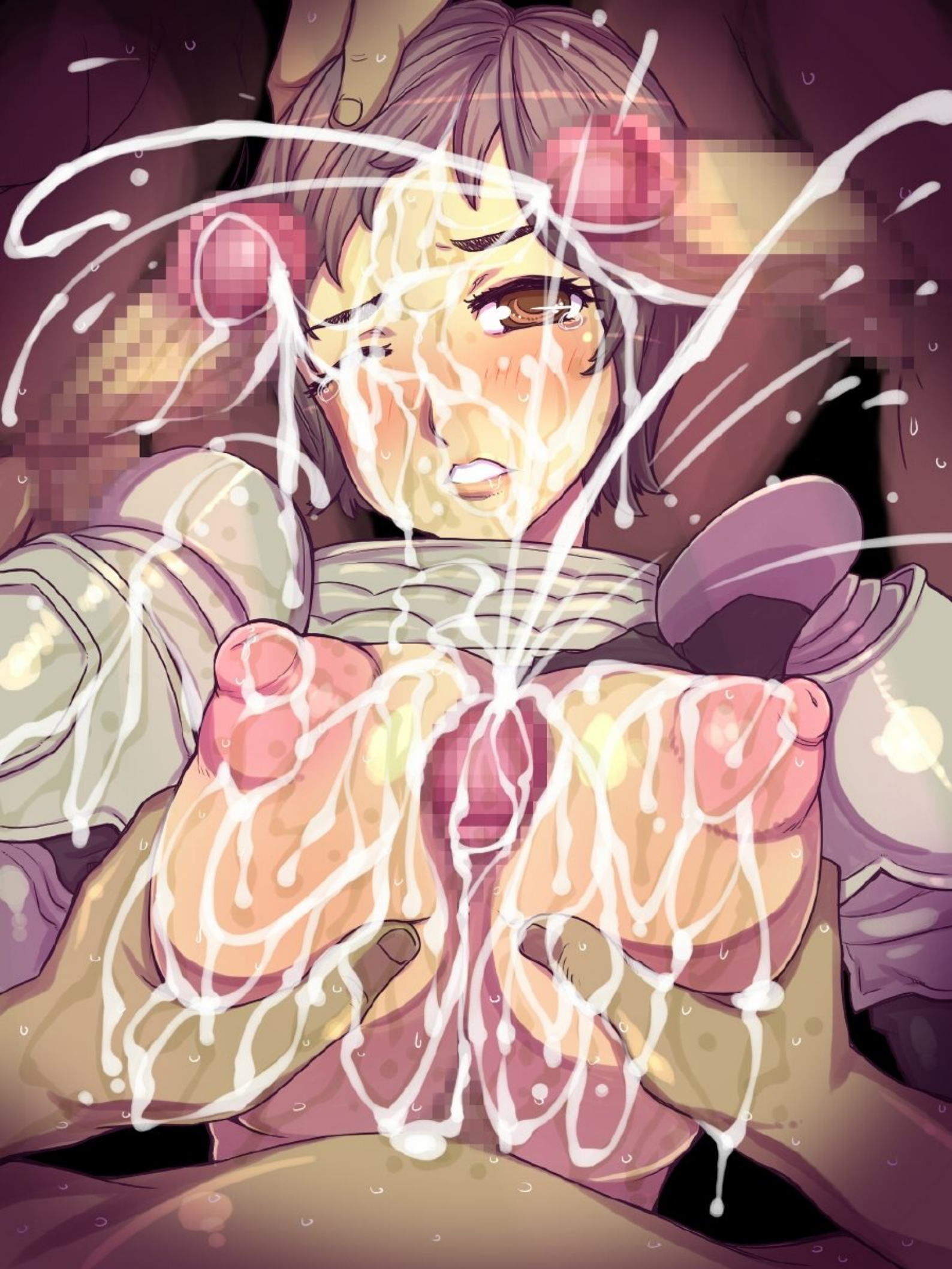
おっぱい

おっぱい

おっぱい...
おっぱい...

おっぱい...
おっぱい...







Handwritten pink text in the top right corner.

Large handwritten pink text in the upper right quadrant.

Handwritten pink text in the middle right area.

Handwritten pink text in the middle right area.

Handwritten pink text in the lower middle area.

Handwritten pink text in the lower middle area.

Handwritten pink text in the bottom center area.

Large handwritten pink text in the middle left area.

Handwritten pink text in the middle left area.

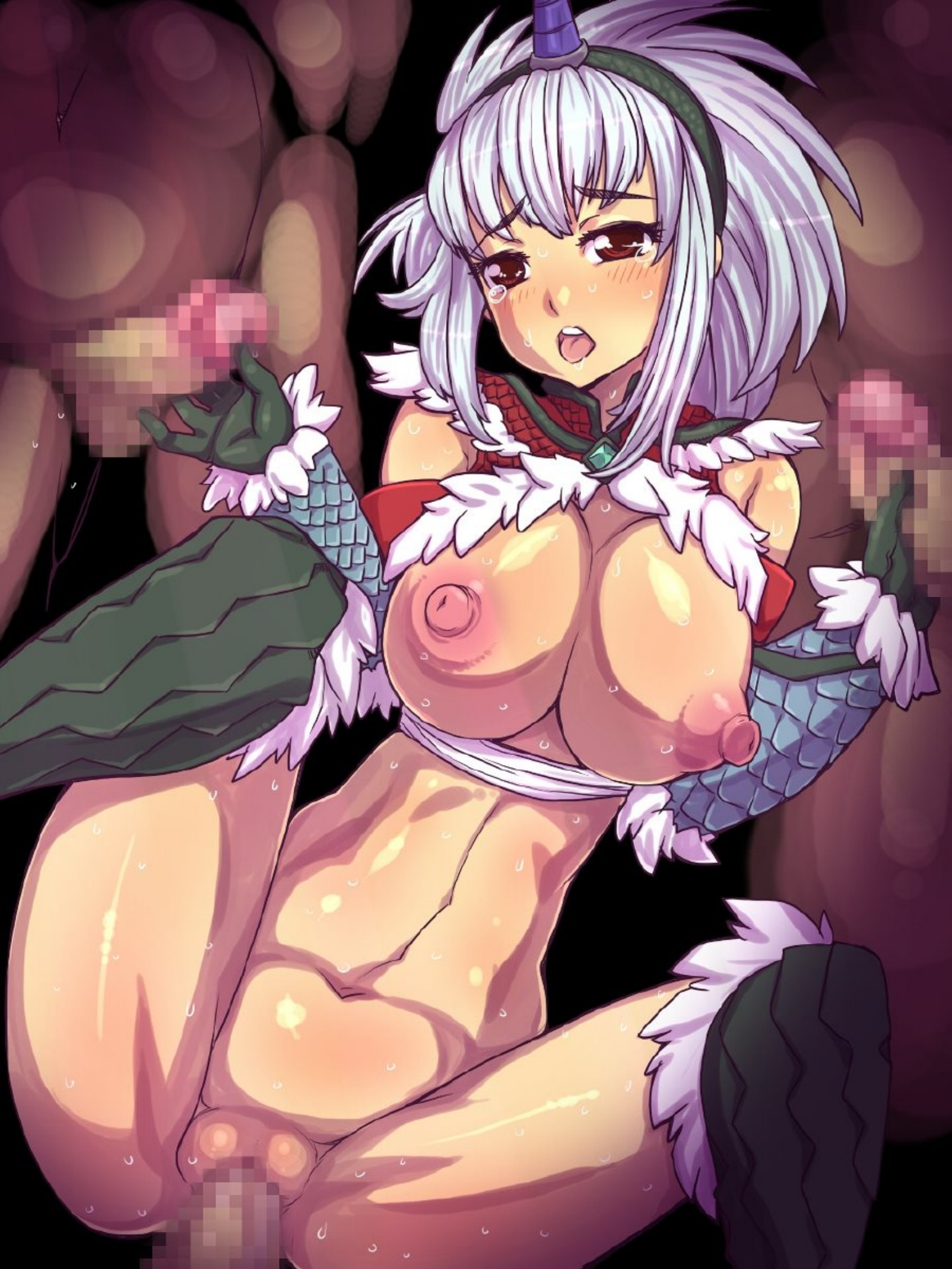
Handwritten pink text in the top left area.

Handwritten pink text in the top left area.

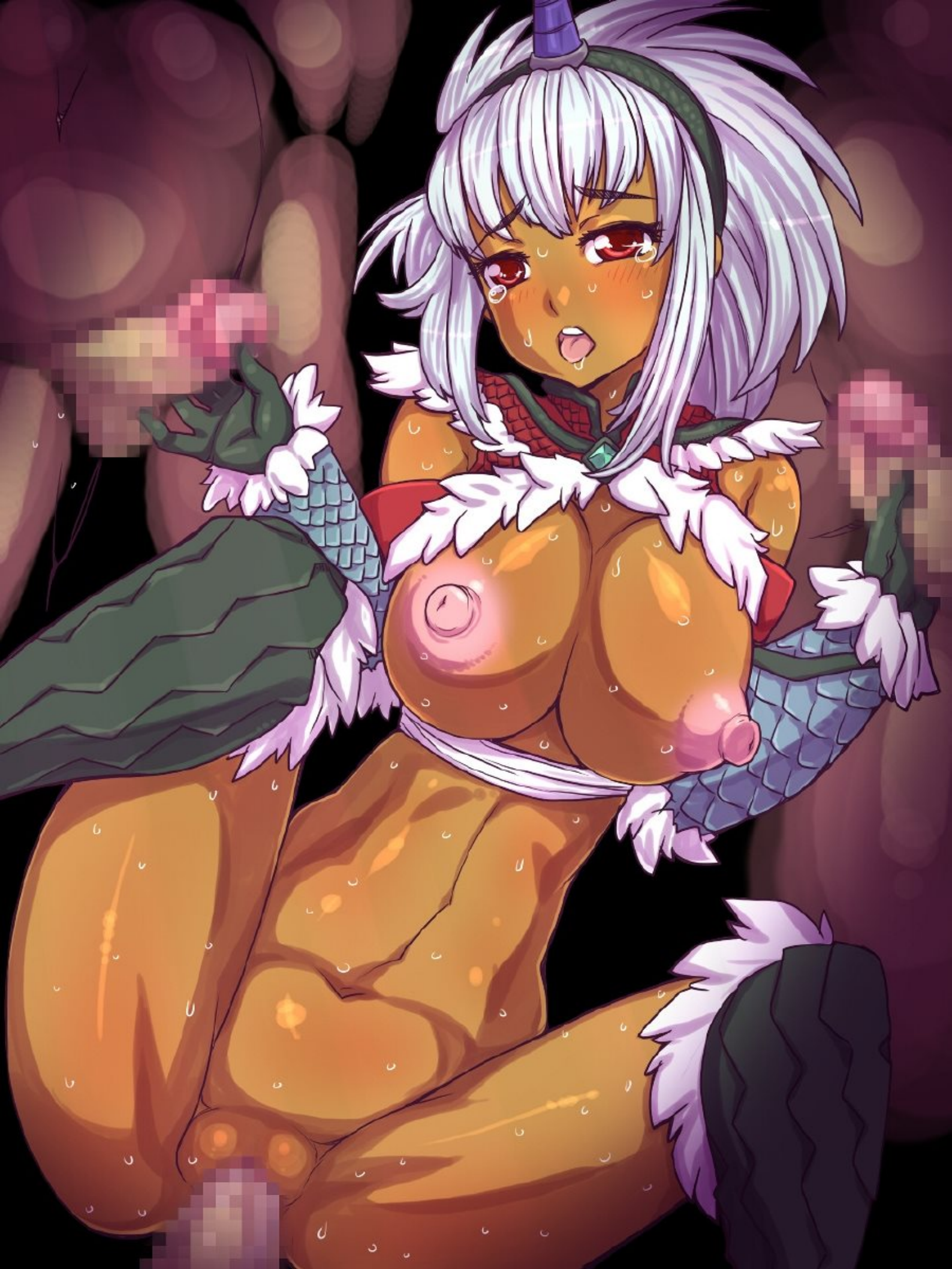
Handwritten pink text in the top left area.

Handwritten pink text in the middle left area.

Handwritten pink text in the bottom left corner.







★452枚目モンハン 女麒麟装備黒

成人の儀式

麒麟装備を見ると思い出す、俺の村であった、成人の儀式。褐色の娘を村外から拿捕して来て、成人する若者達の精液で白く染めるという土着の儀式だ。

秘儀であるそれは儀式の日まで知らされる事はなく、その行為の異質さからも他言されることも、したいとも思わない儀式だ。

その儀式は日付が変わる頃行われた。カクサンの木の葉で作った腰当だけを装着して儀式用に作られた大きな木の折に入れられる。

成人する男は俺も含めて5人だった。

「黒い麒麟をつるぎで貫き、白い血に染めよ」

長老がしゃがれた声でそういうと、かがり火ににが虫の腸を煎じた粉を丸めた玉が投げ込まれる。いぶされた煙は誘淫効果と精神の高揚が得られ、俺たちは否応なく性の高揚感に包まれる。

「ああ!あひい!あひい!い!」

艶かしくのた打ち回る麒麟装備の女。既に誘淫剤と錯乱作用のある葉によってひとりみだれている。

その艶かしく蠢くカラダは、カワズの殿油でどろどろにされていてかがり火のあかりを照り返して妖艶な舞で踊る魔獣のようだった。



「ああ～!あああ!

俺は朦朧とした頭で黒麒麟を抱き抑えようとする。
ぬめつく油ですべり、錯乱効果のある煙で思うように捕らえられない。

「ああん!あひい!いぐうう!

他の男が乱暴に乳房を掴もうとするが、やはりぬめり、はじけ、それを繰り返すことでぶるんぶるんと嫌らしくその果実は揺れ悶える。

「いぐう!だすう! おらあ!しゃぶれえ! ああ!あひい!い!

勃起したペニスを顔に押し当てた男が、それだけで射精した。
勢い良く飛び出す精液。白く粘つく液は黒麒麟の褐色の肌に後を残しまるで剣撃の後のように一文字に顔を彩った。

「あうう!あう!

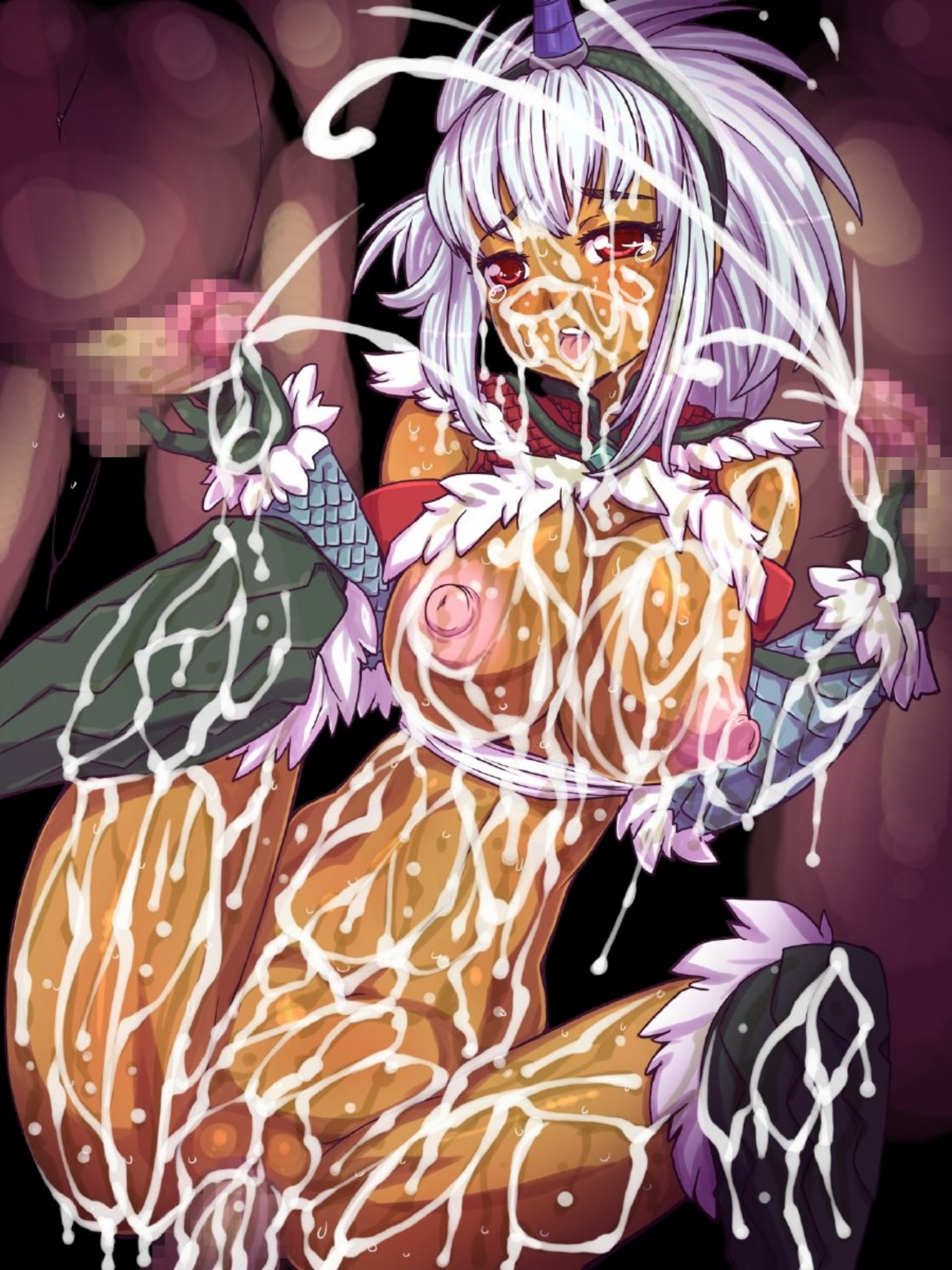
二撃、三撃と射精は続く、見る間に白濁液に染め上げられていく黒麒麟。
白い血を噴出してのた打ち回る魔獣のように、体中に体液とよだれを垂れ流してのけぞる。

俺は男達を押しおけ、黒麒麟に跨ると夢中になって腰を突き出した。
何度も空振りし、狙った膣の入り口には突き刺さらない。

黒麒麟の油まみれの腹に俺は腰をこすりつけ、
あまりの気持ちよさに気が遠くなる。

「あっ!あっ!ああ!あああ!

背筋を走る快感の衝動。体中が絶頂の快感でぶるぶると震えて
俺を支配する感覚はペニスから噴出すびゅっびゅっという射精感だけになる。





一瞬意識が消えるほどの絶頂感。
その間も俺は腰を動かし続け、黒麒麟に止めをさすべく膣穴を探し続けている。

ようやくぼんやりと戻った意識で、黒麒麟の女性器の入り口を探し当て、そこへ熱くいきり立った俺のツルギをつきたてる。

「ああああ! ああひいいいい〜! あっ! アンツ! あん! アンツ! あん!

悲鳴にも似た黒麒麟のあえぎ声。獣が絶命する時のビクンビクンと震えるあの慟哭にも似たからだの動きに、俺は抗いがたい絶頂感を覚える。

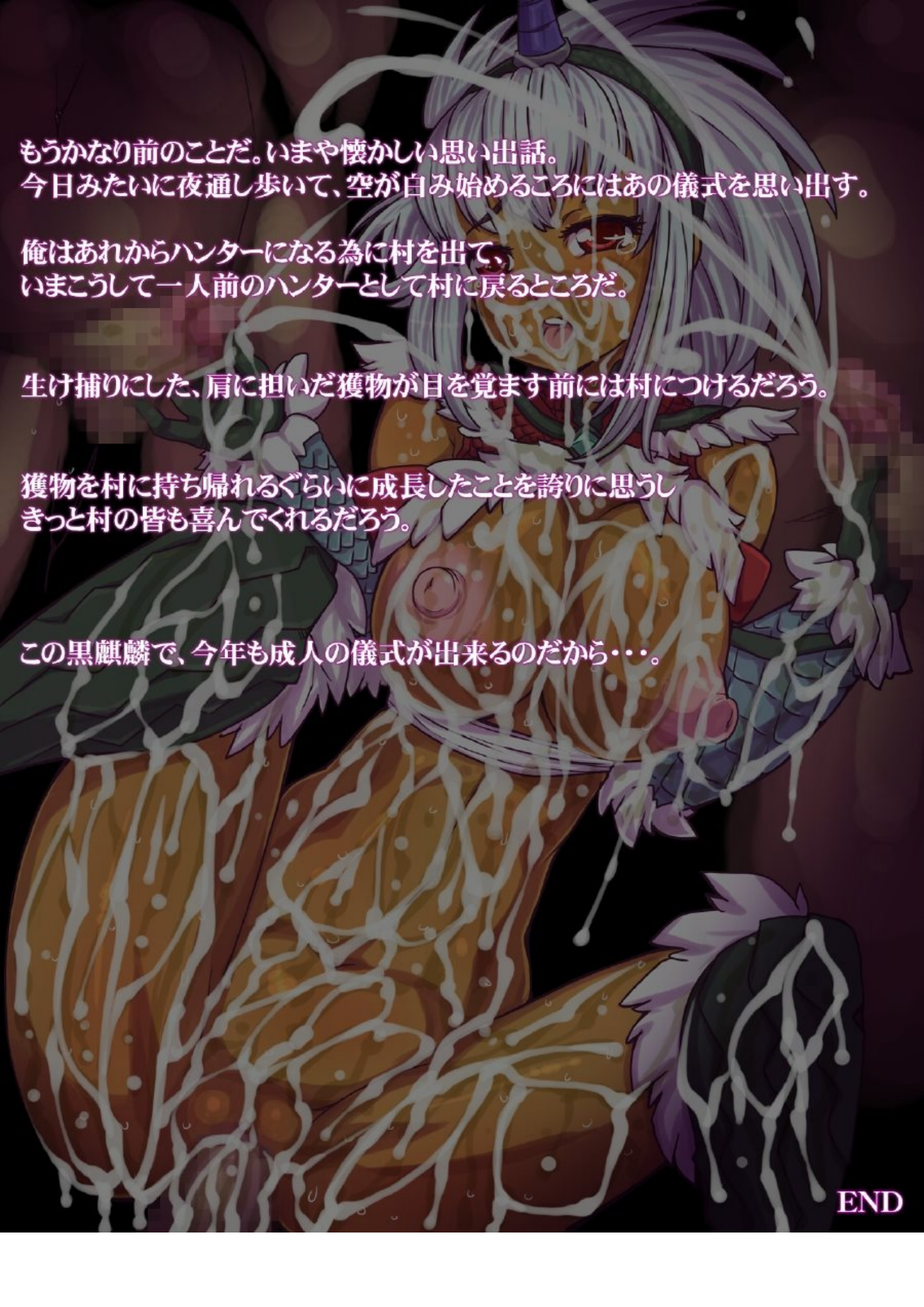
「うおお! いぐっ! いぐっ! オッ! オウツ! オウツ!

なんども腰を突き出す。ツルギを深く差し込むために、油と精液と汗で突き刺された穴はどろどろになり、引き抜く度にかりをはなさんと膣穴の肉壁が吸い付き、その締め付けに耐え切れず絶頂し、射精する。

腰を数回突き出すだけで、俺は射精していた。

何十回も吐き出し、膣から溢れる白濁液は黒麒麟の体中に飛び散って真っ白になっていた。俺の意識も、真っ白になっていく。

気がつくどぐったりと気絶した黒麒麟を抱きしめ、懸命に腰を振る男がいた。空は白み始めていて、口から意味不明なうめき声をあげる黒麒麟役の女性とよだれを垂れ流し、血走った目で腰を突きたて続ける同じ村の男だけが狂乱の余韻の熱を帯びて蠢き続けていた。



もうかなり前のことだ。いまや懐かしい思い出話。
今日みたいに夜通し歩いて、空が白み始めるころにはあの儀式を思い出す。

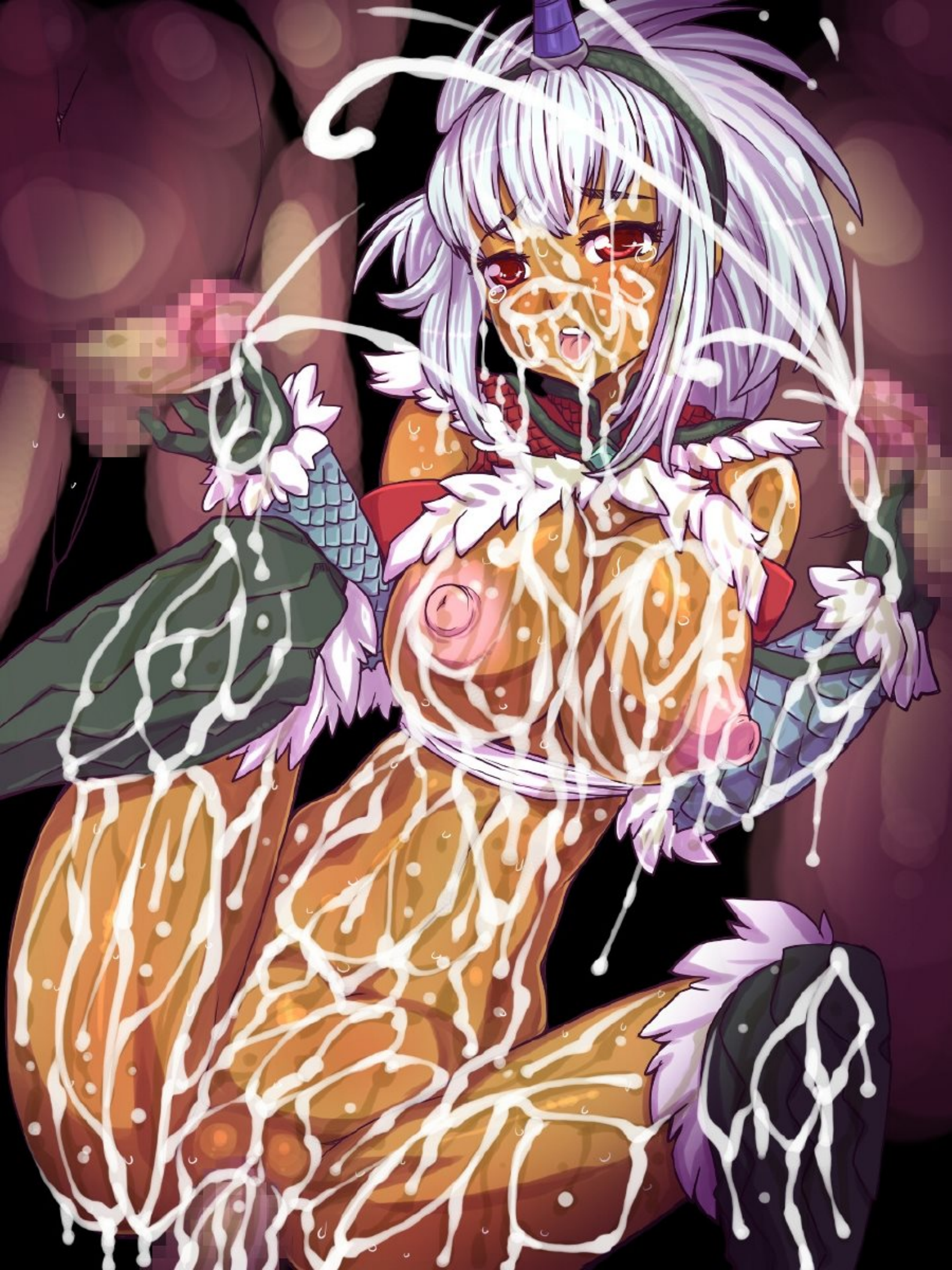
俺はあれからハンターになる為に村を出て、
いまこうして一人前のハンターとして村に戻るところだ。

生け捕りにした、肩に担いだ獲物が目を覚ます前には村につけるだろう。

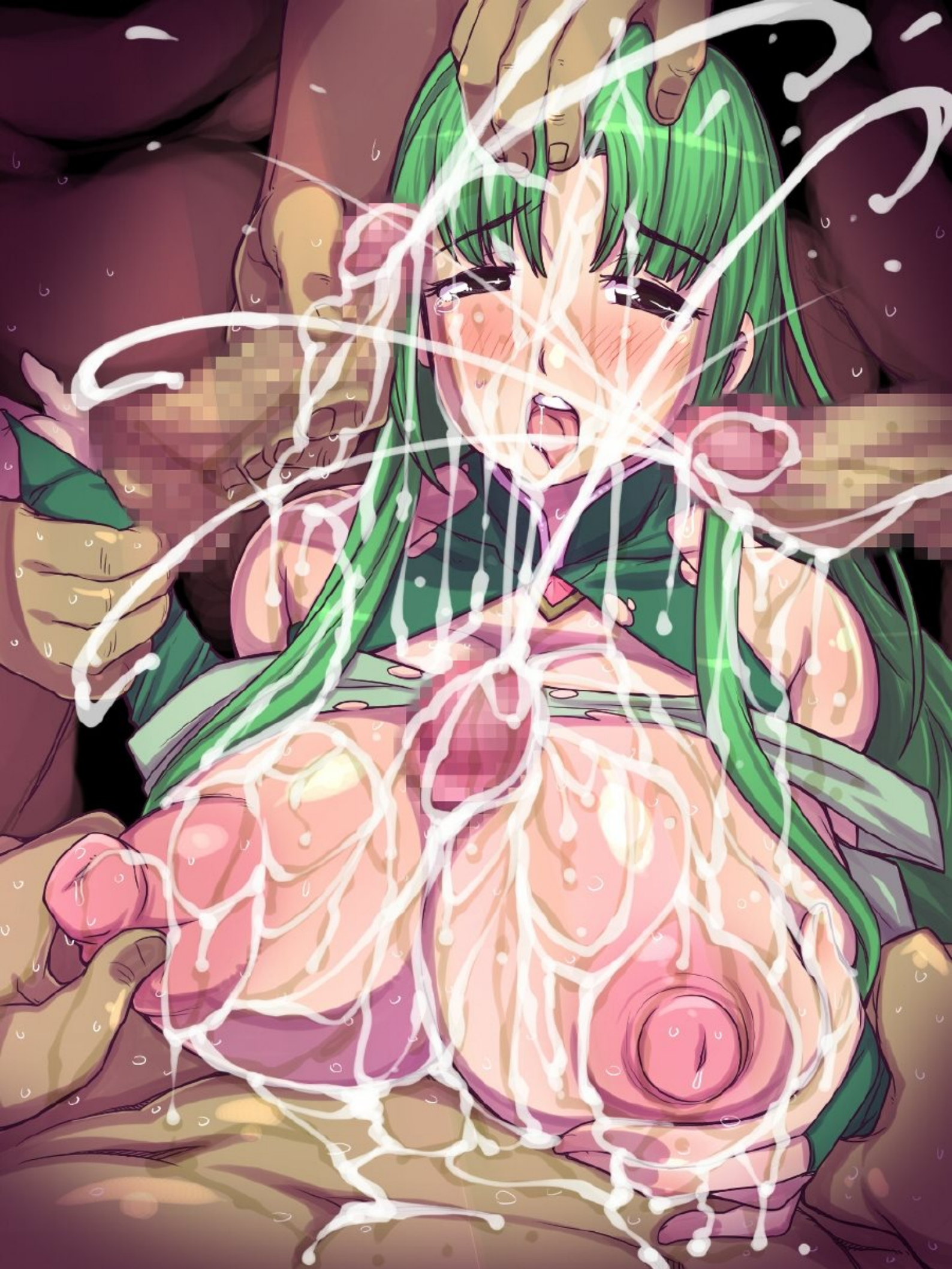
獲物を村に持ち帰れるぐらいに成長したことを誇りに思うし
きっと村の皆も喜んでくれるだろう。

この黒麒麟で、今年も成人の儀式が出来るのだから……。

END







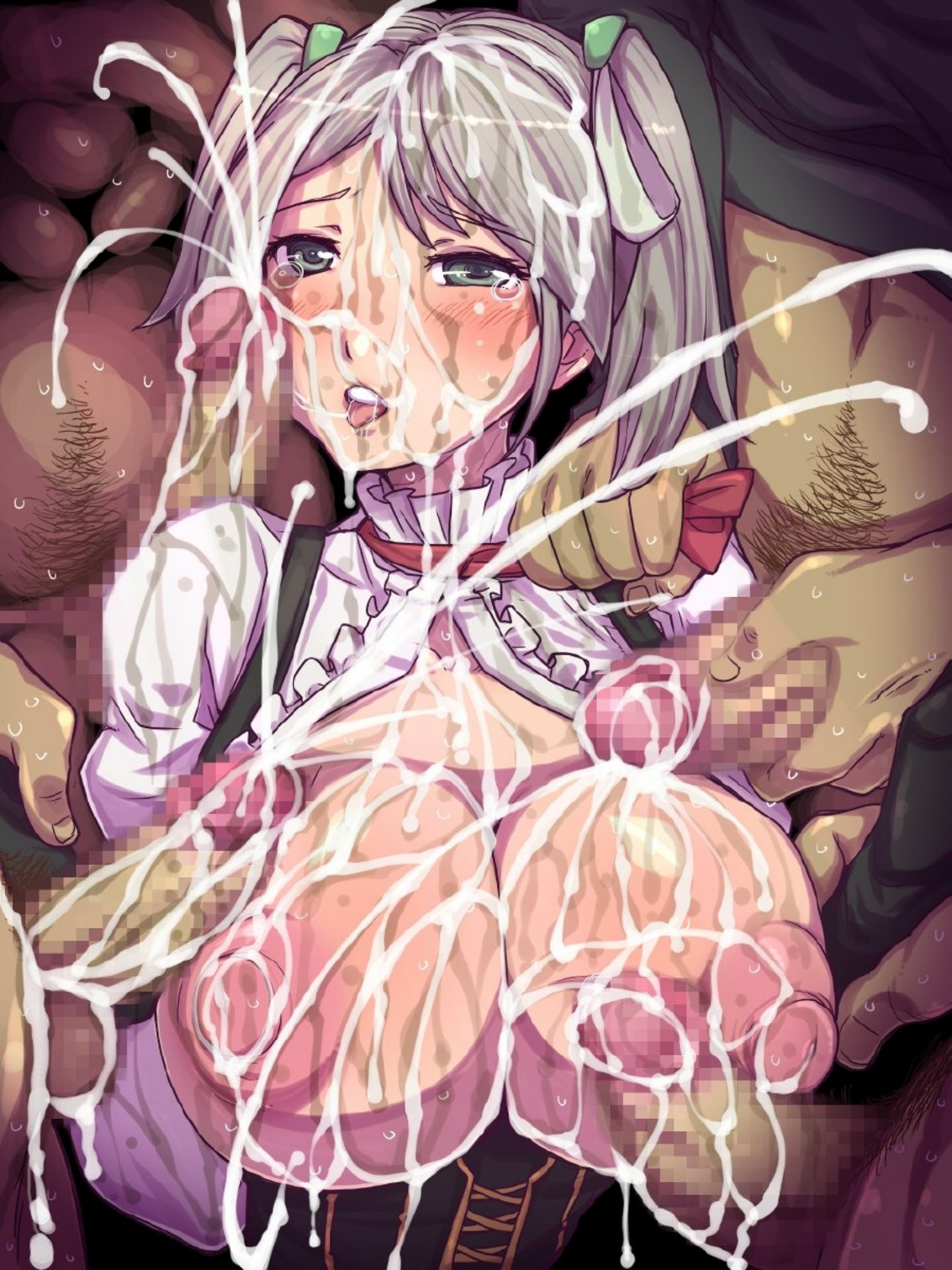














おっぱいミルク...

おまんこミルク...

おまんこおっぱい...

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おまんこ

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい...

おまんこ

おっぱいおっぱい...

おっぱいおっぱい...

おまんこおまんこ...

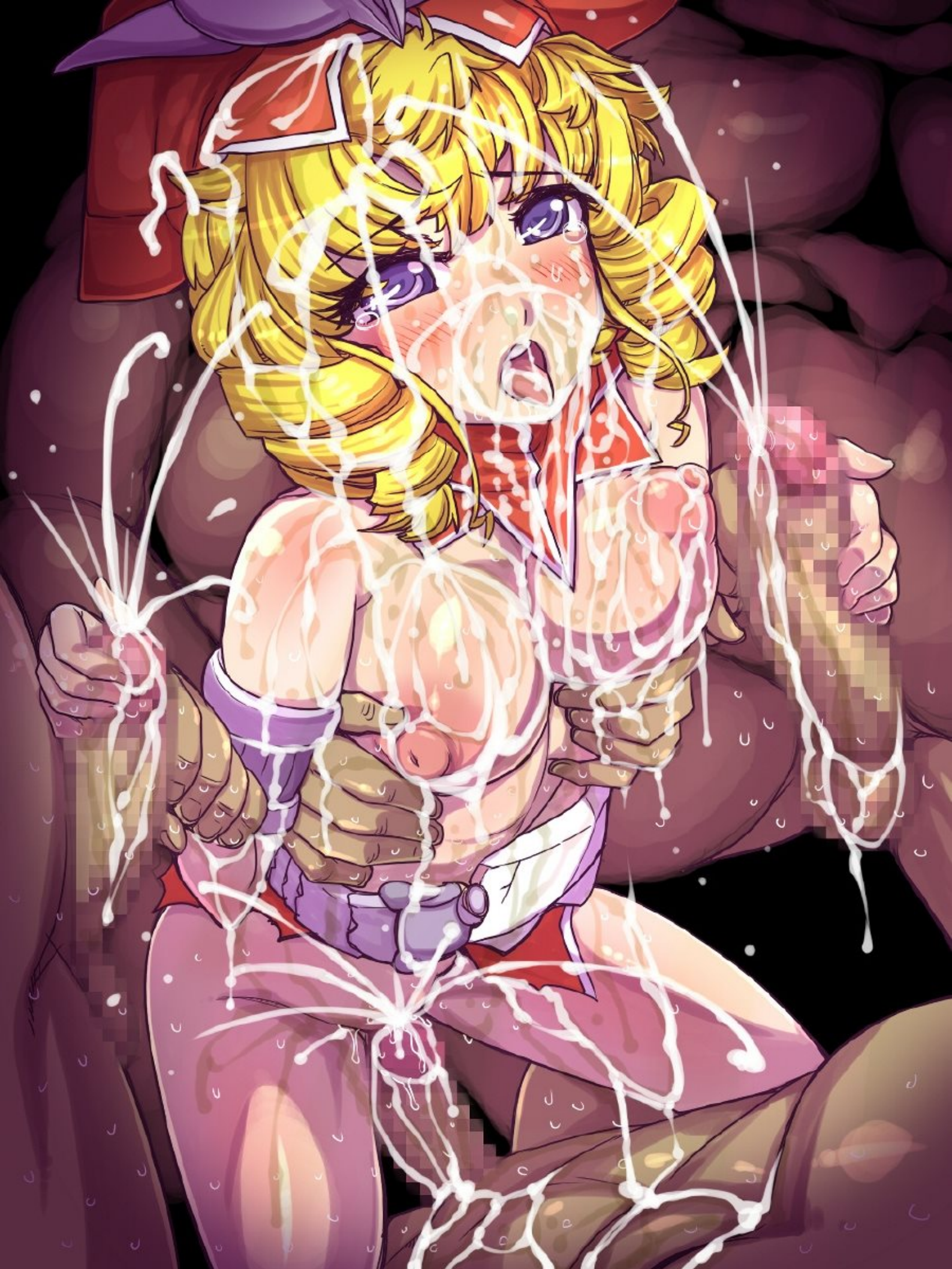
おまんこおまんこ...

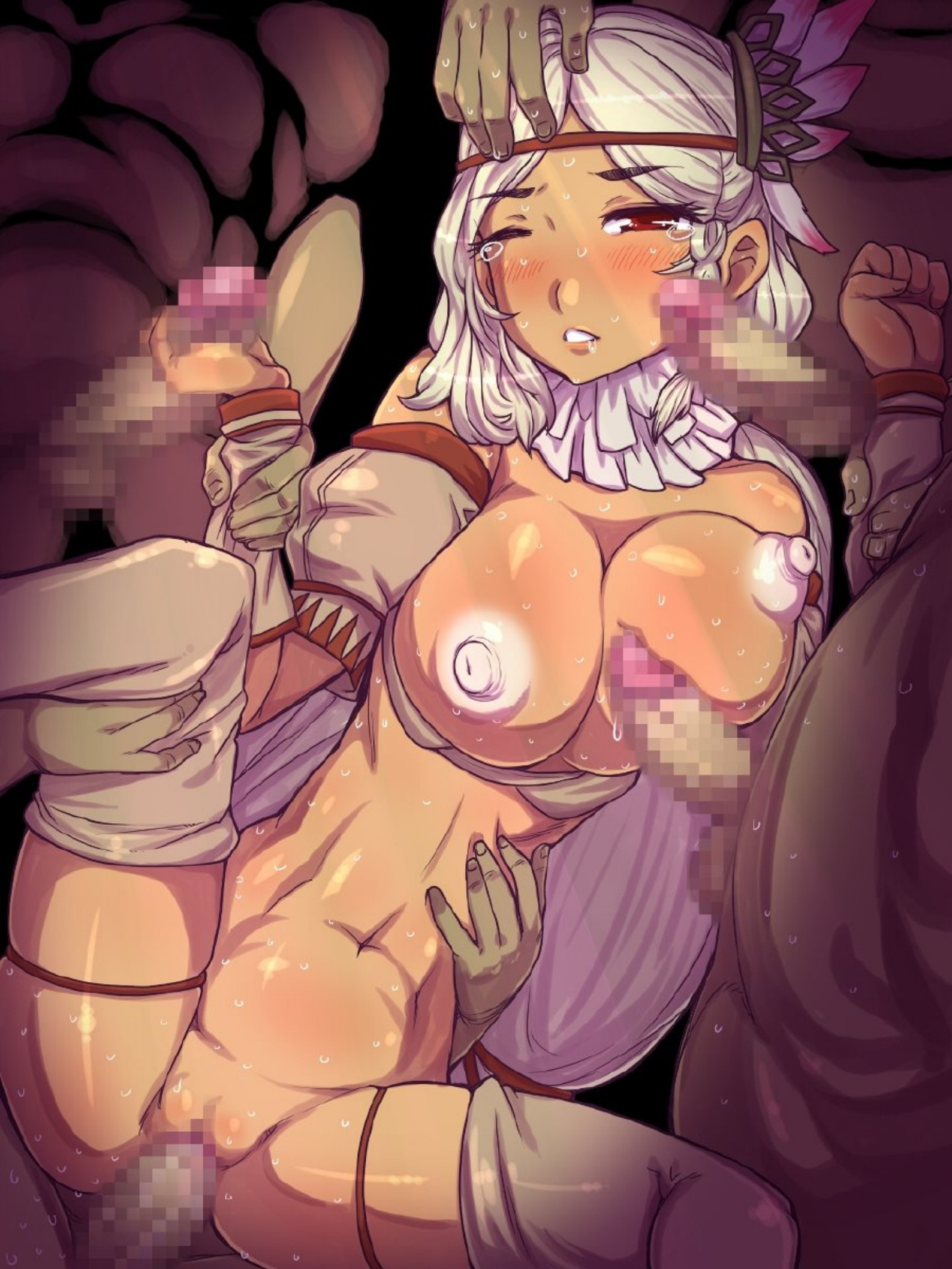
おまんこ！おまんこ！

おまんこ！おまんこ！

おまんこ



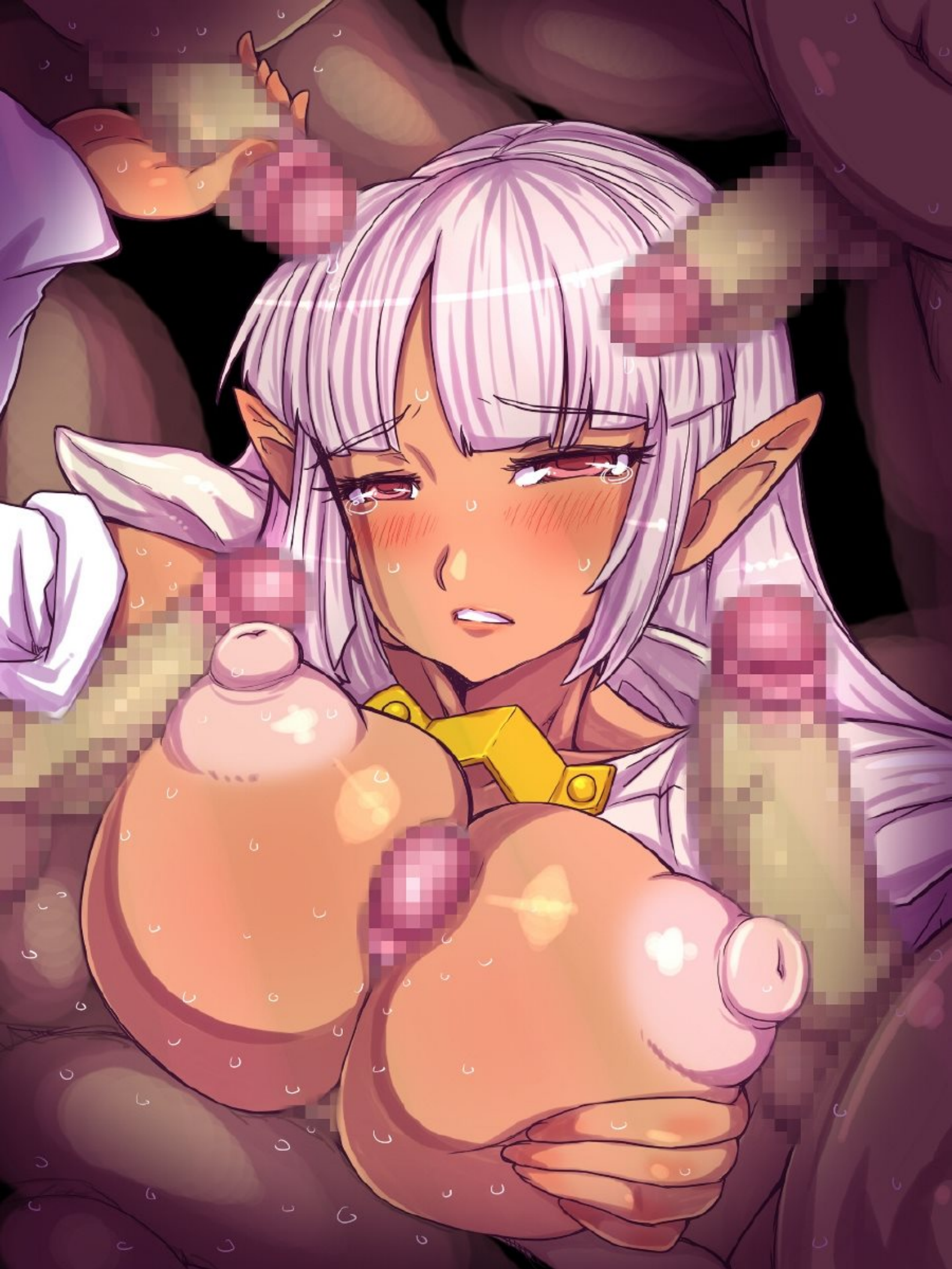




















Yes!

No!

Yes!

No!

Yes!

No!

Yes!

No!

Yes!

No!

Yes!

No!

Yes!

No!

Yes!

No!

Yes!

No!

Yes!

No!

Yes!

No!

Yes!

No!

Yes!

No!

Yes!

No!

Yes!

No!

Yes!

No!

Yes!

No!

Yes!

No!

Yes!

No!

Yes!

No!

Yes!

No!

Yes!

No!

Yes!

No!

Yes!

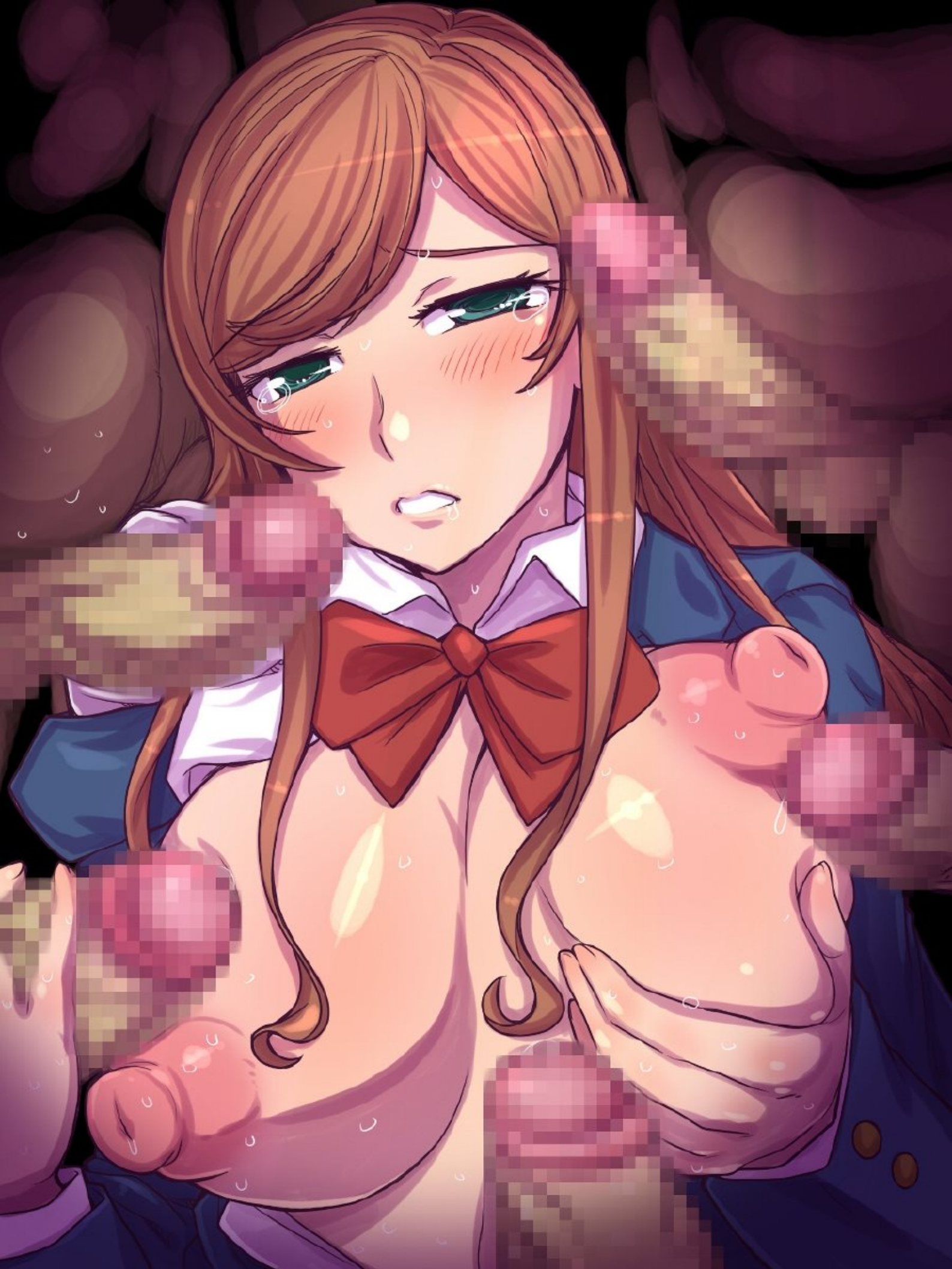
No!

Yes!

No!







463枚目ビルドファイターズ カミキ・ミライ

優等生は別の顔

モデルをやっているのには、別の理由があった。

多くのスポンサー、「おじ様」から「お情け」として性接待をするミライ。モデル業界では珍しくない、仕事の見返りに行われる性の提供。

殆どの女性はそれを嫌悪するが、ミライの場合はそれが全く逆だった。

「おじさまぁ～はやく、ミライの胸で出して？ あはっ あっ!でるでるう」

醜く太った男性の下腹部から生えた肉棒を、豊満なバストで締め上げ容赦なく抜きイカす。出資者の男たちは皆彼女の肉体と奉仕に夢中だった。

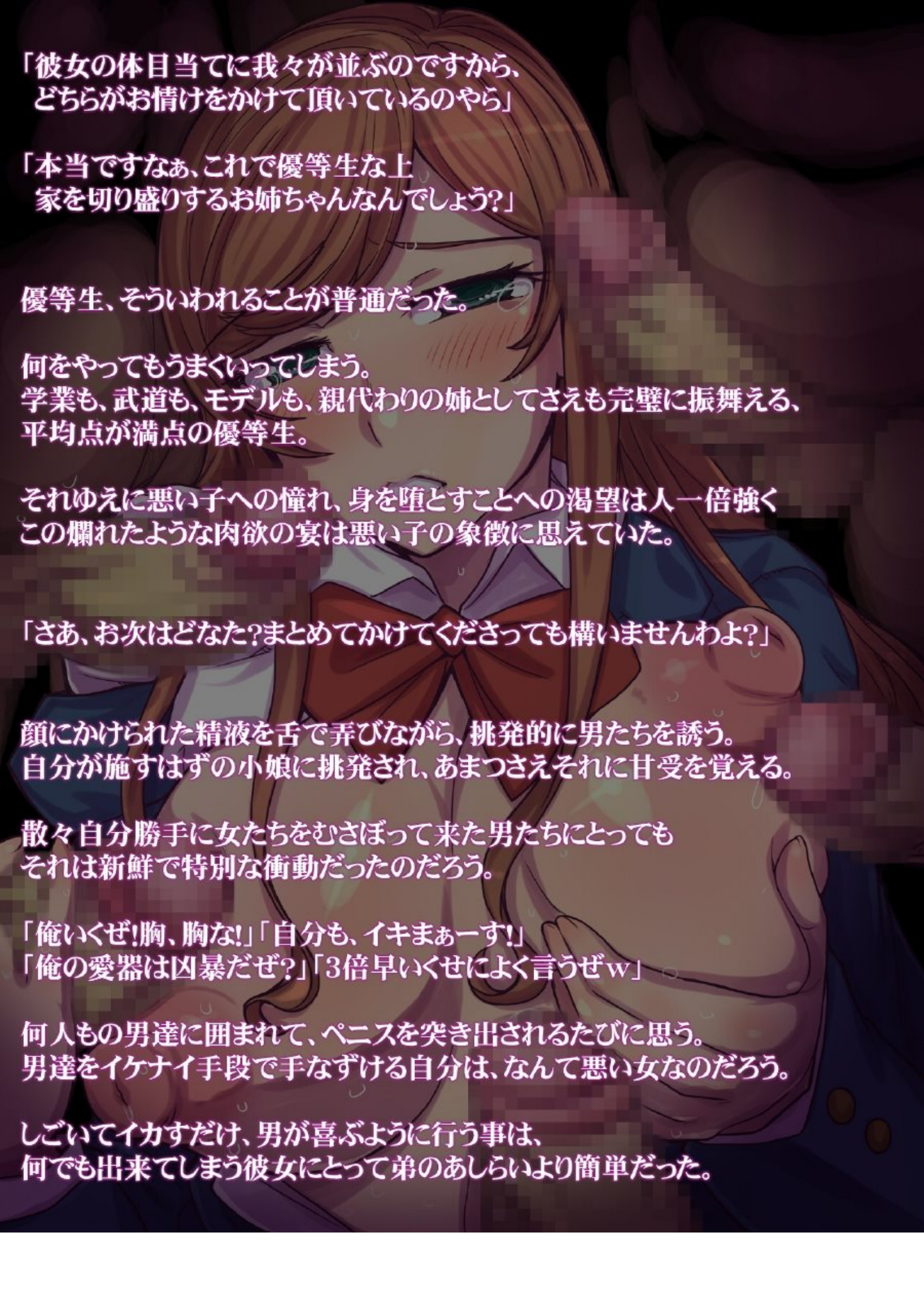
「おお、ミライちゃん…そんなに激しくしたらおじさんもう…あぁ～」
「おほっ、今日も飛ばしてますなあ」「ミライちゃんこっちもこっちも」

高級ホテルの一室で、スケジュールの合間を縫って行われる性接待。ミライにとっては仕事の一環でもあり、日常の憂さを晴らす待ち遠しいお楽しみでもあった。

「いくう?イキそうなんですよ? ほらほらほらぁ～!あはっ!」

「あぁ～!まって、もったいない…一ヶ月も待ったのに…
もうだめ、もうだめえ～でるっでるう～!」

二人目の男性を容赦なく射精させるミライ。潤んだ瞳で見つめ、胸だけをさらけだした制服で肉棒を撫でさすり、時にはしゃぶり、射精へ導く。



「彼女の体目当てに我々が並ぶのですから、
どちらがお情けをかけて頂いているのやら」

「本当ですなあ、これで優等生な上、
家を切り盛りするお姉ちゃんなんでしょう？」

優等生、そういわれることが普通だった。

何をやってもうまくいってしまう。
学業も、武道も、モデルも、親代わりの姉としてさえも完璧に振舞える、
平均点が満点の優等生。

それゆえに悪い子への憧れ、身を墮とすことへの渴望は人一倍強く
この爛れたような肉欲の宴は悪い子の象徴に思っていた。

「さあ、お次はどなた？まとめてかけてくださっても構いませんわよ？」

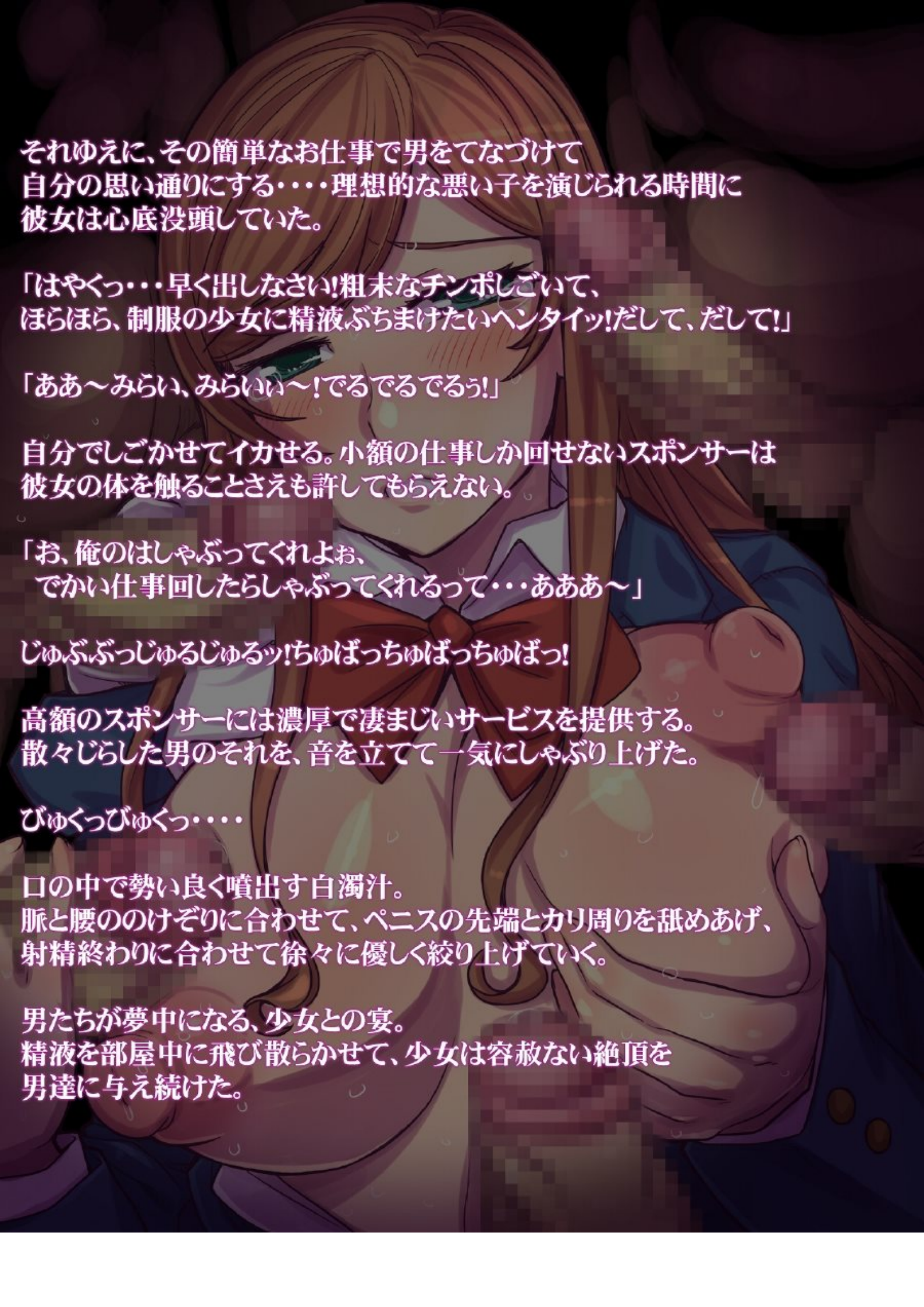
顔にかけられた精液を舌で弄びながら、挑発的に男たちを誘う。
自分が施すはずの小娘に挑発され、あまつさえそれに甘受を覚える。

散々自分勝手に女たちをむさぼって来た男たちにとっても
それは新鮮で特別な衝動だったのだろう。

「俺いくぜ!胸、胸な!」「自分も、イキまあーす!」
「俺の愛器は凶暴だぜ?」「3倍早いくせによく言うぜw」

何人もの男達に囲まれて、ペニスを突き出されるたびに思う。
男達をイケナイ手段で手なずける自分は、なんて悪い女なのだろう。

しごいてイカすだけ、男が喜ぶように行う事は、
何でも出来てしまう彼女にとって弟のあしらいより簡単だった。



それゆえに、その簡単なお仕事で男をてなづけて自分の思い通りにする……理想的な悪い子を演じられる時間に彼女は心底没頭していた。

「はやくっ……早く出さない!粗末なチンポしごいて、ほらほら、制服の少女に精液ぶちまけたいヘンタイッ!だして、だして!」

「ああ～みらい、みらい～!でるでるでるう!」

自分でしごかせてイカせる。小額の仕事しか回せないスポンサーは彼女の体を触ることさえも許してもらえない。

「お、俺のはしゃぶってくれよお、でかい仕事回したらしゃぶってくれるって……ああ～」

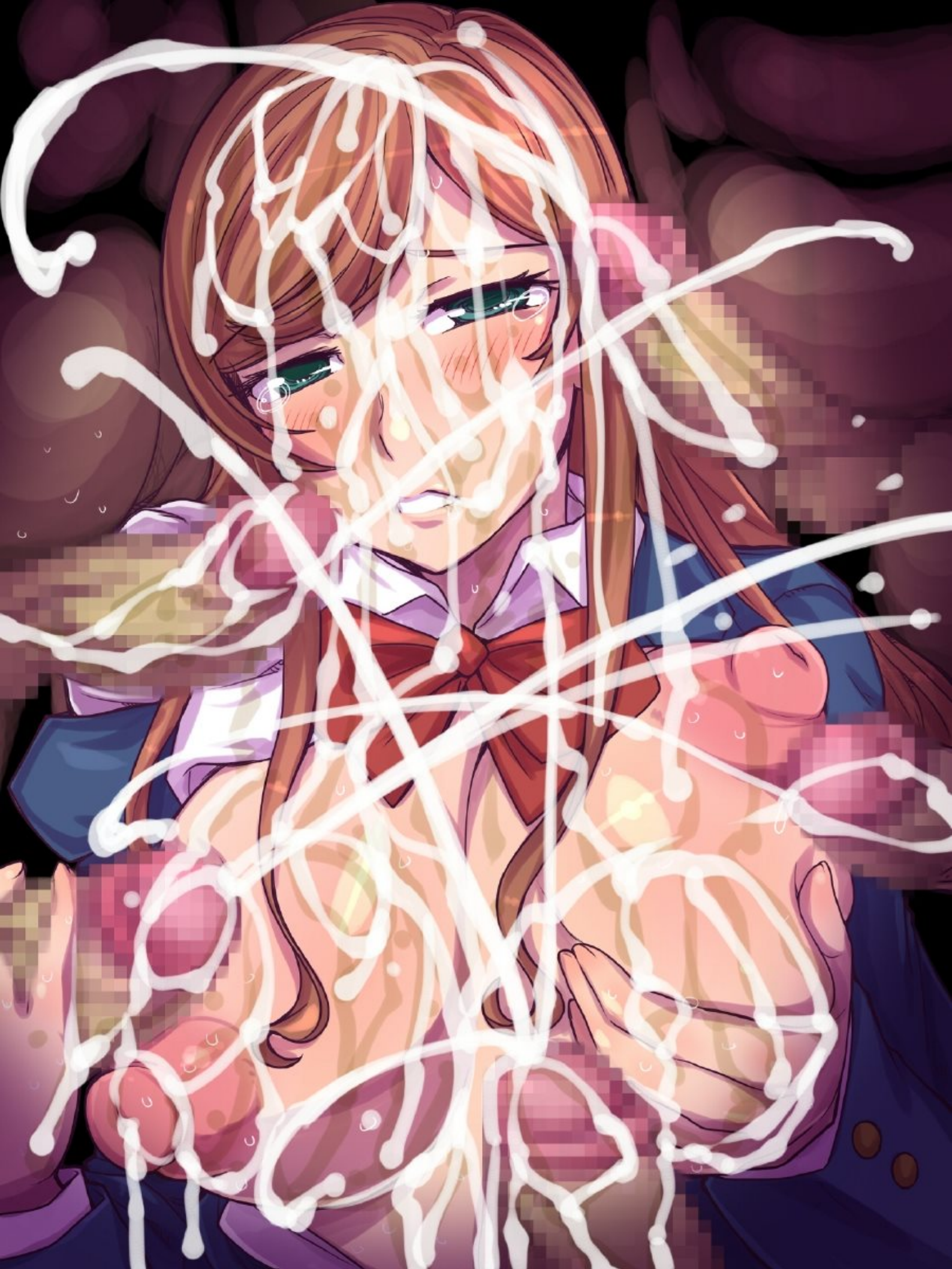
じゅぶぶっじゅるじゅるッ!ちゅばっちゅばっちゅばっ!

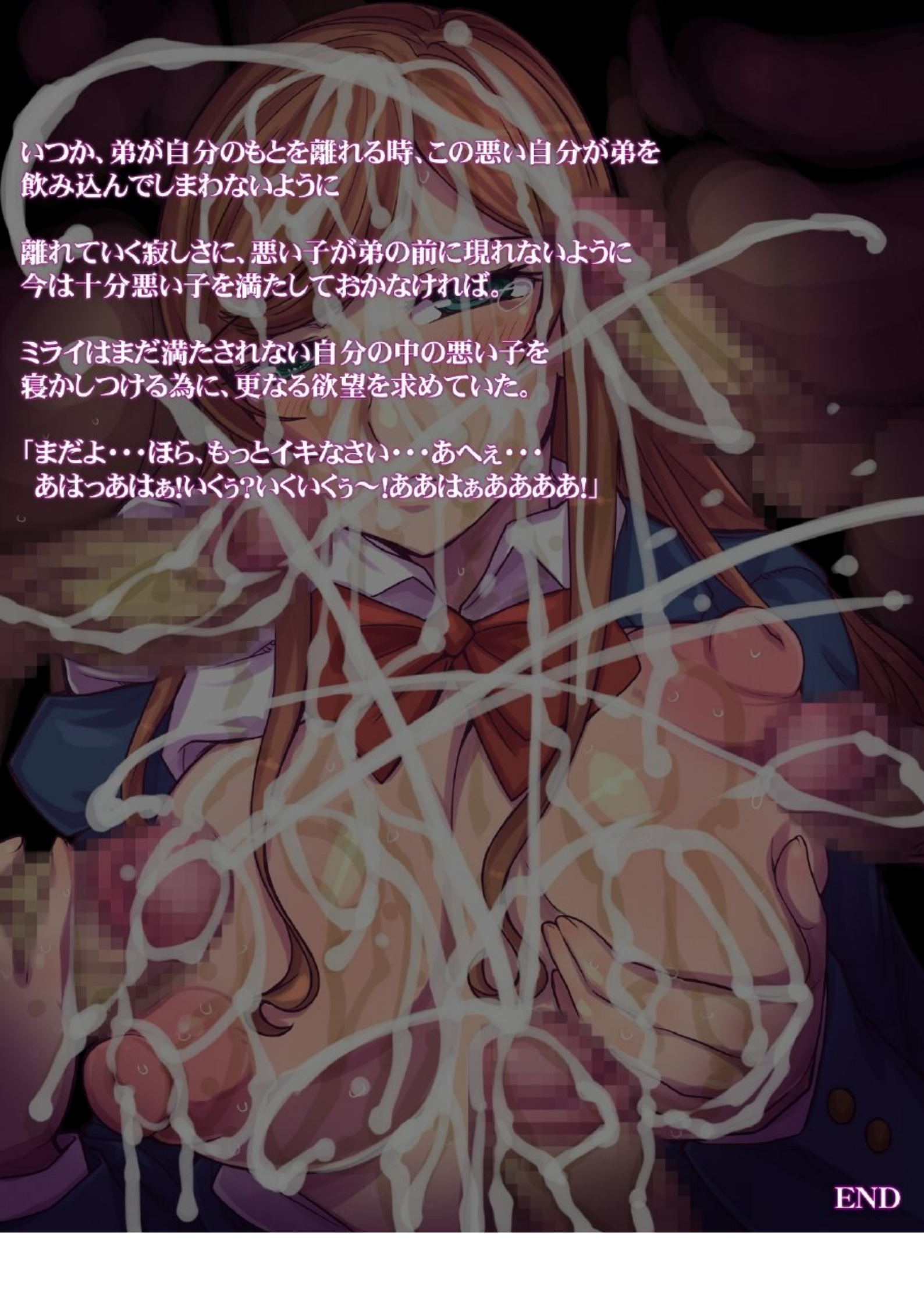
高額のスポンサーには濃厚で凄まじいサービスを提供する。散々じらした男のそれを、音を立てて一気にしゃぶり上げた。

びゅくっびゅくっ……

口の中で勢い良く噴出す白濁汁。脈と腰ののけぞりに合わせて、ペニスの先端とカリ周りを舐めあげ、射精終わりに合わせて徐々に優しく絞り上げていく。

男たちが夢中になる、少女との宴。精液を部屋中に飛び散らせて、少女は容赦ない絶頂を男達に与え続けた。





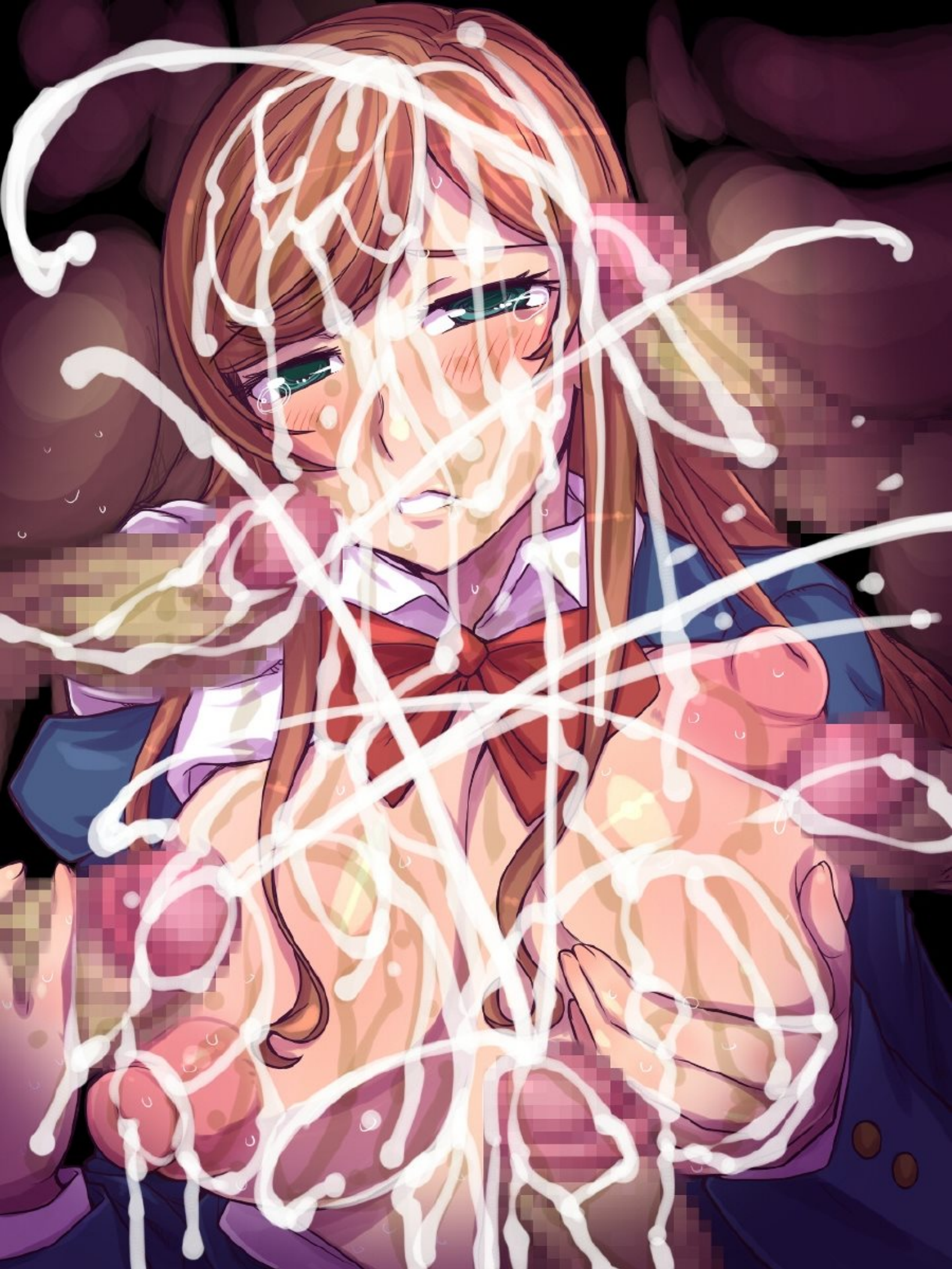
いつか、弟が自分のもとを離れる時、この悪い自分が弟を
飲み込んでしまわないように

離れていく寂しさに、悪い子が弟の前に現れないように
今は十分悪い子を満たしておかなければ。

ミライはまだ満たされない自分の中の悪い子を
寝かしつける為に、更なる欲望を求めていた。

「まだよ…ほら、もっとイキなさい…あへえ…
あはっあはあ!いくら?いくら~!あはあああああ!」

END











アッ...

アッ...アッ...アッ...アッ...

アッ...

アッ...

アッ...

アッ...

アッ...

アッ...

アッ...

アッ...

アッ...

アッ...

アッ...

アッ...

アッ...

アッ...

アッ...

アッ...















ミルク!

おっぱい...
ミルク...

おっぱい...
ミルク!

ミルク!

おっぱい!

おっぱい!

おっぱい...
ミルク!

ミルク!

おっぱい!

おっぱい...
ミルク!

おっぱい!

おっぱい...
ミルク!

おっぱい...

おっぱい...

おっぱい...

おっぱい...

おっぱい...

おっぱい...

おっぱい...

おっぱい!

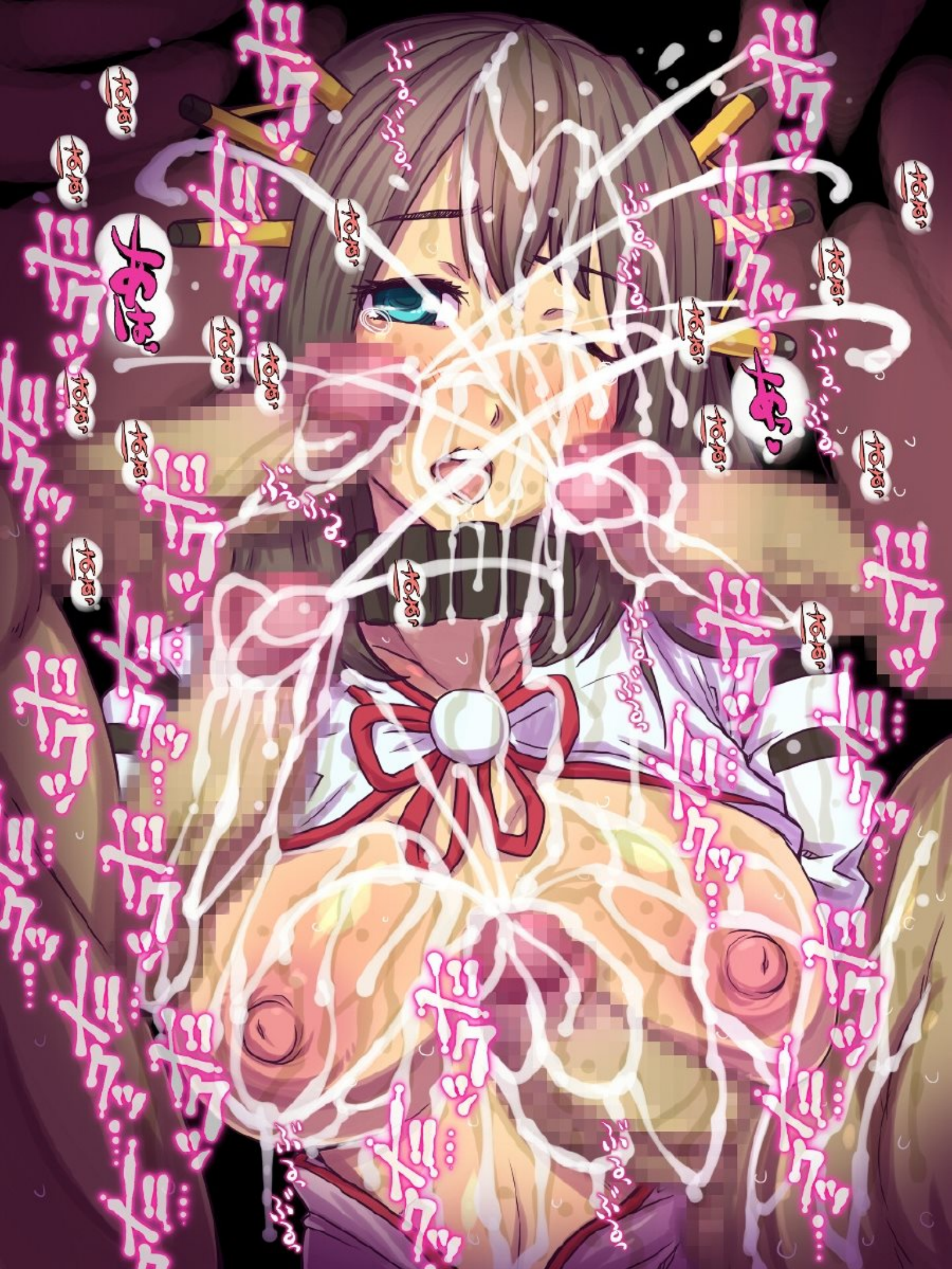
おっぱい...

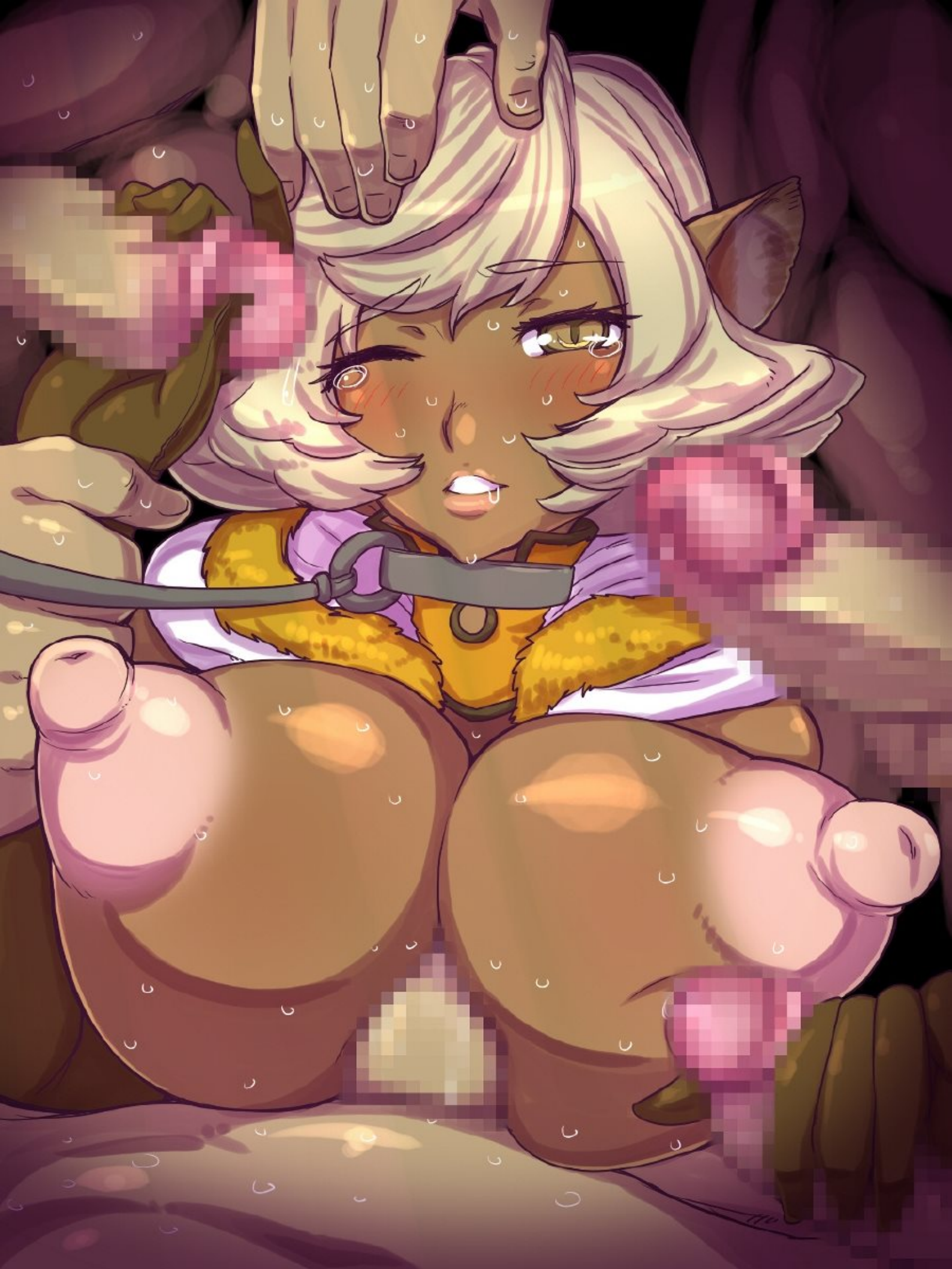
おっぱい...

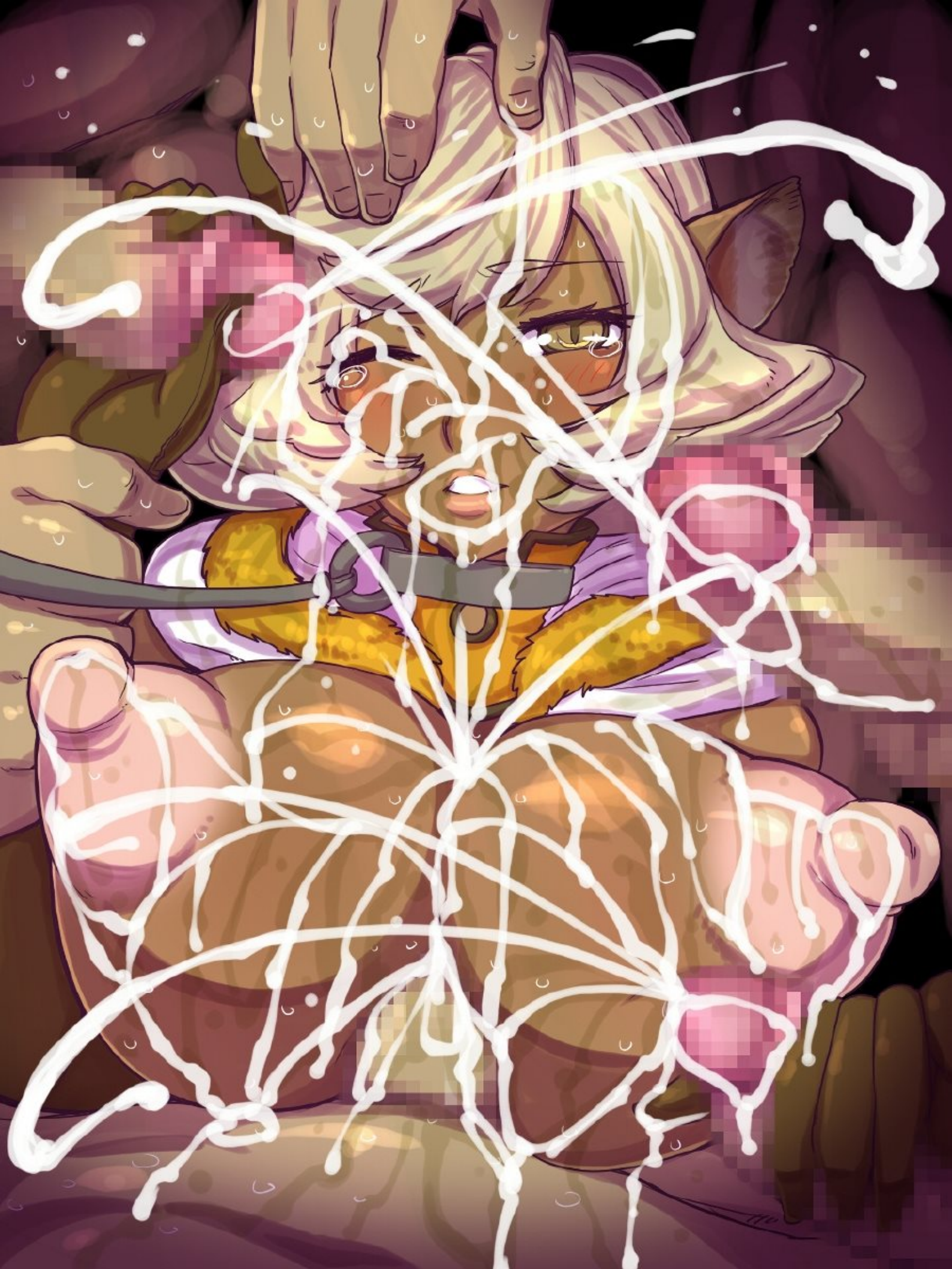
おっぱい...



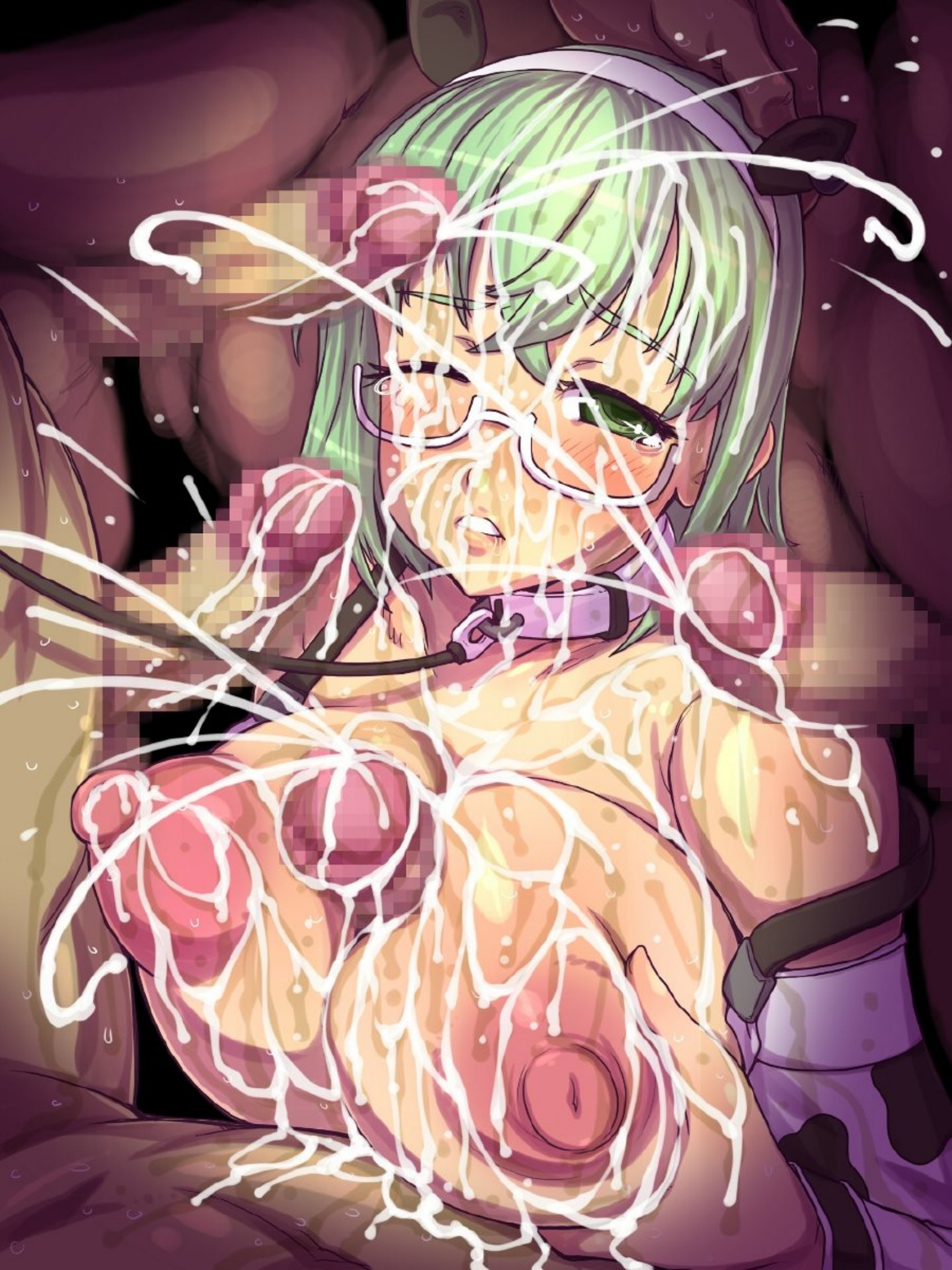




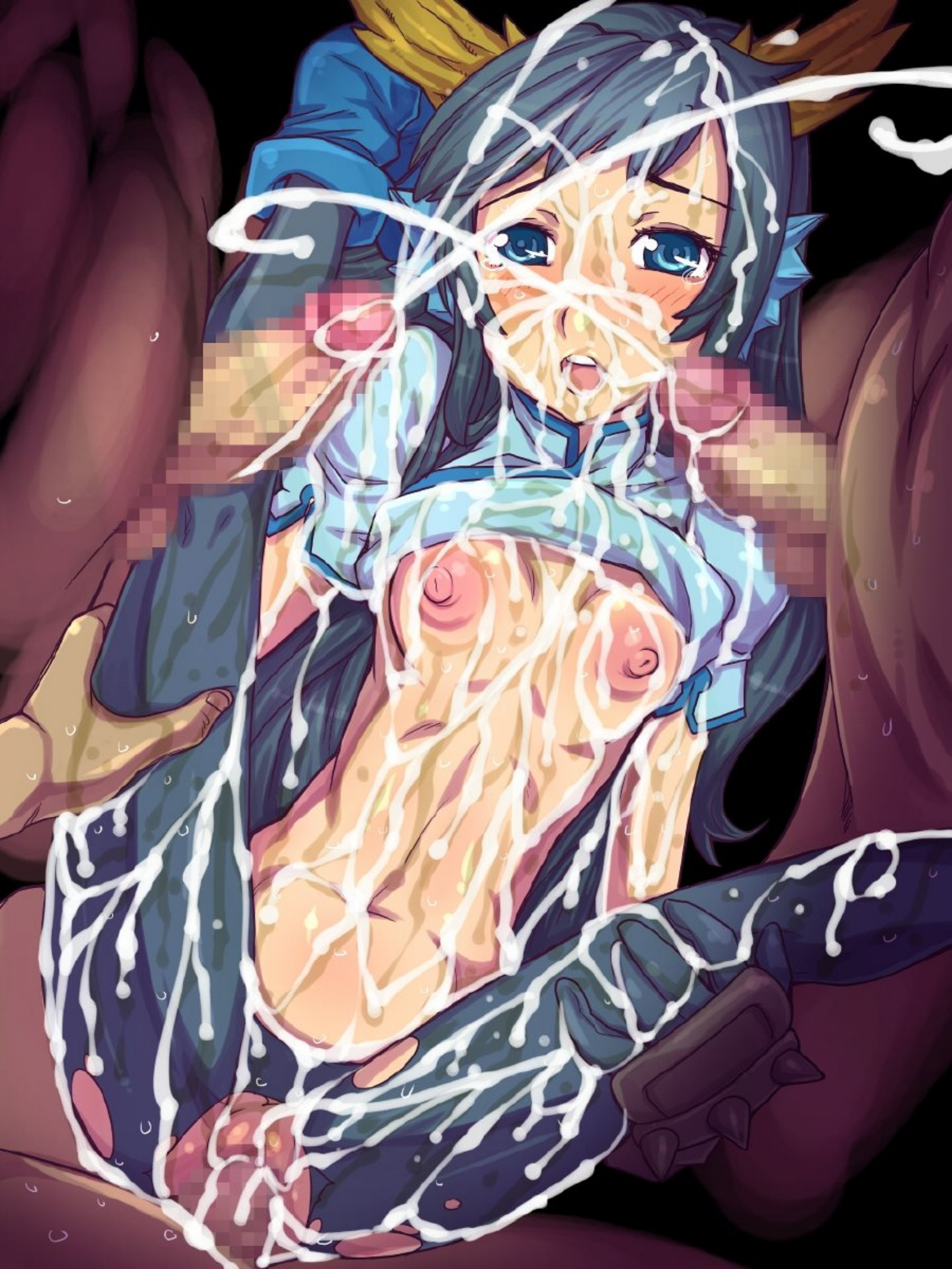




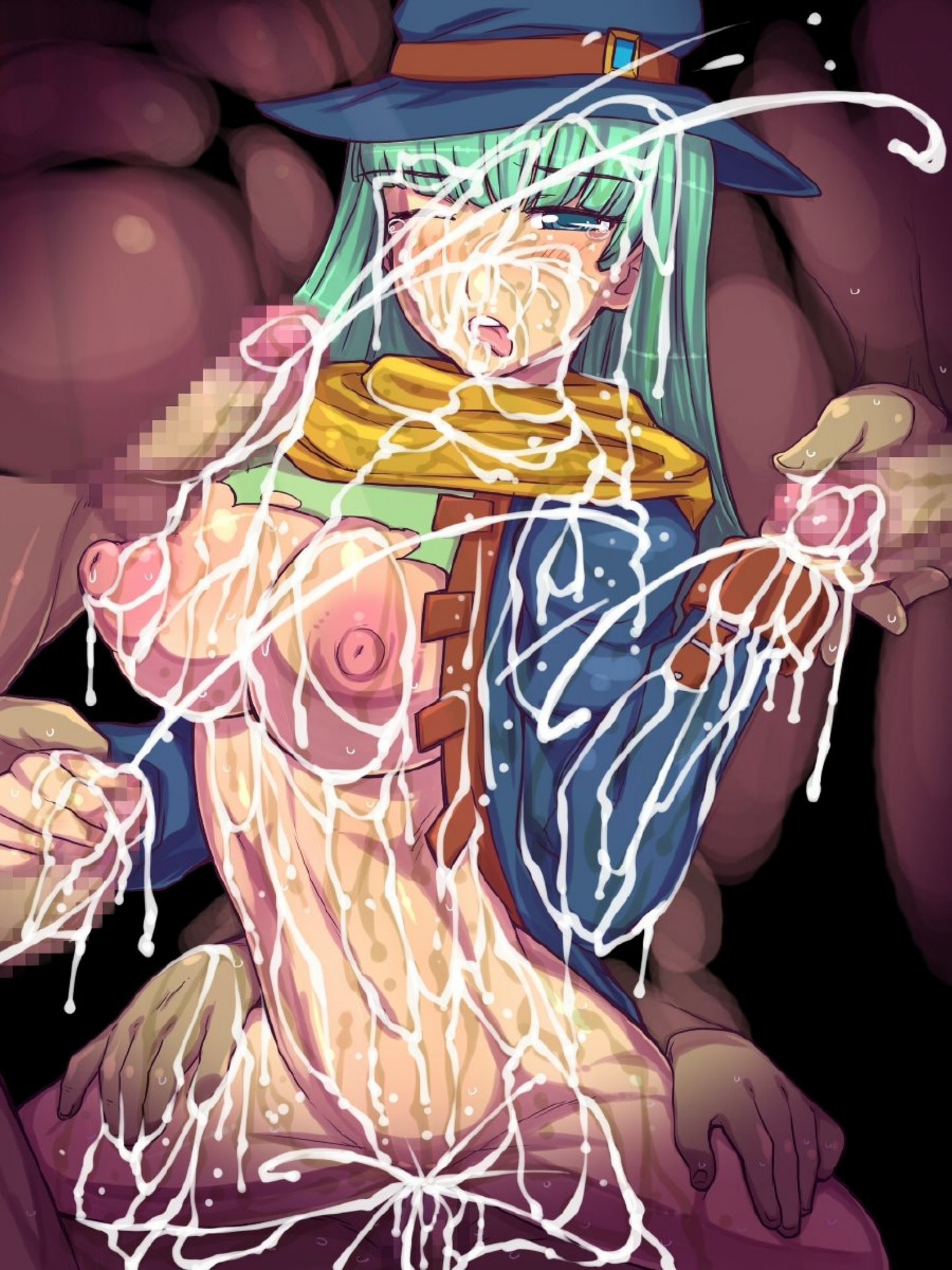


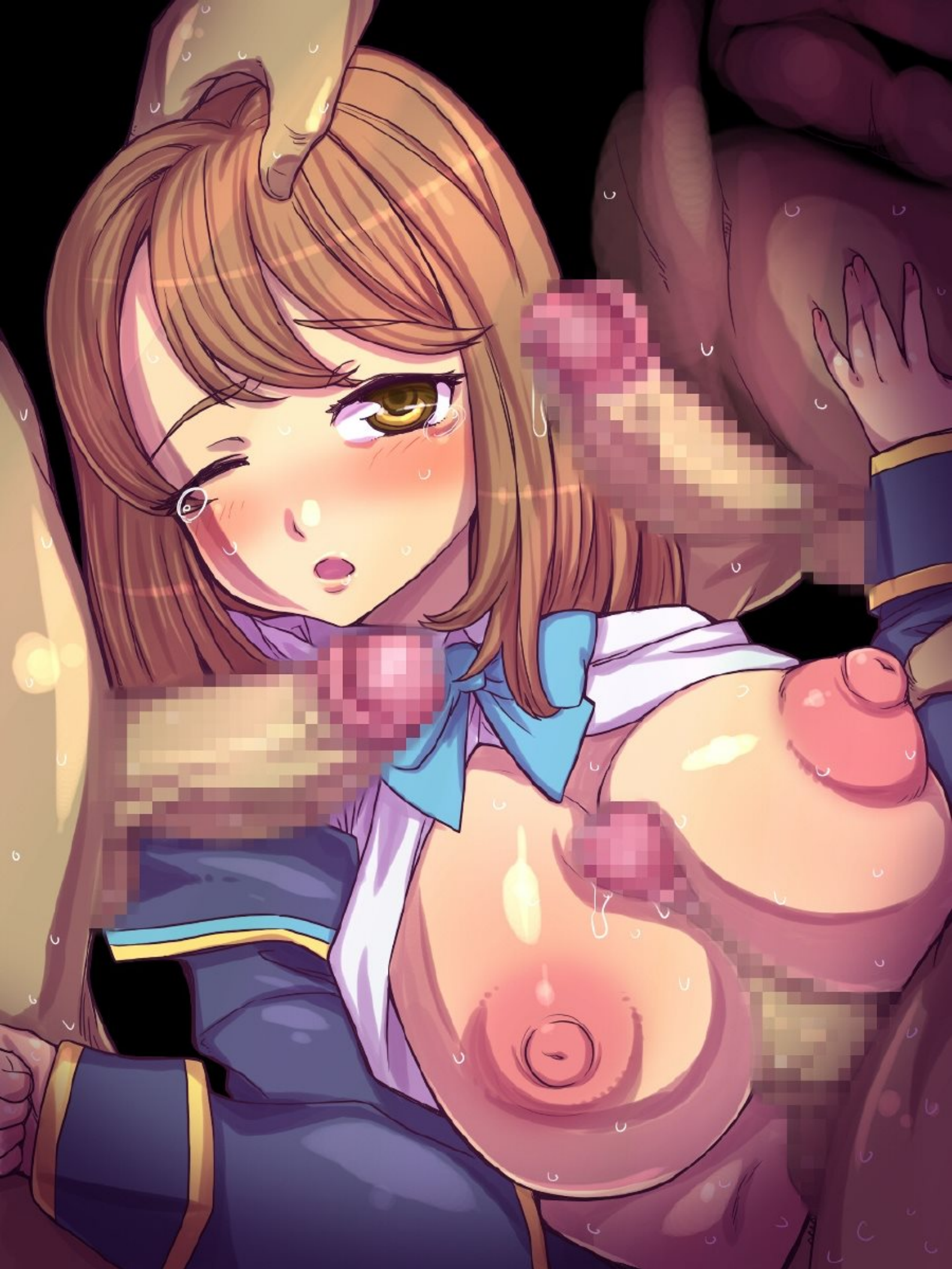




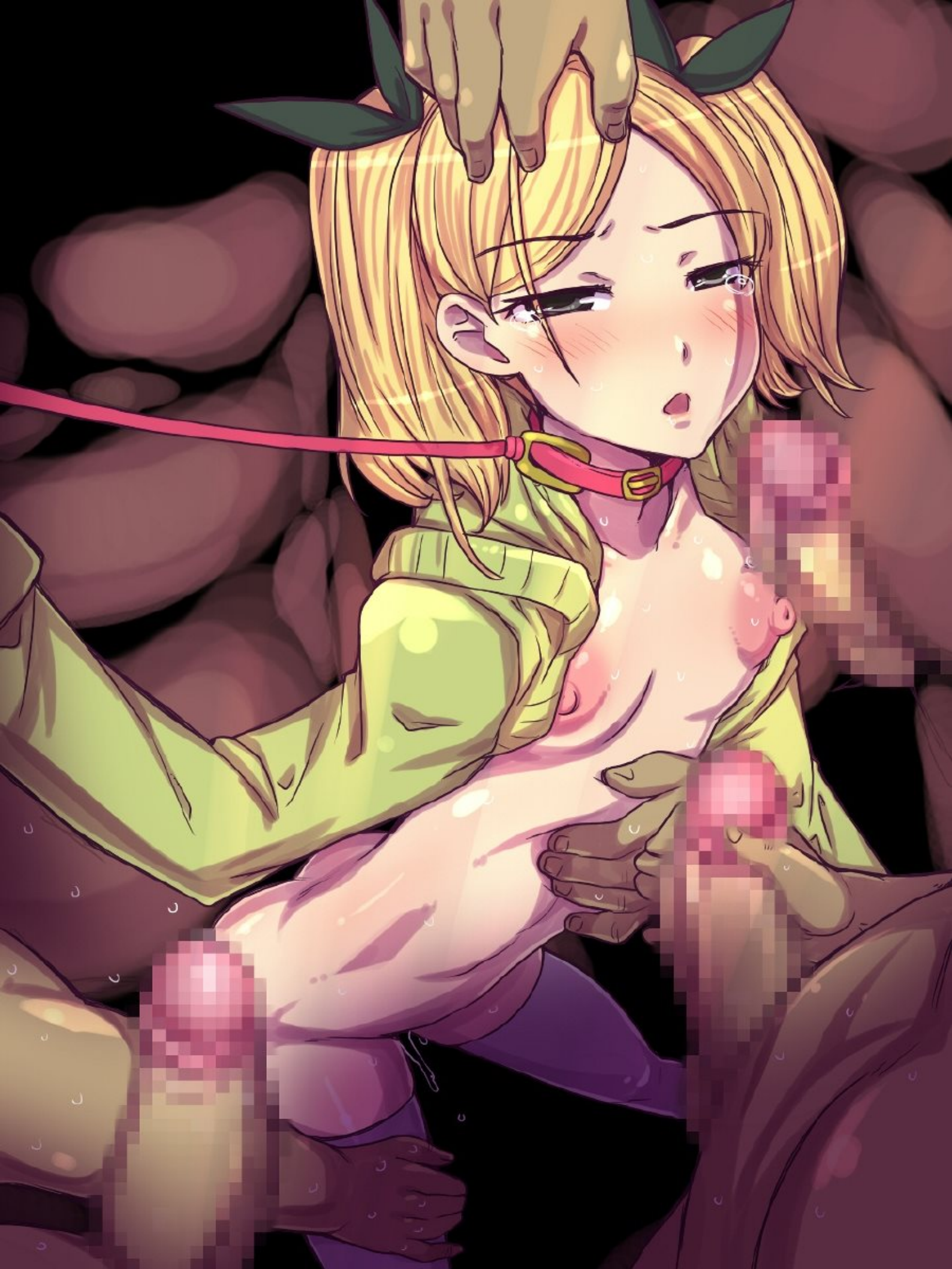




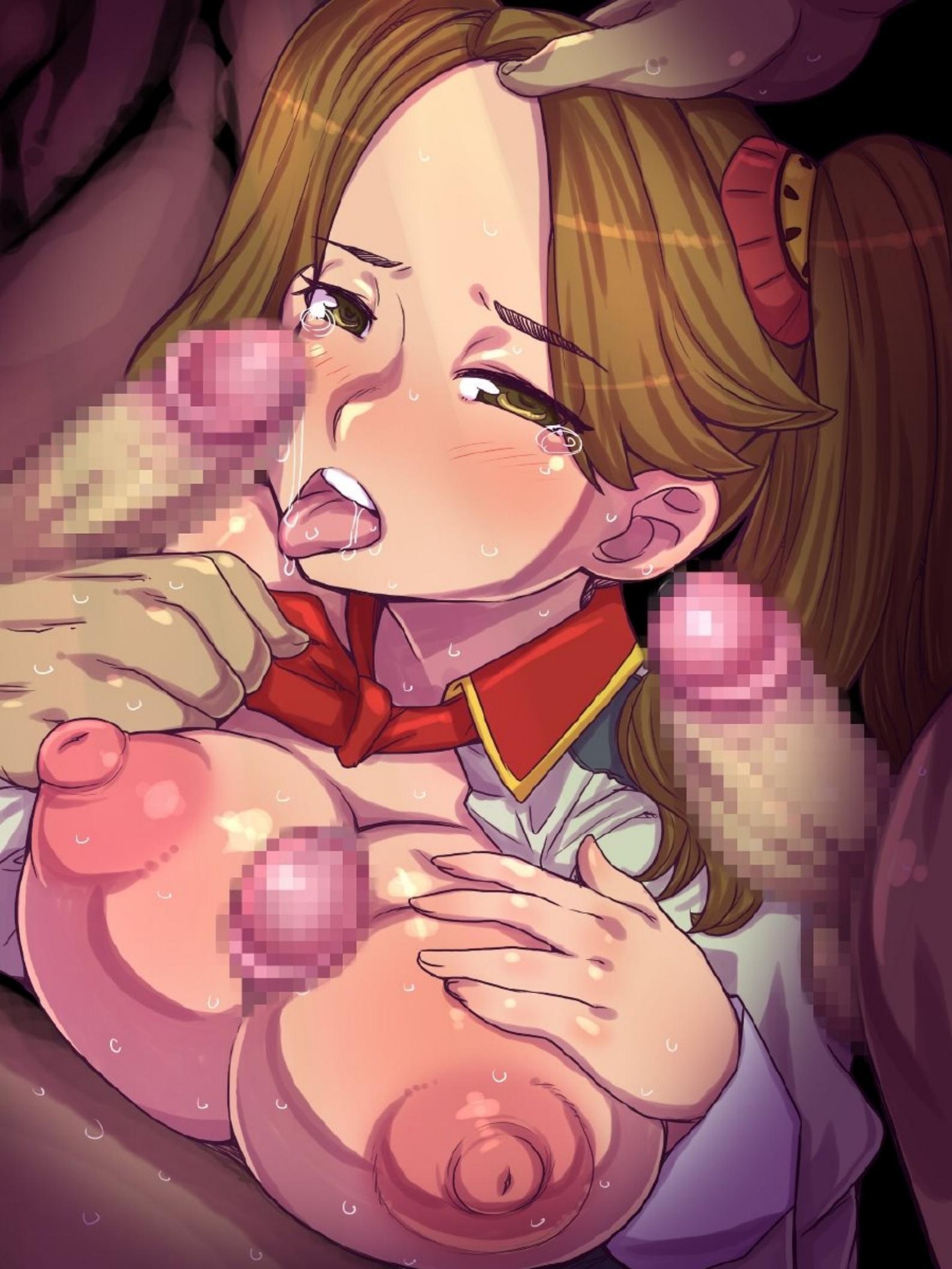


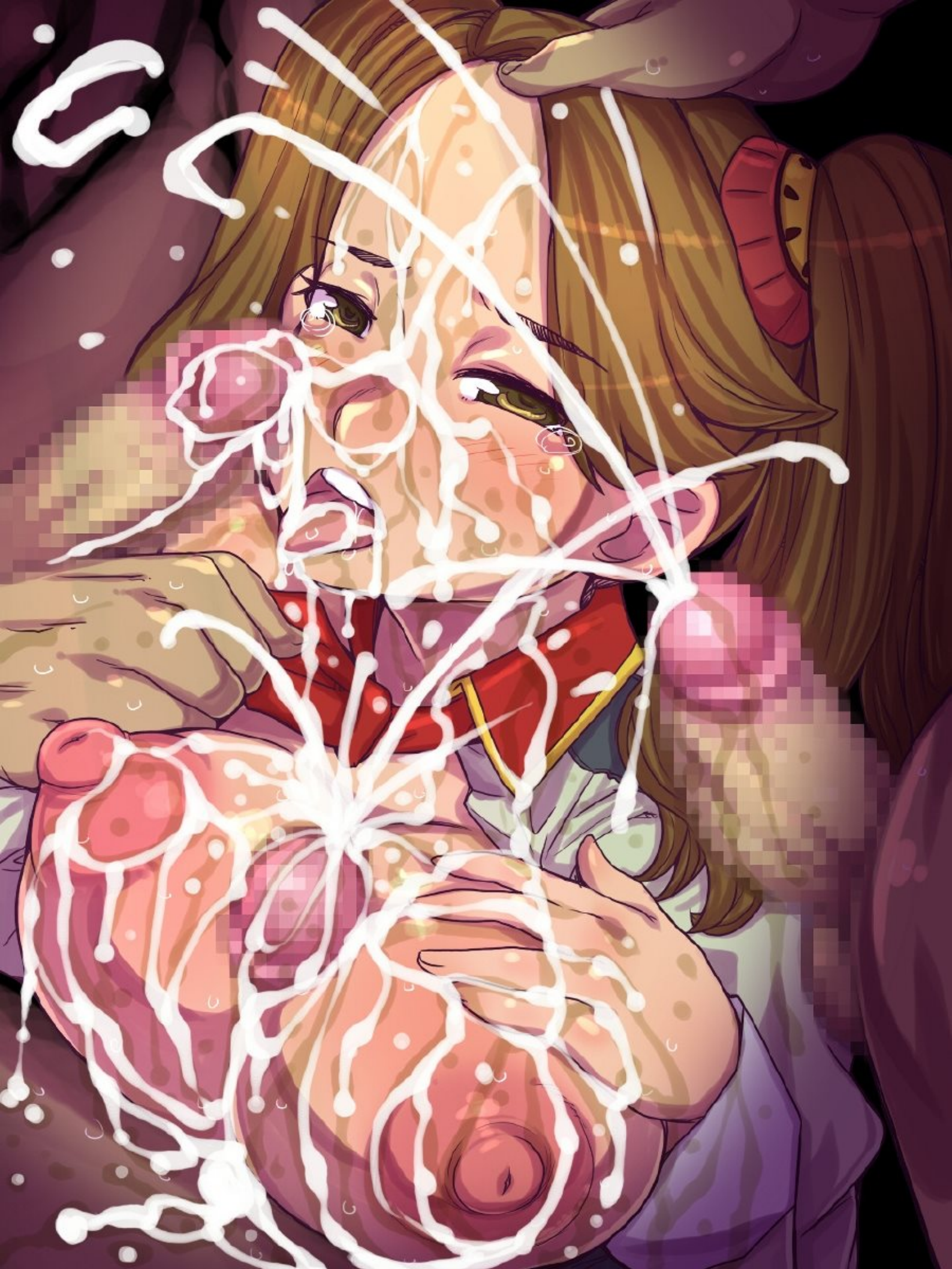




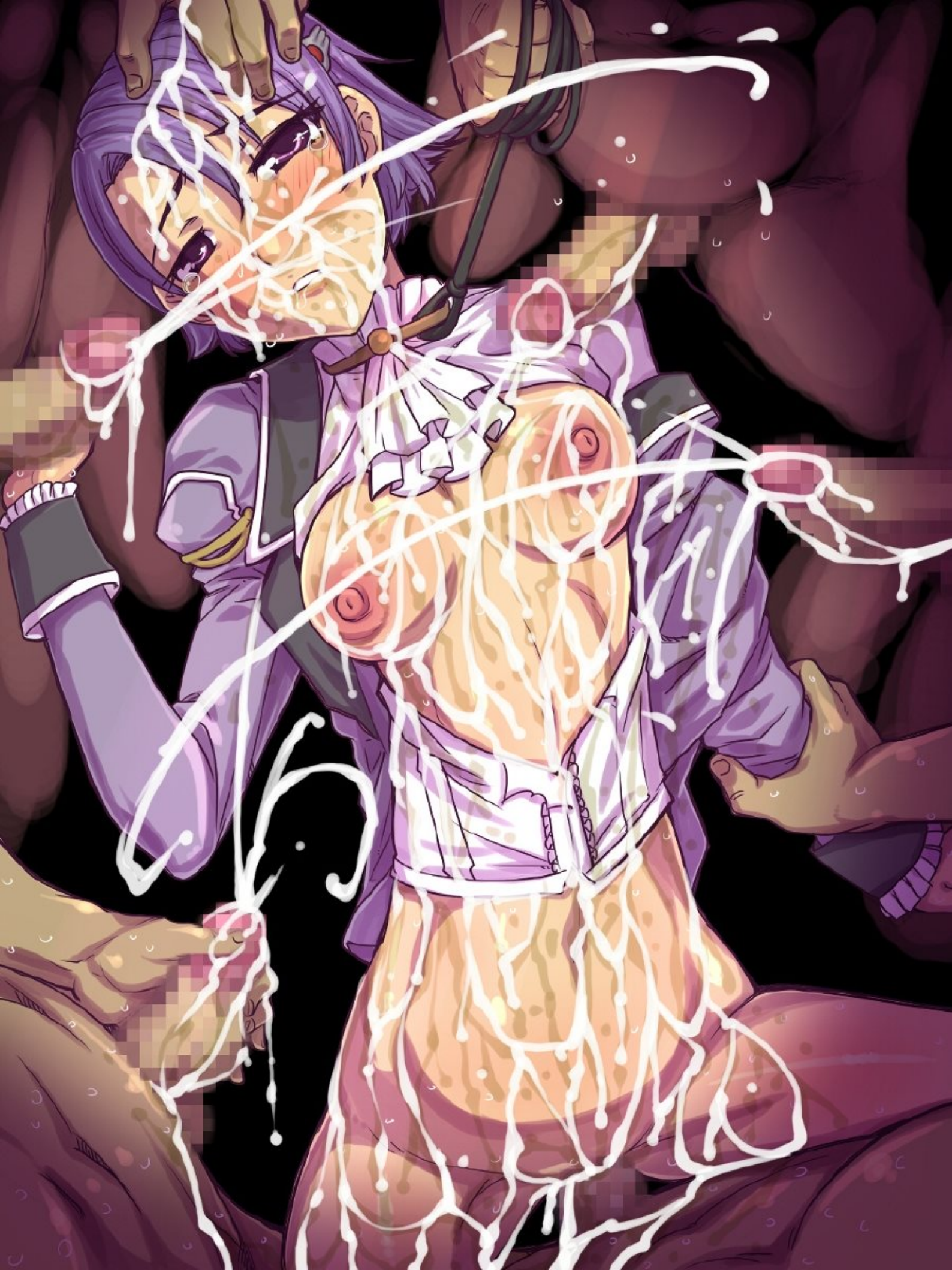


















天てんがふりかへて一鬼おんが!

おれおれ!! 天てんがふりかへて!!

汗あせ! 汗あせ!!

汗あせ! 汗あせ!!

ムムム!

エエエ...

おーんおーん!

おんおん!! 天てんがふりかへて!!

トクトク!

ムムム

ムムム

ムムム

ムムム

ムムム

ムムム!

ムムム

ムムム!

ムムム

ムムム!

ムムム

ムムム

ムムム

ムムム

ムムム

ムムム

ムムム

ムムム

ムムム

ムムム

ムムム







トビトビトビトビ

トビトビ

トビトビ

トビトビ

トビトビ

トビトビ

トビトビ

トビトビトビトビ

トビトビトビトビ

トビトビ

トビトビ

トビトビトビトビ

トビトビ

トビトビトビトビ

トビトビ

トビトビ

トビトビトビトビ

トビトビ

トビトビ

トビトビ

トビトビ

トビトビ

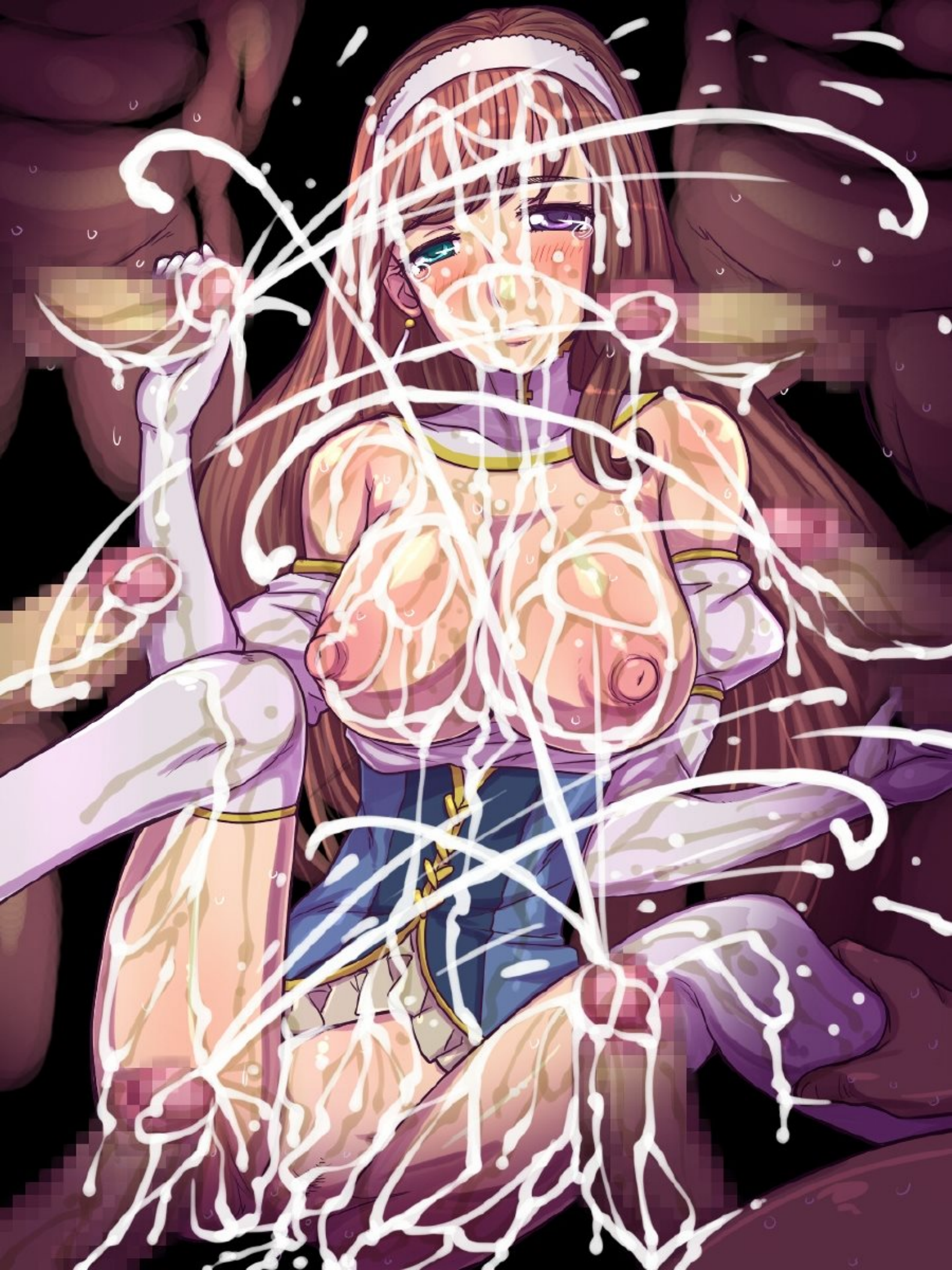
トビトビ

トビトビ











あーん あーん あーん あーん

あーん あーん あーん あーん

あーん あーん あーん あーん

あーん あーん あーん あーん

あーん あーん あーん あーん

あーん あーん あーん あーん

あーん あーん あーん あーん

あーん あーん あーん あーん

あーん あーん あーん あーん

あーん あーん あーん あーん

あーん あーん あーん あーん

あーん あーん あーん あーん

あーん あーん あーん あーん

あーん あーん あーん あーん

あーん あーん あーん あーん

あーん あーん あーん あーん

あーん あーん あーん あーん

あーん あーん あーん あーん

あーん あーん あーん あーん

あーん あーん あーん あーん

あーん あーん あーん あーん

あーん あーん あーん あーん





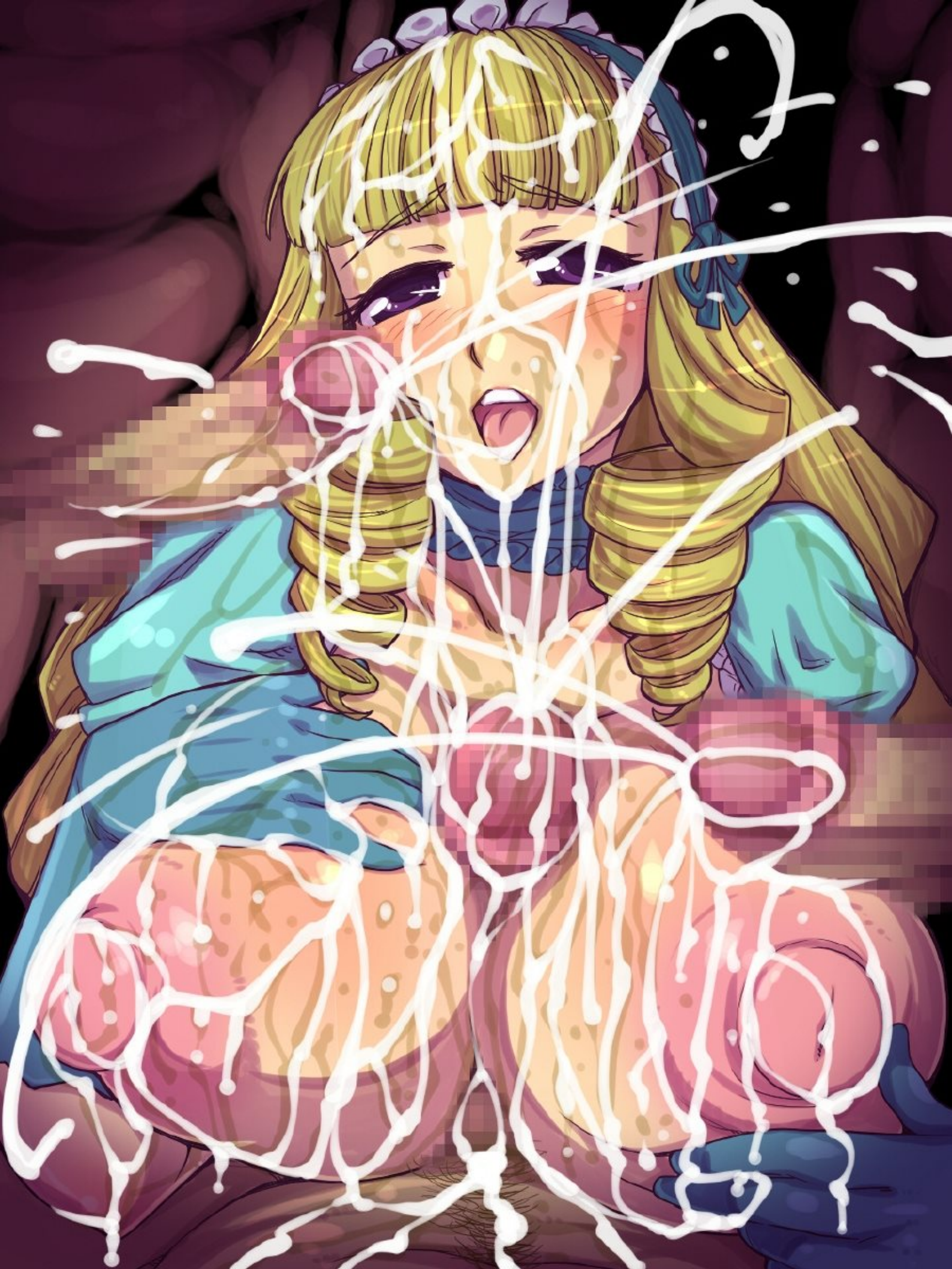






















トビッチャー

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

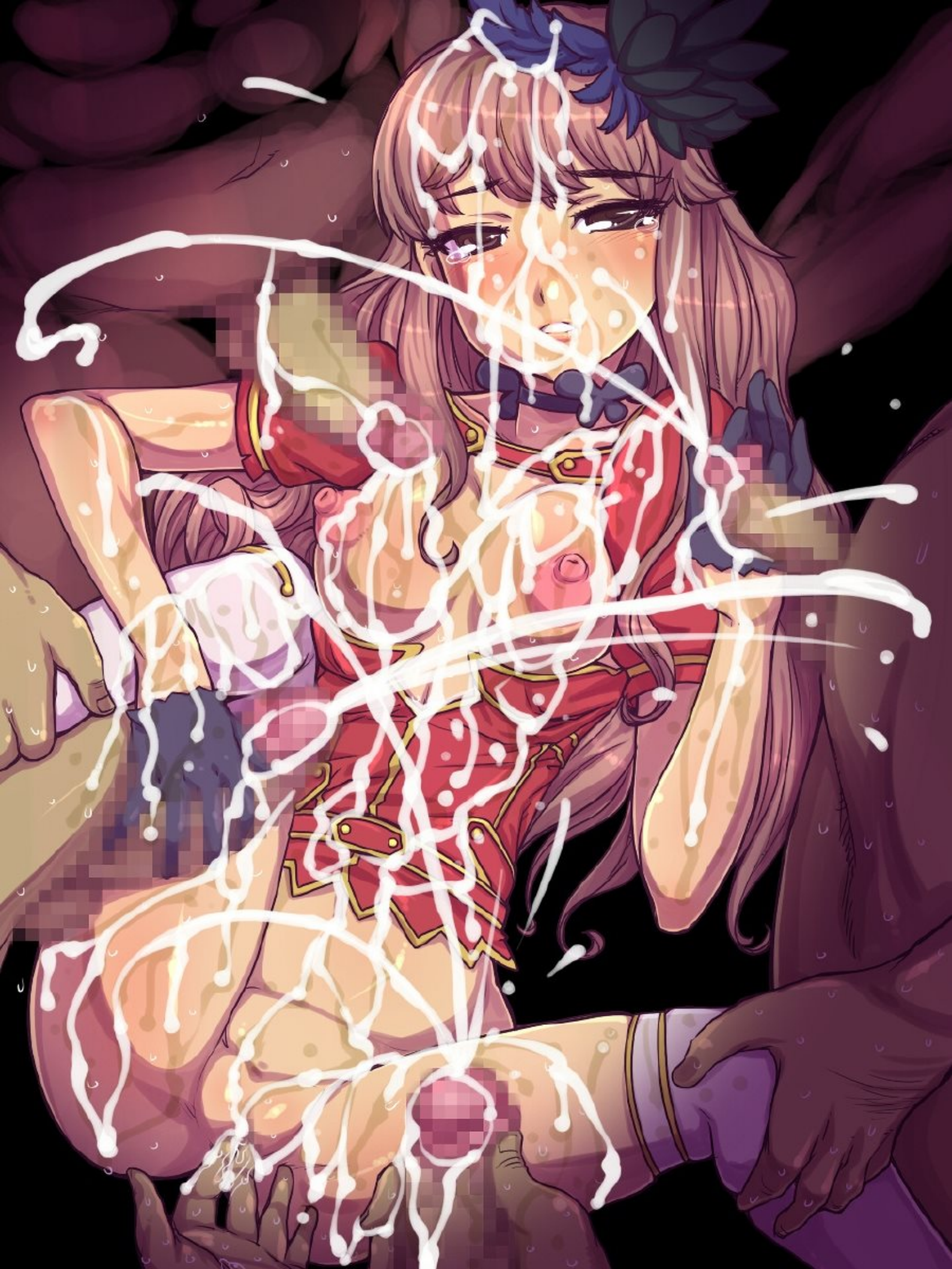
ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ

ニヤニヤ







★488枚目七つの大罪 エリザベス・リオネス

酒場にて

「こんなの、こんなこと嫌です!あ!ああ!」

メリオダスの営業する店で、もう少し役に立てるようにと町の酒場にきたエリザベスは早くも複数の男達に手を出されていた。

「すげえ綺麗な肌してんなあ〜ウヒヒヒ」
「隠すんじゃねえ!おっぱい見えるように捲し上げてろ!」

「ああ…ダメ…ダメ…」

エリザベスの豊満な胸に男たちの視線が痛いほど突き刺さる。

「いい胸してんじゃあん〜!変わりにコレみせてやるよ、おら、こっちみろお!」

男は勃起したペニスをさらけ出し、それを扱きながらエリザベスの顔に突きつける。

「ほうら、お嬢ちゃんのおっぱい見て、おじさんもうビンビンだあ」

「あうう!」

エリザベスは頭を乱暴に掴まれ、その醜く腫れ上がった肉棒を無理矢理見せ付けられる。

「おめえ、町の入り口んとこに急にできた店の女だな
ここじゃあ女はみんなこういうサービスを奉仕することになってんだよお!
おら、わかったらとっととしゃぶれ!」

店に響く、傍観する男達に下品な笑い声。



ぬめった先端を唇にあてがわれ、押さえつけられた頭がそれを啜えろといわんばかりに力をこめてくる。

「いやっ…んっ…んぬう…おえあ」

口の中で広がる、男の体臭。嗚咽にも似た声を上げてエリザベスははかない抵抗をし続ける。

「おらおら、サービスしろ!サービスサービスう!うう、でるう」

「んばあ!」

勢い良く噴出した白濁液。はじめてみるその現象、意味が分からず口の中から溢れるそれを、どうしていいか分からず手に吐き出す。

「ああ～ぎもちいい～ はきだすんじゃねえ、飲めよこのマヌケ!」

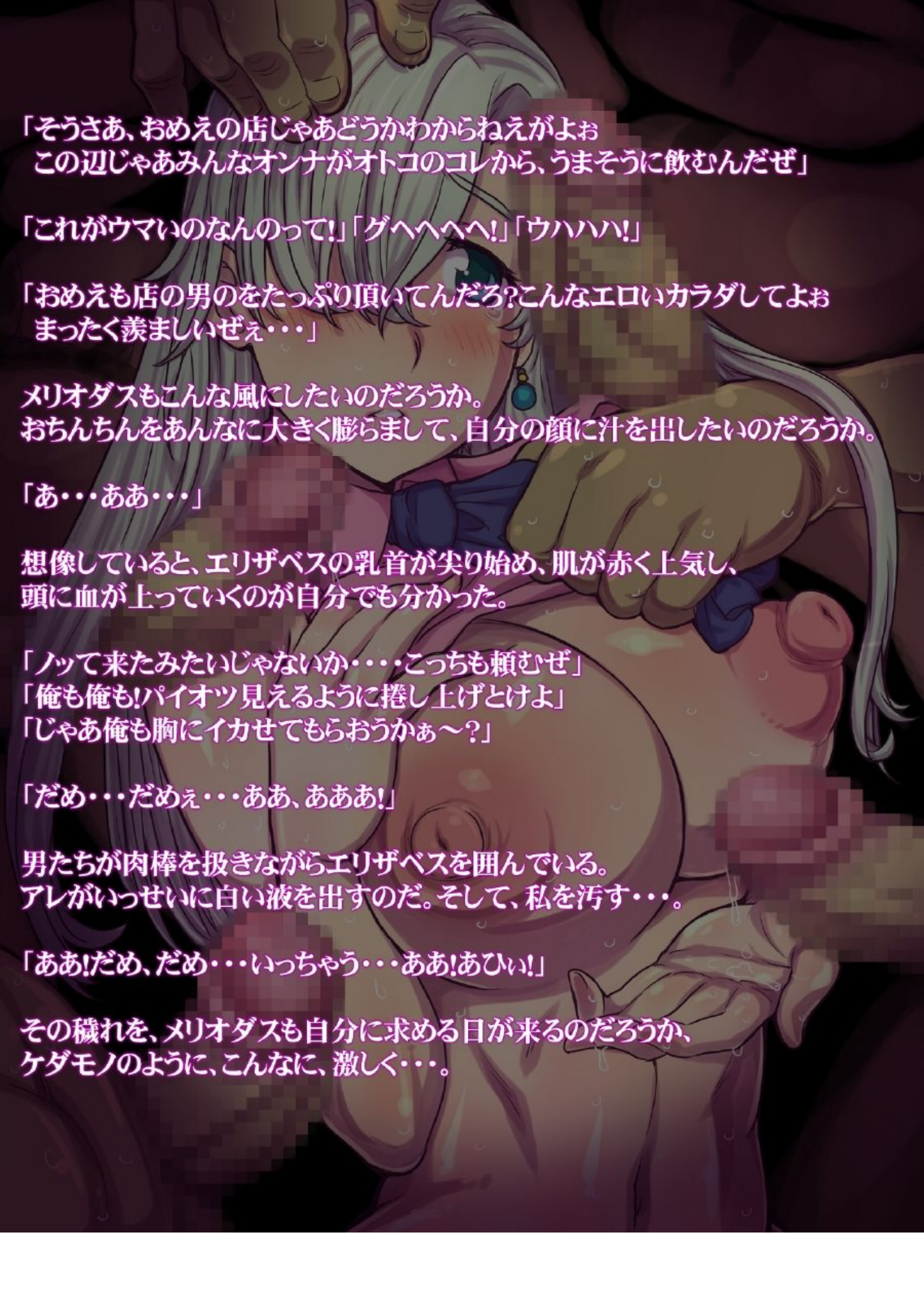
「こんなのお…飲めません…いや…くさい…」

酒場の汚い床にひざまづき、男たちを見上げながら、エリザベスは潤んだ瞳で懇願する。

気がつくとも複数の男たちが、先ほどの男と同じようにそそり立ったペニスを握りながらニヤニヤと見下ろしていた。

アレが、すべてこんな風に…エリザベスは戦慄する。

「これが、お酒を飲む場所ですべき仕事なのですか…?」



「そうさあ、おめえの店じゃあどうかわからねえがよお
この辺じゃあみんなオナナがオトコのコレから、うまそうに飲むんだぜ」

「これがウマいのなんのって!」「グヘヘヘヘ!」「ウハハハ!」

「おめえも店の男のをたっぷり頂いてんだろ?こんなエロいカラダしてよお
まったく羨ましいぜえ…」

メリオダスもこんな風にしたいのだろうか。
おちんちんをあんなに大きく膨らまして、自分の顔に汗を出したいのだろうか。

「あ…ああ…」

想像していると、エリザベスの乳首が尖り始め、肌が赤く上気し、
頭に血が上っていくのが自分でも分かった。

「ノって来たみたいじゃないか…こっちも頼むぜ」
「俺も俺も!パイオツ見えるように捲し上げとけよ」
「じゃあ俺も胸にイカせてもらおうかあ〜?」

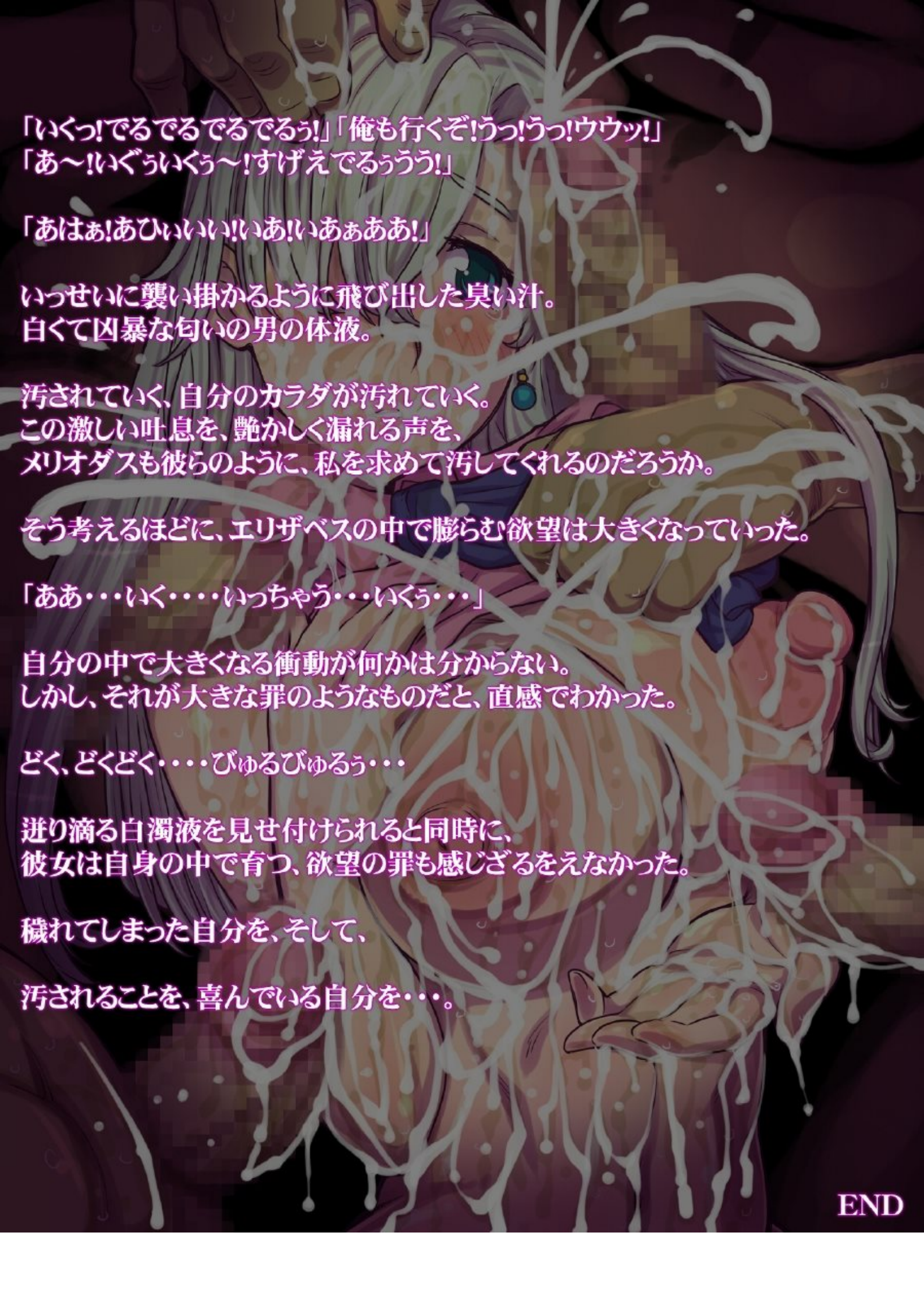
「だめ…だめえ…ああ、あああ!」

男たちが肉棒を扱きながらエリザベスを囲んでいる。
アレがいっせいに白い液を出すのだ。そして、私を汚す…。

「ああ!だめ、だめ…いっちゃん…ああ!あひい!」

その穢れを、メリオダスも自分に求める日が来るのだろうか、
ケダモノのように、こんなに、激しく…。





「いくっ!でるでるでるでるう!」「俺も行くぞ!うっ!うっ!ウウツ!」
「あ〜!いぐういぐう〜!すげえでるううう!」

「あはあ!あひいいい!いあ!いああああ!」

いっせいに襲い掛かるように飛び出した臭い汗。
白くて凶暴な匂いの男の体液。

汚されていく、自分のカラダが汚れていく。
この激しい吐息を、艶かしく漏れる声を、
メリオダスも彼らのように、私を求めて汚してくれるのだろうか。

そう考えるほどに、エリザベスの中で膨らむ欲望は大きくなっていった。

「ああ…いく…いっっちゃう…いくう…」

自分の中で大きくなる衝動が何かは分からない。
しかし、それが大きな罪のようなものだと、直感でわかった。

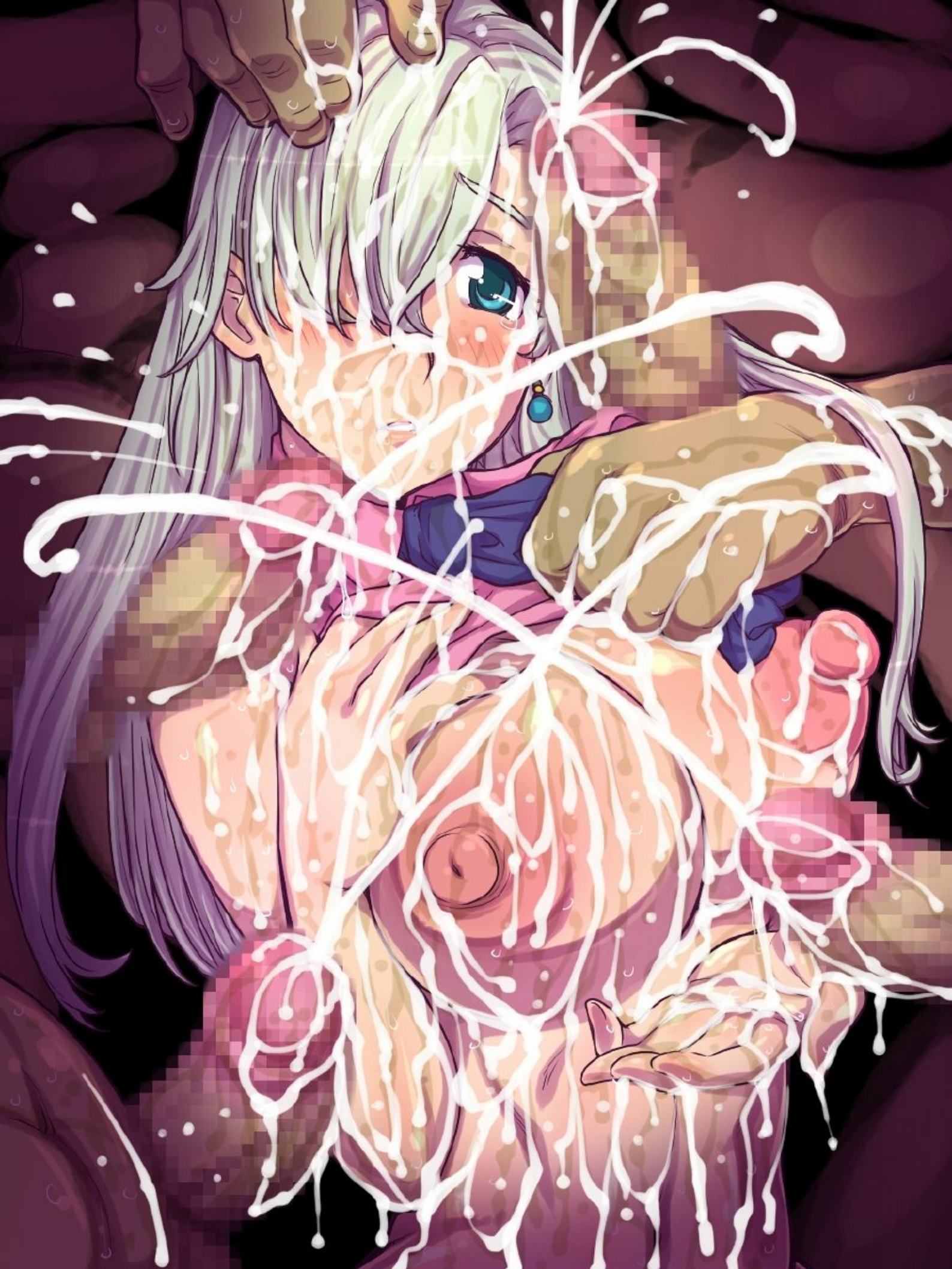
どく、どくどく…びゅるびゅるう…

迸り滴る白濁液を見せ付けられると同時に、
彼女は自身の中で育つ、欲望の罪も感じざるをえなかった。

穢れてしまった自分を、そして、

汚されることを、喜んでいる自分を…。

END









あーん! はなとこ!

あーん! はなとこ!

あーん

あーん

あーん

たっ!

たっ!

たっ!

あーん! はなとこ!

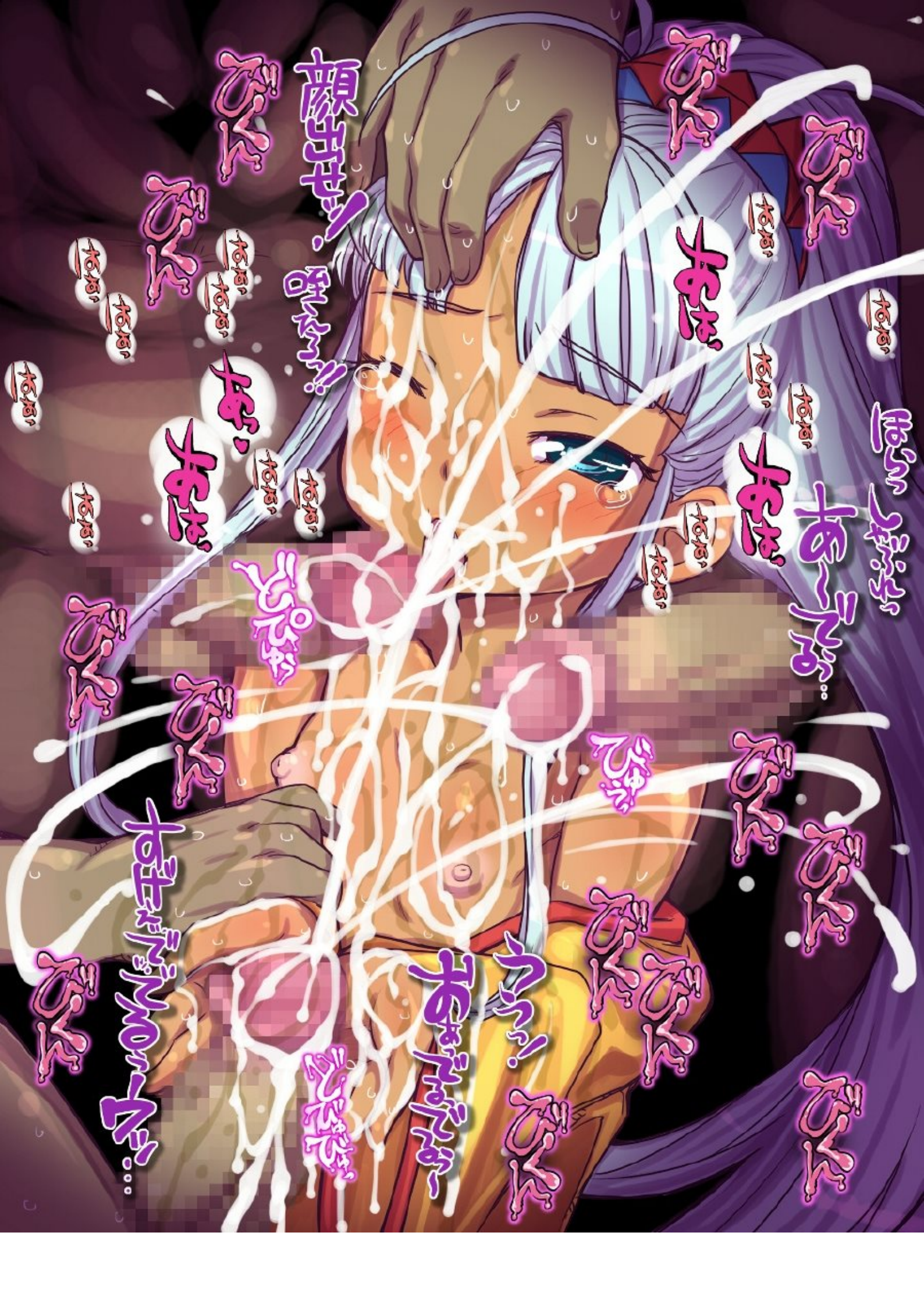
あーん! はなとこ!

あーん

あーん! はなとこ!







Multiple instances of stylized pink and purple text and symbols, including the word "LOVE" and various abstract characters, scattered across the image.

顔打ち!

パンク!

トビキリモノ〜!!

干渉モノ〜

〜!!

〜

〜

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE

LOVE



★491枚目妖怪ウォッチ 木霊文花

ぜんぶ妖怪の仕業

「こんなことやめてえ!はなしてえ!」

デパートの屋上にあるアーケードテント、昔はゲームセンターや子供用遊具があった華やかな場所はいまや薄暗い物置に変わってしまった。

中年の俺たちがそこに忍び込んで昔話に興じている時に、ふみちゃんは現れた。

「ああ・・・フミちゃんのなか、すごいキツキツだよお・・・はあはあ」
「ほらほら、こっちも握って、ね?ああ～ちっちゃいおてて・・・」

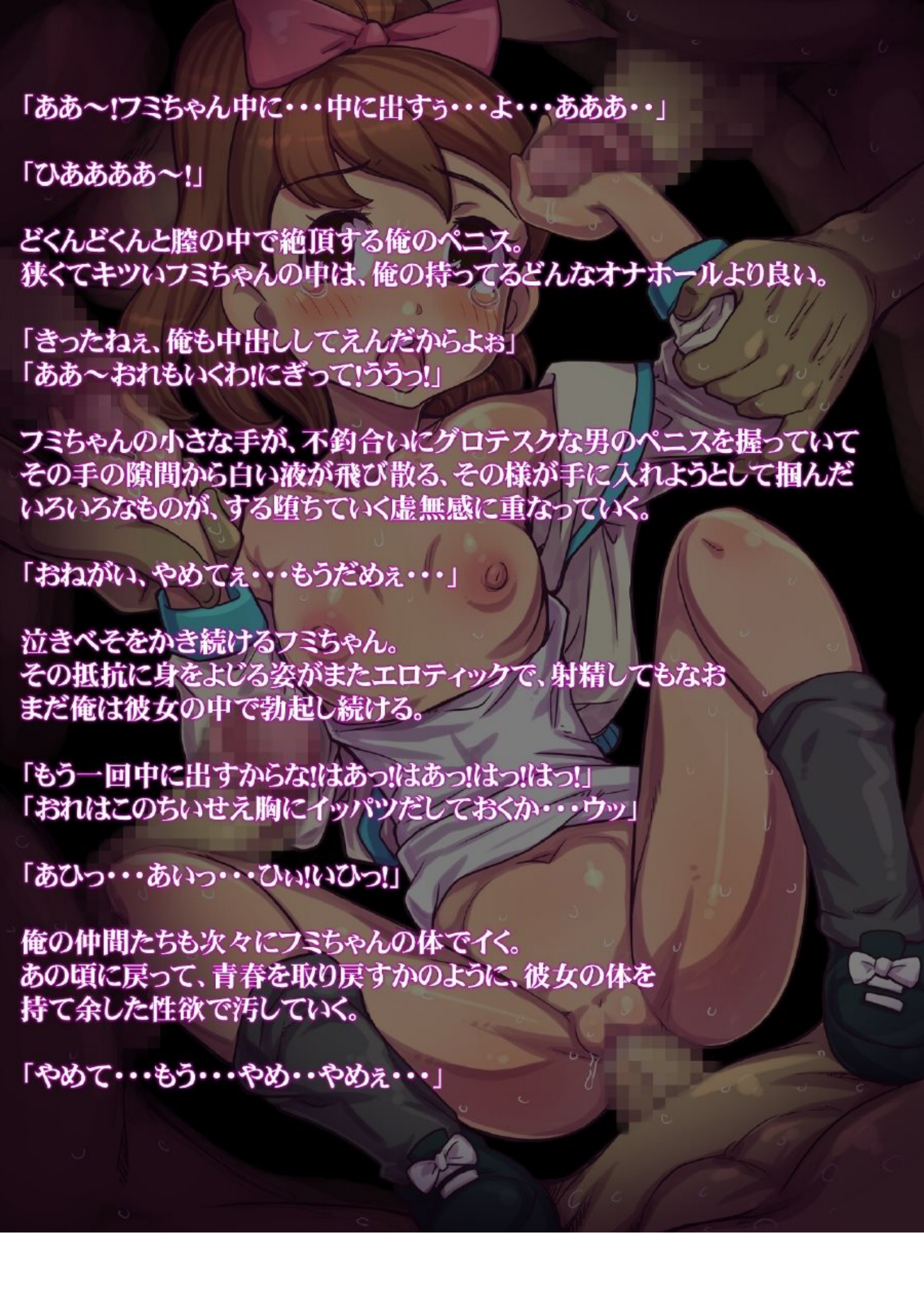
「いたいいやあ・・・いやあ～!」

このデパートに勤めている俺が、友人たちが遊びに来たのをきっかけに休憩がてらこのテントに来た時に、開けっ放しにしていた屋上へのドアをこの子はたまたまくぐったのだろう。

俺たちは若くてガキだったときを思い出して、フミちゃんを襲っていた。

「昔は何でも出来たよな～ スター取ってる無敵状態だったよな」
「毎日ゲーセンいったりお前んちでゲームやったり」
「ここで脱衣マーじゃんやりたくてルール覚えたりな」

あの頃の気持ち、若さ、暴走が、可愛すぎるフミちゃんを犯したくて汚したくてたまらない衝動に突き動かされておれは夢中になって腰を動かす。



「ああ～!フミちゃん中に…中に出すう…よ…あああ…」

「ひああああ～!」

どくんどくと膣の中で絶頂する俺のペニス。
狭くてキツイフミちゃんの中は、俺の持ってるどんなオナホールより良い。

「きったねえ、俺も中出ししてえんだからよお」

「ああ～おれもいくわ!にぎって!ううっ!」

フミちゃんの小さな手が、不釣り合いにグロテスクな男のペニスを握っていて
その手の隙間から白い液が飛び散る、その様が手に入れようとして掴んだ
いろいろなものが、する堕ちていく虚無感に重なっていく。

「おねがい、やめてえ…もうだめえ…」

泣きべそをかき続けるフミちゃん。

その抵抗に身をよじる姿がまたエロティックで、射精してもなお
まだ俺は彼女の中で勃起し続ける。

「もう一回中に出すからな!はあっ!はあっ!はっ!はっ!」

「おれはこのちいせえ胸にイッパツだしておくか…ウツ」

「あひっ…あいっ…ひい!いひっ!」

俺の仲間たちも次々にフミちゃんの体でイク。

あの頃に戻って、青春を取り戻すかのように、彼女の体
を持って余した性欲で汚していく。

「やめて…もう…やめ…やめえ…」



「フフッ…言われなくても辞めるよ
来月にはもうこのデパートは閉店さ、そうしたら俺もクビ
それまでは好き勝手やらせてもらうからな…あ～でる、でるう」

腰を激しく突き動かす。フミちゃんの体は俺の腰の動きにがつんがつん押され
壊れた人形のように力なく揺れ動く。

「ほら、顔出せよ、顔…顔お…ああ～おうう!」
「握れ、もっと強く握れよ!ああ!でるでるでるうう～!」

情けない声をあげて、仲間たちはフミちゃんに射精していく。
おっさんになっただらしなない体を震わせて、フミちゃんに精液をぶっかける。

この屋上で遊んでいた頃は想像もしなかったほどに、
こいつらもおっさんになっただらしなない俺も年を食った。

来月には俺もこいつらと同じ無職か。なんでこんな事になってしまったのか。
地元にはもう働き口がないんだから仕方がない。
誰のせいなんだよ、まったく。

子供の頃はほんと楽しかったな、そういえば昔のアニメや漫画は
何でもかんでも宇宙人や妖怪のせいにしてたっけ。

デパートが潰れるのも、俺が無職になるのも、
こいつらに仕事がないのも、みんな妖怪のせい。

年食ったのも、不況なのも、
フミちゃんが犯されちゃったのも、ぜんぶ妖怪のせい。

そろそろ休憩時間も終わりだ。
閉店後、またフミちゃんでもう一遊び、するかな。

END





★492枚目サモンナイト3 アティ

狂争の夜更け

「へへっ 先生よお、かなり感じるんじゃないかあ？」

「誘ってるとしたか思えねえもんな？ 嫌がってる割にはよお！」

「そんな…いやっ…」

力なく抵抗する。恥ずかしさに、眼を伏せるものの、狂いそうになるほど熱を帯びた肉欲が、今にもあふれ出そうとしている。

狂界戦争が終わって、荒涼とした世界で教育者として生きていくと決めてから隠し持った魔剣の溢れるパワーが抑制しきれず、それに伴って盛る肉欲をアティは抑えきれなくなっていた。

「いやっ…!だめ…だめえ…」

闇市や復興業で人が集まる集落、屈強な兵士崩れや土木を生業とする肉体の猛りを持って余した男たちが夜の盛り場で欲望のままに酒をあおり、その溢れるエネルギーを燻らせている。

アティはその燻りに誘われるように、夜な夜な盛り場へ赴いては肉欲に弄ばれていた。

「となりの町でガキども相手にナニおしえてんだあ? ああ？」

「おらおら、先生さんよお、俺にもおしえてくれよお～ゲハハハハ！」

眩暈を起こすほどの体臭と、酒臭く濁った口臭が混じった下品な言葉に、アティの肉体は濡れ始める。これから自信の身に起きる、情事を予感して。



「あ…そんなあ…」

乱暴に衣類を剥ぎ取られる。

あらわになった胸の先端に付いた、熟れた果実を思わせる乳輪と乳首をまさに甘美なフルーツでも食べるかのごとく、男は口に含み舐る。

「あっ…あんっ…あひいっ…!!」

出たくもない声勝手に出てしまう。

はやく、はやくきてほしい…屈強な男たちに乱暴に体を重ねたい、肉体にグロテスクなあ肉竿をつきたてて欲しい…

気がつけばアティは自身の足を抱え上げ、信じられないほど下品なポーズで男が入ってくることを望む意思表示をしていた。

「いい子じゃねえか…夜は先生のほうが教えを乞う立場って訳だ
いいぜえ、おしえてやるよ、肉棒の味をなあ…!おらあああ!!」

「あひい!あっ!いやっ!だめっだめよっ…だめえ…!!」

挿入されてくる熱い肉竿が、どろどろに溶解したアティの肉壺にすんなりと挿入されていく。

酒場のテーブルの上で、多数の男たちが見ている前で犯されているのだ。快樂のうめき声を必至に抑え、抵抗しているそぶりを見せるアティ。

「だmっ…ンツ…あっ!だめえ!いやっ…!いやあ…!!」



「フヘヘヘ!燃えるぜえ・・・頭のよさそうな女を犯すってのはよ」
「ああ、俺らも混ぜてくれよ!」「ぐへへ、先生、俺の味もおしえてやるよ」

「いや!いやよお!ああ!あんっ!あんっ! ああああ!」

蜜蝋を舐めに集まった虫が触覚を伸ばすかのごとく、各々が勃起したペニスをアティの肉体に突き出す。

まるで涎をたらすかのように透明の体液を滴らせ、アティの体は男たちに取り囲まれ、歓喜の悲鳴を上げ始めている。

「ああっ!あっ・・・はあ・・・はあ・・・はああああ!」

「いくぜ、先生・・・!あっ!」「ああ。でるう・・・」
「先生顔!顔に出すう!あふう!」「うおお!でるでるでるう!」

男たちが射精の快楽にうめき声を上げる。
膣の中で広がっていく汚れた熱液・・・びくんびくんと打ち出される働哭がアティの肉体に凄まじい快楽を与え、意識が飛ぶほどの絶頂感を享受する。

「あくっ!あくっ!あ!あ!いやっ!!!いやあ!!!!あ!アッ!アッ!」

飛び散る白濁液に、アティの先生としての尊厳を汚されていく。
滴る臭く濁った精液に、アティの清楚で清廉な性を壊されていく。

自分を破壊され、肉欲の赴くまま、期待通りの凄まじい快楽に悦びながらもアティは抵抗の言葉を吐かずにはいられない。

それが彼女の、長きに渡って燻り続ける『葛藤』だった・・・。

END





★493枚目スパロボ セツコ・オハラ

不幸な女

実質的に階級を失ったセツコにとって、上官の命令は絶対だった。

「あひい!いぐう!いぐいぐうう!」

戦場で使用される興奮剤や覚醒薬。その臨床実験は秘密裏に艦内で行われる薬を投与され、副作用によって性欲を暴走させられみだれるセツコ。

自分より若い士官候補生数人にみだれたカラダを弄ばれる、性欲と肉欲が支配する狂乱の実験。

上官が差し出した薬を飲み、指定された実験室へ行く。その時点でセツコは何が行われるのか、想像できていた。

その時ほど自分が女であることを呪った事はない。男であれば、もっと自分に力があれば、こんな不幸は避けられただろうに。

「いぐう!あはあ!あっ!あはああ!あああ!いぐいぐいぐううう!」

抗いがたい衝動から口を漏れる喘ぎ声。不幸な身の上、開放と快楽を求め、より一層みだれてしまう。

「いく、おれ、いきますッ!ウッ!」「こっちも・・・ああでるう!」

若い候補生達は夢中になってセツコのカラダを求め、何度も射精してそれでもまだ飽き足らず、彼女の体を撫で回す。

若い士官候補生、この艦に来てから、彼らの相手が多かった。そしてセツコは彼らは嫌いではなかった。

醜く太った父親以上に年上な士官や、老齢な軍需産業の幹部の相手をさせられるよりはは大分マシだった。



「なかでっ!なかでですう…!うっ!んうっ!

「ああ!れてるう!いぐう!なかでえ…あああ〜!

若さが溢れる。凄まじい量の精液が膣の中で打ち出されて、文字通り溢れ滴り落ちる。

その体液のぬめりを潤滑油にして、なおも腰を動かし続けるほどに彼らは若く、それ故にセツコのカラダに夢中になっている。

「いいよ、だして…もっとナカで…あああ!ぎでえ〜!

艶かしくカラダをくねらせ、快楽に悶絶するセツコ。下品に喘げばあえぐほど、若い士官たちのペニスはそそりかえり、セツコを認め求めるかのごとく、射精という返事で返す。

頭がどうにかかなりそうなほど、射精と肉欲とうめき声に飲み込まれ、自分が実験体であることを忘れて喘ぎ続ける。

乳首を乱暴にもまれ、乳首をなめまわされ、膣の中をかき回すかのようにペニスを抜き差しされ、そうされる悲劇を忘れるために、セツコは必要以上に喘ぐ。

「ああ!おれ、またでますう!ウツ!」「僕も、僕も出ますう!ウツ!

勢いの衰えない射精にセツコのカラダが歓喜の震えを起こす。

「ああ…あああ〜!

不幸の中にあってもなお、格別な幸福感をもとめて絶頂する女。しかし、それはすぐ愚劣な訪問者によって打ち砕かれる。





「オハラ、次の実験だ、こちらの御仁をお相手して差し上げよ」

観察用のガラスのスモークがとかれ、太った男がニヤついた顔で見ている。

「何をしている、士官候補生はすぐ次の実習へいきたまえ、
オハラは二次投薬前にシャワーを浴びておきたまえ」

軍需産業の幹部の相手…それが意味する事は性接待に他ならなかった。
少なくともセツコはそう感じていた。

絶望感が彼女を包み込む。
若く将来のある彼らから、醜い死の商人の相手をする落差に、
セツコは力なく返事をする。

「了解しました……」

「ご覧ください、人造スフィアが放出するエネルギーの示す数値が
著しく上がっています」


「やはり幸福を感じてからの不幸感のほうが大きい数値を出すのだな」

「そうです、不幸の連続はそれ自体に慣れてしまい、より大きな不幸は
兵士としての機能を低下させます」

「緩急を与えることで、安定的にエネルギーを放出するわけか
性欲開放にによる肉体付加と情緒安定のバランスはどうか？」

「彼女の場合安定しています。性欲の開放による高揚感、多幸福感は
他の女性被験者より大きいようです」

「フフ、セックス好きというわけか、
無理もない、散々薬漬けのセックスを強いているんだ
セツコのセツは、セックスのセツってわけさ……」



知らない方が幸せなのかもしれない。

薬学の実験と称して、若い士官候補生たちの性欲を満たす目的があることも
軍需産業の幹部に性接待を強いられているということも。

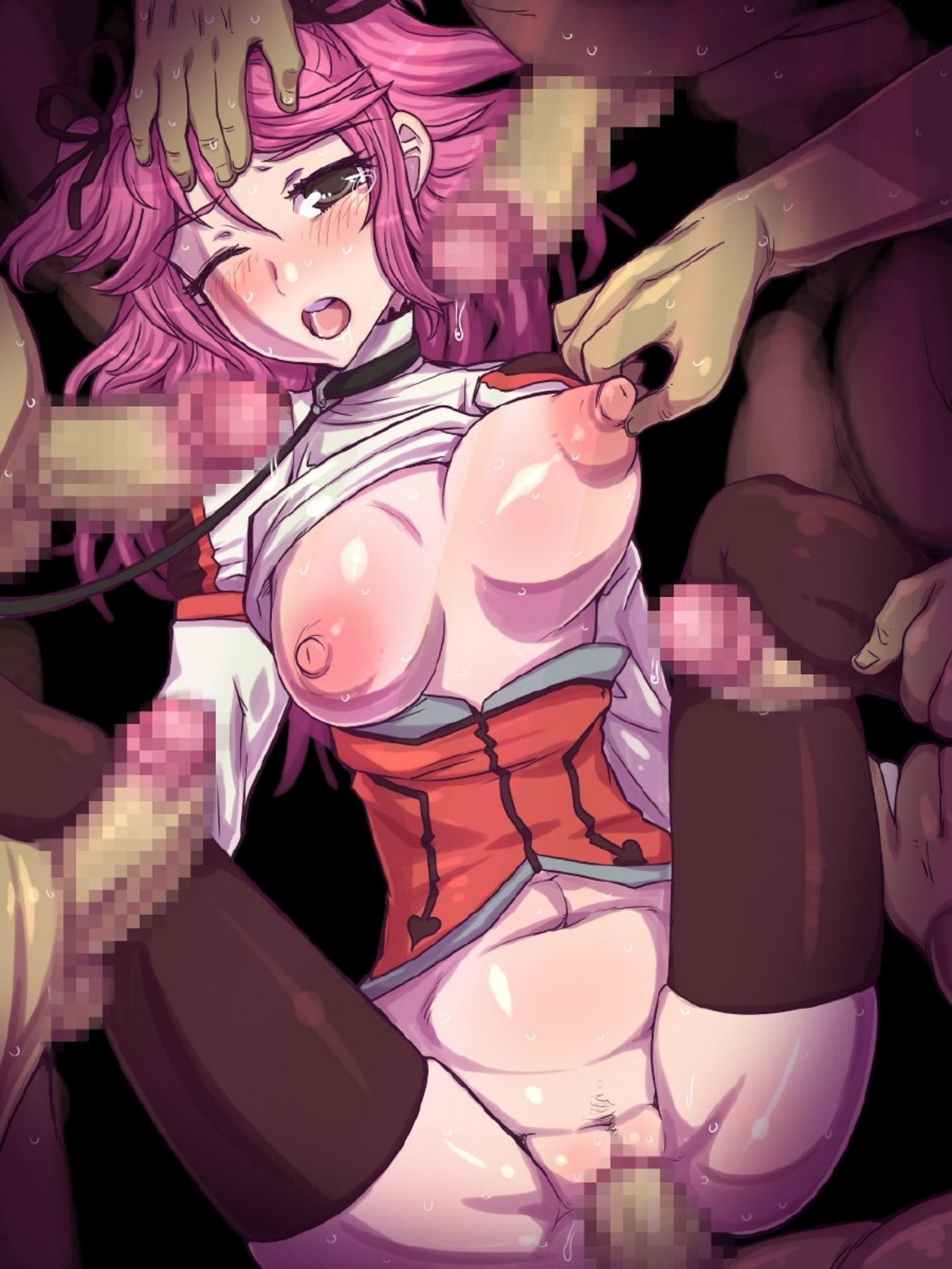
そしてなにより、彼女自身気がついていない、ささやかな幸せが、
自分自身が嫌悪すべき、肉欲の宴からもたらされているということなんて

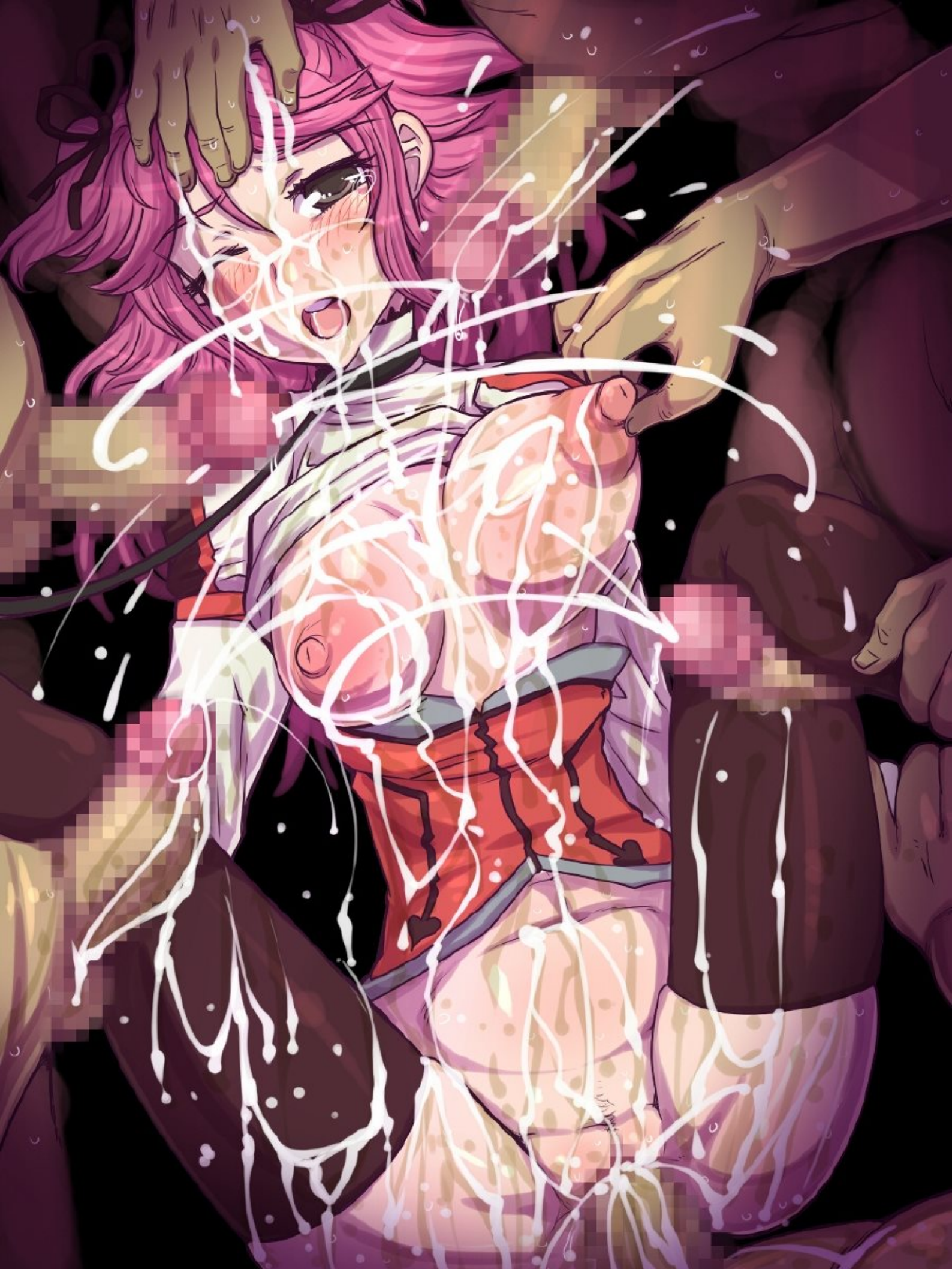
知らない方が幸せなのかもしれない。

END











アホ

アホ

アホ

アホ

アホ

アホ

アホ

アホ

アホ

アホ

アホ

アホ

アホ

アホ

アホ

アホ

アホ

アホ

アホ

アホ

アホ

アホ

アホ

アホ

アホ

アホ

アホ

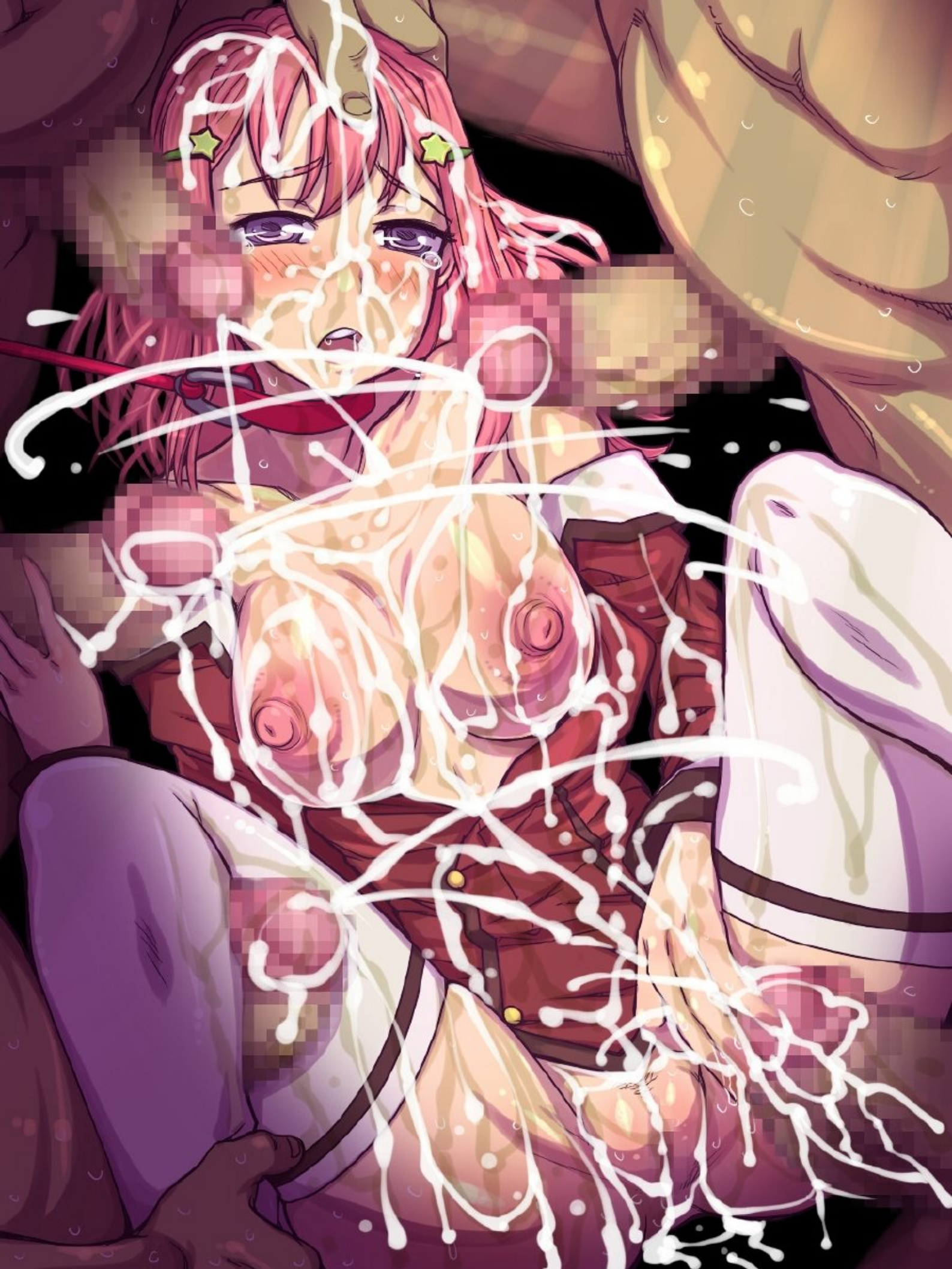
アホ

アホ















おまんこ...
おまんこ...
おまんこ...

おまんこ...
おまんこ...
おまんこ...

おまんこ...

おまんこ...
おまんこ...

おまんこ...
おまんこ...

おまんこ...
おまんこ...
おまんこ...

おまんこ...
おまんこ...

おまんこ...

おまんこ...
おまんこ...
おまんこ...

おまんこ...

おまんこ...
おまんこ...

おまんこ...

おまんこ...
おまんこ...
おまんこ...

おまんこ...

おまんこ...



★498枚目 ドラクエ8 ゼシカ

彼女の胸は世界一

兄の仇を打つためならなんでも出来ると思っていた。

仇であるドルマゲスの名前。
酒場の男達の口から漏れたのをゼシカは盗み聞きしていた。

仲間が寝静まった後に宿屋を抜け出し、
酒場でその男達と接触したのがこの悲劇の始まりだった。

「はなして! いやあ! どこ触ってるのよ!

「ああん? 酒場でねーちゃんつったら、触られるのが仕事だろうが!」
「ぐへへへえ〜! すごえおっぱいだなあ、ぽふぽふ屋に売り飛ばすかあ?」

想像以上に粗暴で下品なその男達の振る舞いに、
酒場の人々は見ても見ぬふりだった。

失敗だった。人が多くいる酒場なら大丈夫だと思ったのに…

「おらっ! ひざまずけ! その立派なパイオツで挟むんだよ!

男がゼシカを押し倒すと、眼前に勃起したペニスを突きつける。
グロテスク…兄のそれとは全く異質な、太くてそそり立つ
男のそれを見て、ゼシカの頭には肉製の毒マタンゴという言葉が浮かぶ。

「ヒッ…!」

考えられなかった。あの毒マタンゴのような形状の物に、
触れなければならぬ、そう考えただけで身が凍る。

兄の仇を打つためならなんでもできる、そう思ったはずなのに……。



「もたもたしてんじゃねえ!おら!こうだ、こう!」

頭のおさげを片方掴まれ、無理矢理男の腰にあてがわれる。

「いいっ!いやああああ!」

胸のあらわになっている彼女の服が災いして、毒マタンゴが肌に押し付けられる。

その毒マタンゴは先っぽから透明のどろつく液体を涎のように垂らし、彼女の肌にナメクジの這ったような後を残している。

「だめっ!だめだめだめえええ!」

「うるせえメスだなあ!挟んで欲しいんだと!そのご自慢の胸でよお!」

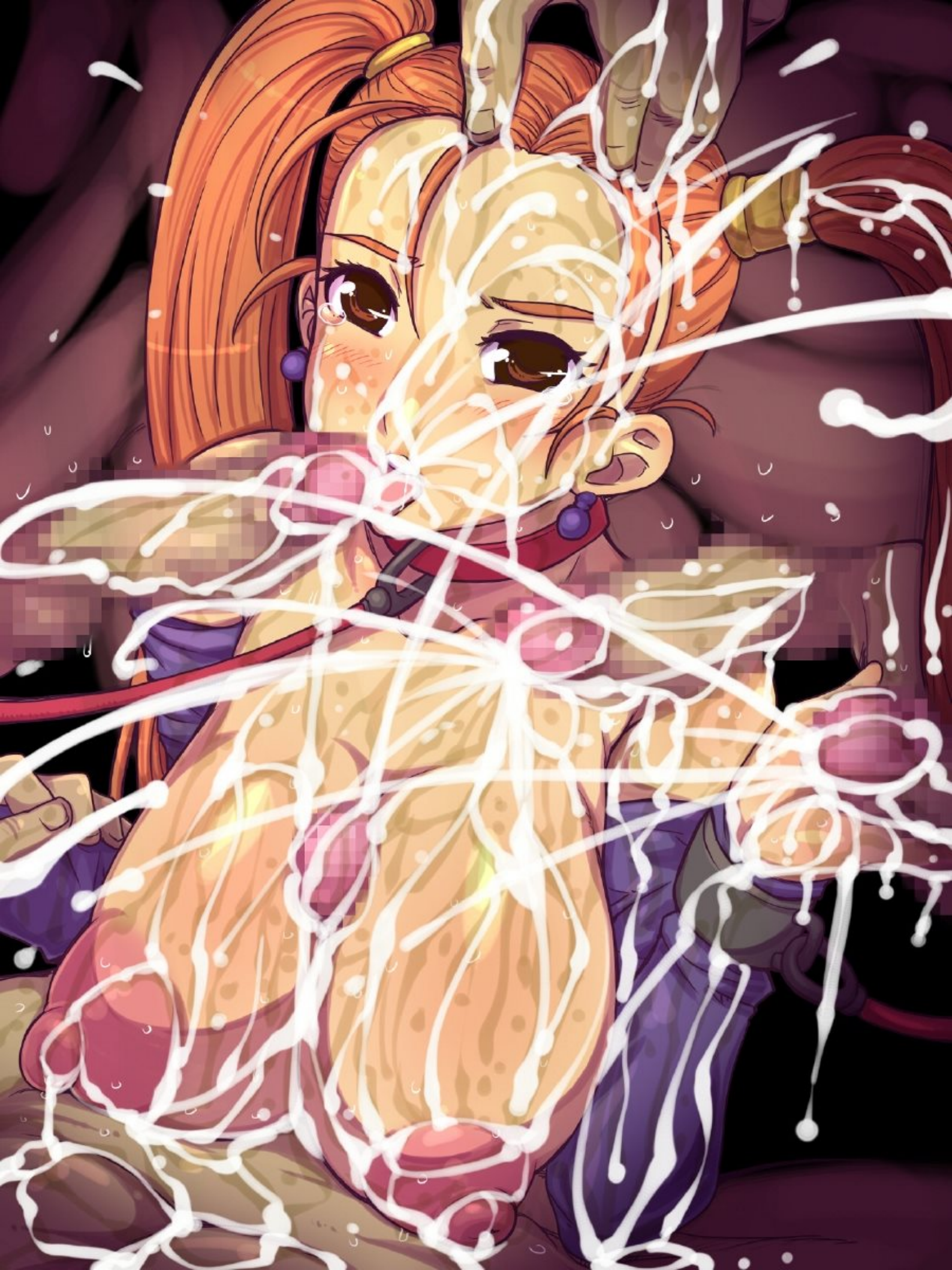
男達の下品な笑い声とともに、後ろから押さえつけていた男が、服を乱暴にずり下ろす。

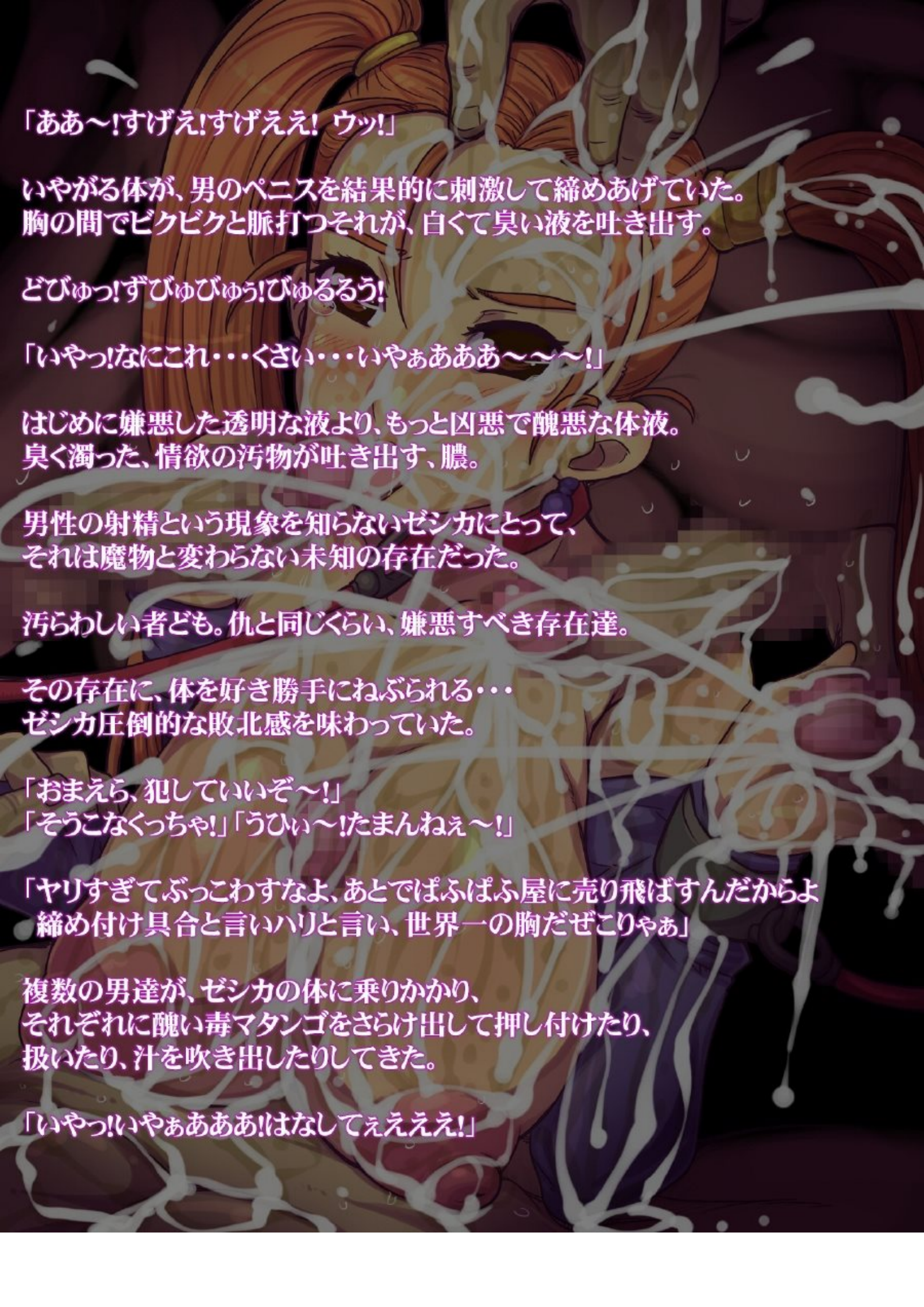
ぶるんと揺れながら現れ、丸見えになったゼシカの胸。男達の視線が、よりいっそう下品に、熱をおびていくのを感じる。

「はさめよ!俺様の極太肉棒をパフパフしてさしあげろお!おらあ!!」

男達に押させ付けられ、胸の谷間に毒マタンゴを挟む。それがどういう意味なのあ全く分からず、ただひたすらにグロテスクで、醜悪で、下品な行為ということだけを理解して、ゼシカは体を強ばらせる。

「うそ…やだっ…やだあ!」





「ああ～!すげえ!すげええ! ウツ!

いやがる体が、男のペニスを結果的に刺激して締めあげていた。
胸の間でビクビクと脈打つそれが、白くて臭い液を吐き出す。

どびゅっ!ずびゅびゅう!びゅるるう!

「いやっ!なにこれ・・・くさい・・・いやああああ～～～!」

はじめに嫌悪した透明な液より、もっと凶悪で醜悪な体液。
臭く濁った、情欲の汚物が吐き出す、膿。

男性の射精という現象を知らないゼシカにとって、
それは魔物と変わらない未知の存在だった。

汚らわしい者ども。仇と同じくらい、嫌悪すべき存在達。

その存在に、体を好き勝手にねぶられる・・・
ゼシカ圧倒的な敗北感を味わっていた。

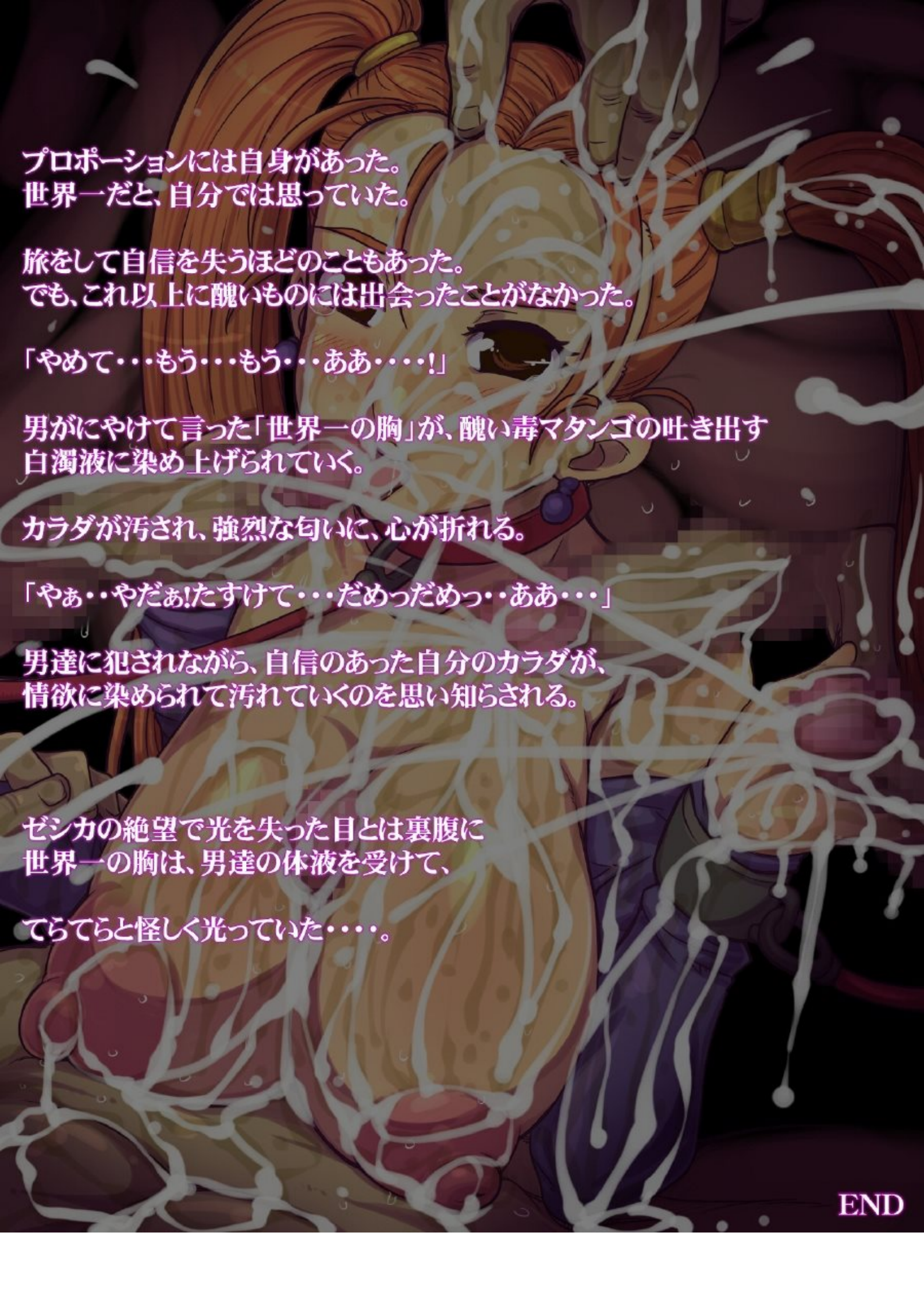
「おまえら、犯していいぞ～!」

「そうこなくっちゃ!」「うひい～!たまんねえ～!」

「やりすぎてぶっこわすなよ、あとではぽふぽふ屋に売り飛ばすんだからよ
締め付け具合と言いはりと言ひ、世界一の胸だぜこりやあ」

複数の男達が、ゼシカの体に乗りにかかり、
それぞれに醜い毒マタンゴをさらけ出して押し付けたり、
扱いたり、汁を吹き出したりしてきた。

「いやっ!いやああああ!はなしてええええ!」



プロポーションには自身があった。
世界一だと、自分では思っていた。

旅をして自信を失うほどのこともあった。
でも、これ以上に醜いものには出会ったことがなかった。

「やめて…もう…もう…ああ…!!」

男がにやけて言った「世界一の胸」が、醜い毒マタンゴの吐き出す
白濁液に染め上げられていく。

カラダが汚され、強烈な匂いに、心が折れる。

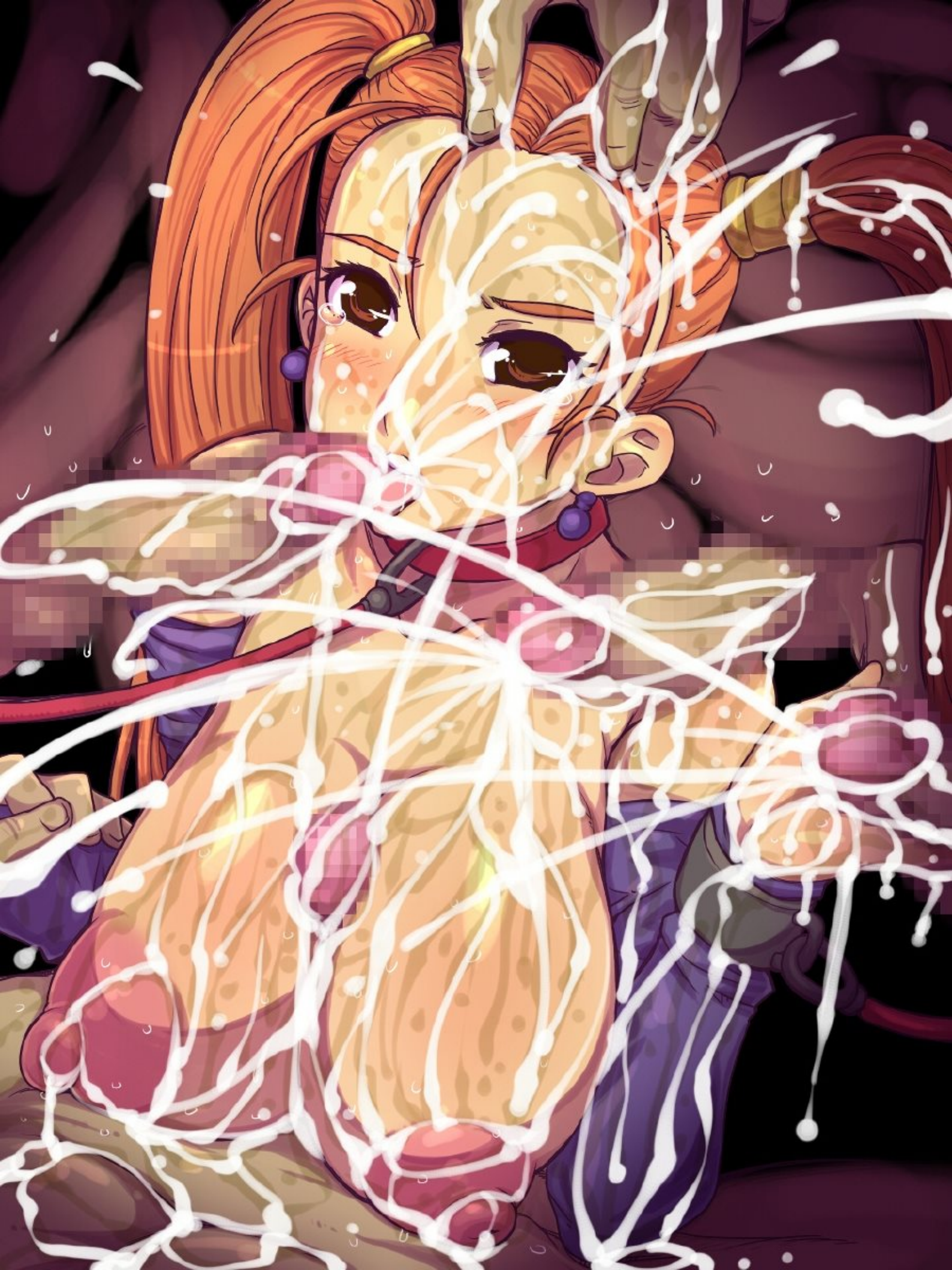
「やあ…やだあ!たすけて…だめっだめっ…ああ…」

男達に犯されながら、自信のあった自分のカラダが、
情欲に染められて汚れていくのを思い知らされる。

ゼシカの絶望で光を失った目とは裏腹に
世界一の胸は、男達の体液を受けて、

てらてらと怪しく光っていた……。

END









★500枚目 ギャル子

ヤラせてギャル子ちゃん

卒業式の日、夜遅くまでクラスメイトと盛り上がったあの日。

俺たちはカラオケルームで頼んだ酒の力を借りて、ギャル子をレイプした。

「はなして!ダメッ!いやああああ!」

はじめは大人のふりをしたかっただけだった。

まさかギャル子がHをしたことがないなんて誰も思っちゃいなかったから。

「はさんで!ああ~!たまんねえ!ギャル子の胸!ずっとこうしたかったんだよお!」

「いつもエロい想像させやがって!もうとまんねええよ!」

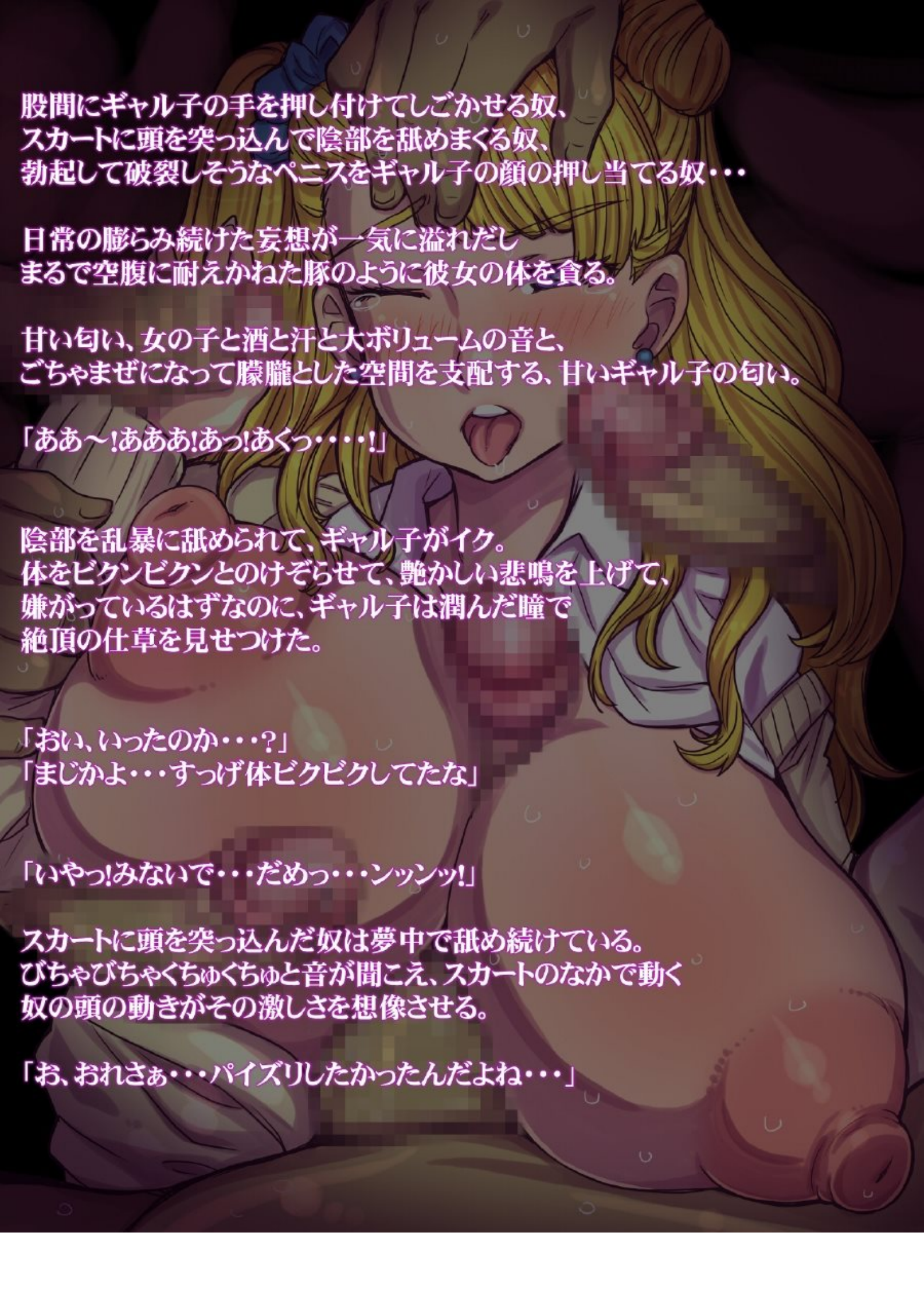
「あはあ!だめっだめえ!いやああああ!」

男子だけのカラオケルームにギャル子を連れてきて、甘ったるくて強い酒を飲ませまくったせいで、ギャル子はもう声を上げるだけで抵抗する力はなかった。

酔ったふりをしておもむろにギャル子の胸を揉んだ。

「こんなっ…だめっ…わたしっ…ああ!」

俺は無我夢中で胸を揉む。



股間にギャル子の手を押し付けてしごかせる奴、
スカートに頭を突っ込んで陰部を舐めまくる奴、
勃起して破裂しそうなペニスをギャル子の顔の押し当てる奴…

日常の膨らみ続けた妄想が一気に溢れだし
まるで空腹に耐えかねた豚のように彼女の体を食べる。

甘い匂い、女の子と酒と汗と大ボリュームの音と、
ごちゃませになって朦朧とした空間を支配する、甘いギャル子の匂い。

「ああ～!あああ!あっ!あくっ……!!」

陰部を乱暴に舐められて、ギャル子がイク。
体をビクンビクンとのけぞらせて、艶かしい悲鳴を上げて、
嫌がっているはずなのに、ギャル子は潤んだ瞳で
絶頂の仕草を見せつけた。

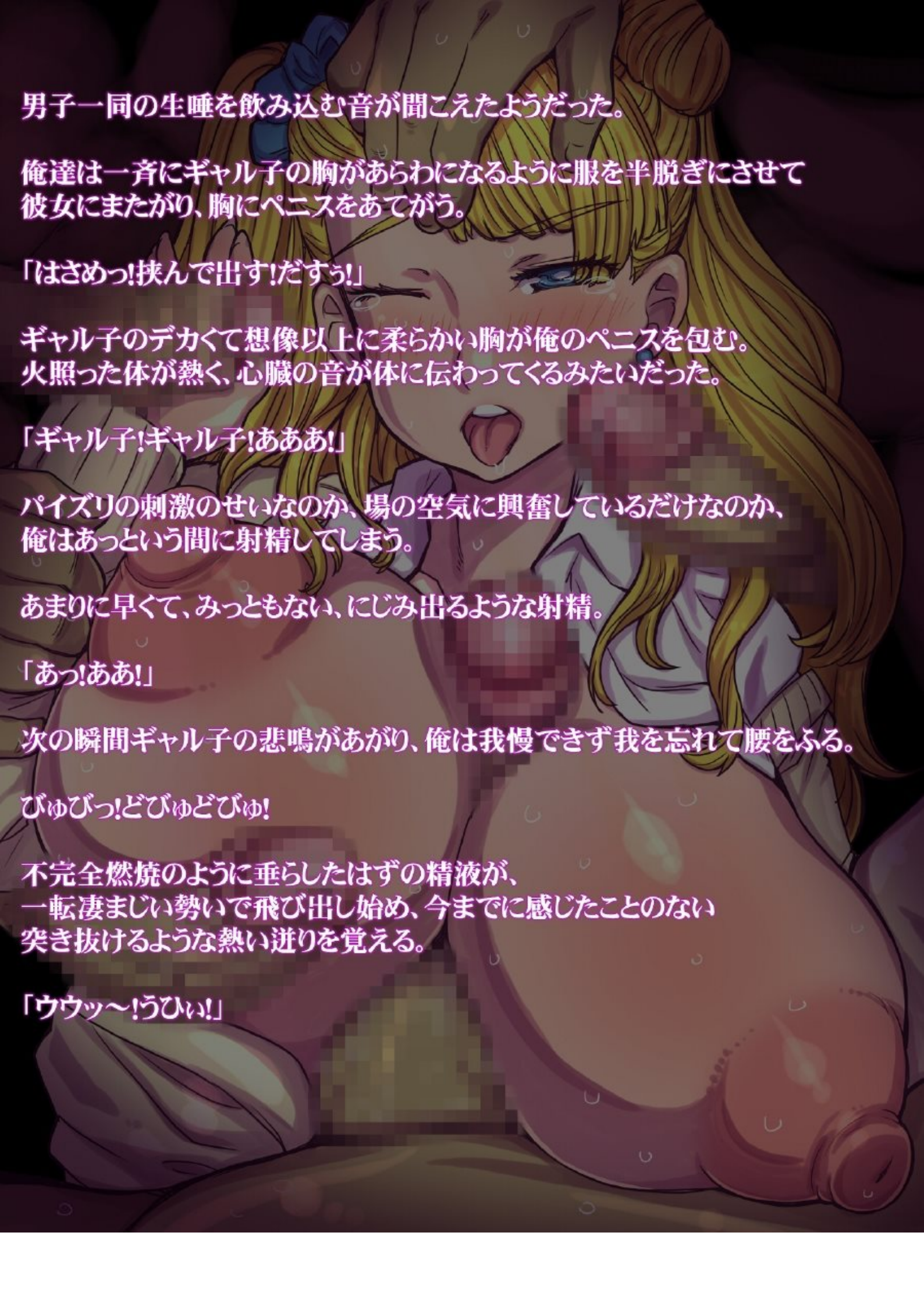
「おい、いったのか…?」

「まじかよ……すっげ体ビクビクしてたな」

「いやっ!みないで……だめっ……ンツンツ!!」

スカートに頭を突っ込んだ奴は夢中で舐め続けている。
びちゃびちゃくちゅくちゅと音が聞こえ、スカートのなかで動く
奴の頭の動きがその激しさを想像させる。

「お、おれさあ……パイズリしたかったんだよね……」



男子一同の生唾を飲み込む音が聞こえたようだった。

俺達は一斉にギャル子の胸があらわになるように服を半脱ぎにさせて彼女にまたがり、胸にペニスをあてがう。

「はさめっ!挟んで出す!だすう!」

ギャル子のデカくて想像以上に柔らかい胸が俺のペニスを包む。火照った体が熱く、心臓の音が体に伝わってくるみたいだった。

「ギャル子!ギャル子!あああ!」

パイズリの刺激のせいなのか、場の空気に興奮しているだけなのか、俺はあっという間に射精してしまう。

あまりに早くて、みっともない、にじみ出るような射精。

「あっ!ああ!」

次の瞬間ギャル子の悲鳴があがり、俺は我慢できず我を忘れて腰をふる。

びゅびゅっ!どびゅどびゅ!

不完全燃焼のように垂らしたはずの精液が、一転凄まじい勢いで飛び出し始め、今までに感じたことのない突き抜けるような熱い迸りを覚える。

「ウウツ~!うひい!」





「俺も!しごいて、ギャル子!ギャル子お!
「こっちもお!ほら、しゃぶって!なめてえ!

もう俺達は止まらなくなっていた。
朝まで取っていたカラオケルームで、代わる代わるギャル子を犯し、
彼女の処女も奪ってしまった。

「ああ!あはあ!いやあ!いくいくう!

誰の声かも誰の体液かも分からない、どろどろのぐちゃぐちゃになる。
ギャル子の顔、胸、体、膣の中、クラスの男子ほぼ全員が共犯だ。
若すぎる俺達の情欲は、容赦なくギャル子を犯しまくって、
そしてその激しさを、ギャル子は受け止められるような大人じゃなかった。

俺達が思ってる以上に、ギャル子はうぶで、華奢で、無垢で、
それでもエロティックで、艶かしくて、気持ちよかった。

なんどもなんども、ビクンビクンと震えて、
何回も悲鳴を上げて、涙と涎と精液にまみれながら、
ギャル子はとろけた表情で泣いていた。

今でも、ギャル子のいった時の顔を思い浮かべて
俺は一人でしてしまう。

あの夜から俺は、
一度も ギャル子とは会っていない…。

END

















ぽぽぽぽぽぽ

ぽ

ぽぽぽぽぽぽ

ぽぽぽ

ぽぽぽ

ぽぽぽ

ぽぽぽ

ぽぽぽ

ぽぽぽぽぽぽ

ぽぽぽ

ぽぽぽ

ぽぽぽ







ミルク

ミルク

ミルク

ミルク

ミルク

ミルク

ミルク

ミルク

ミルク

ミルク

ミルク

ミルク

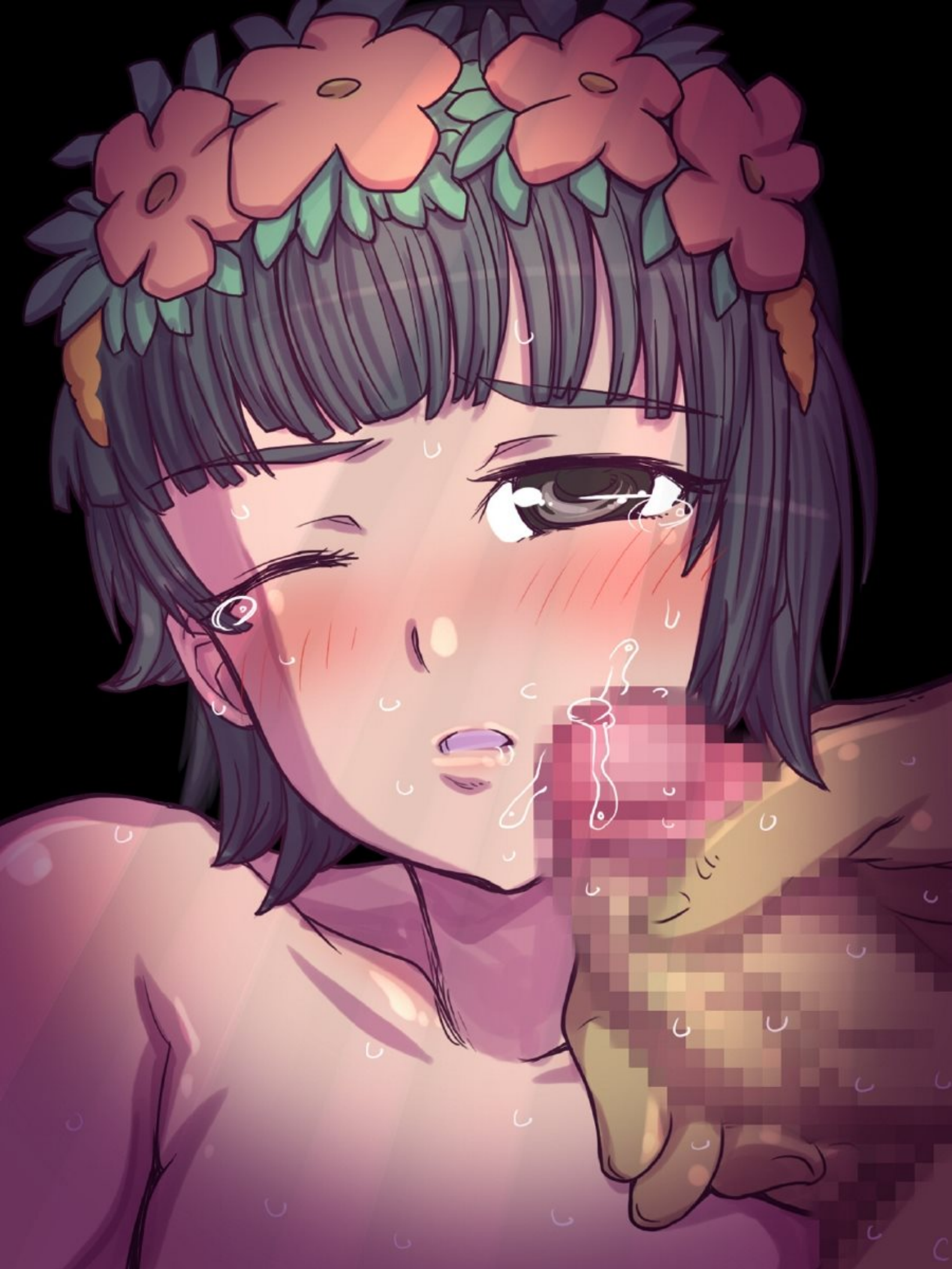
ミルク

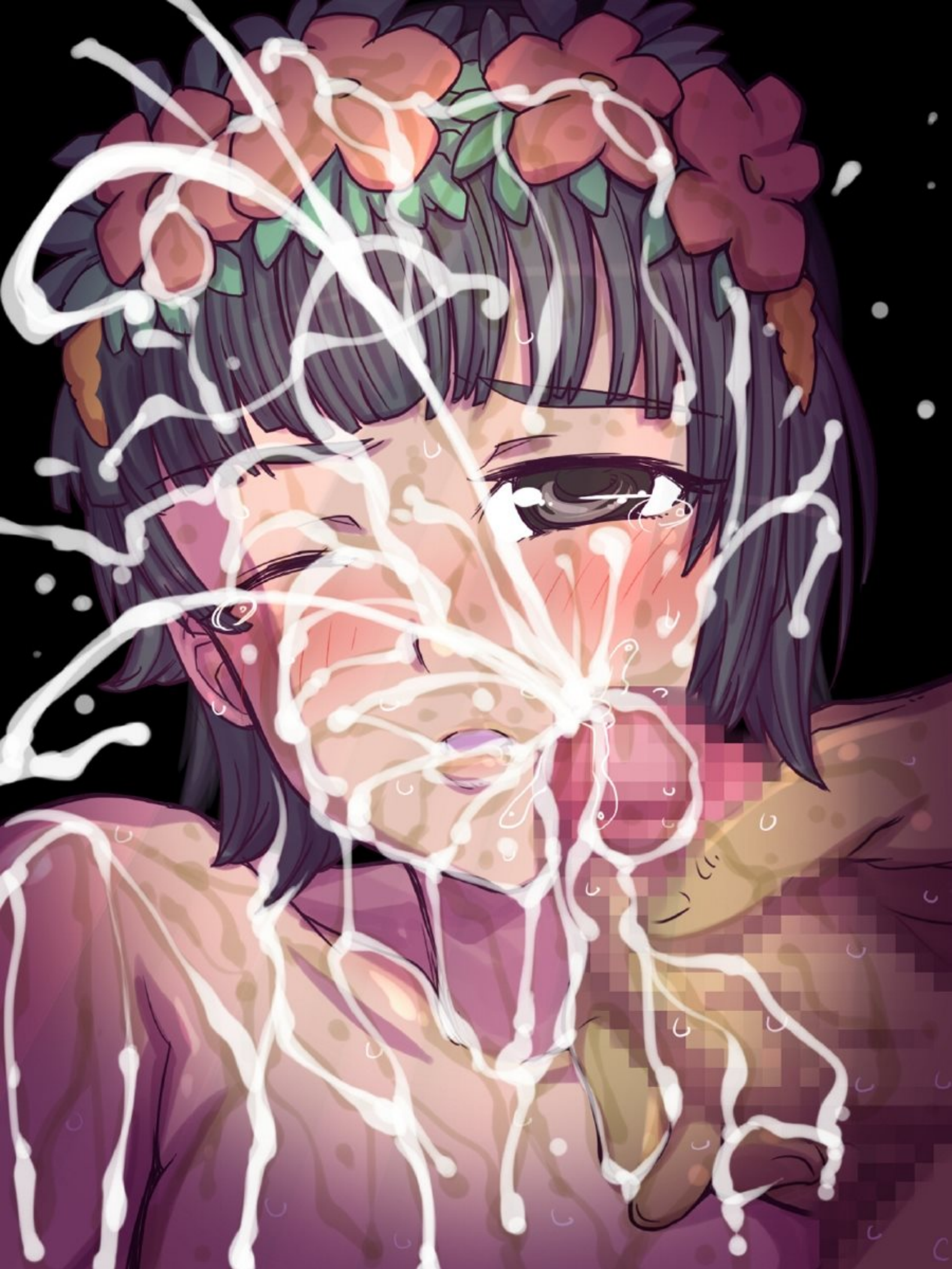
ミルク

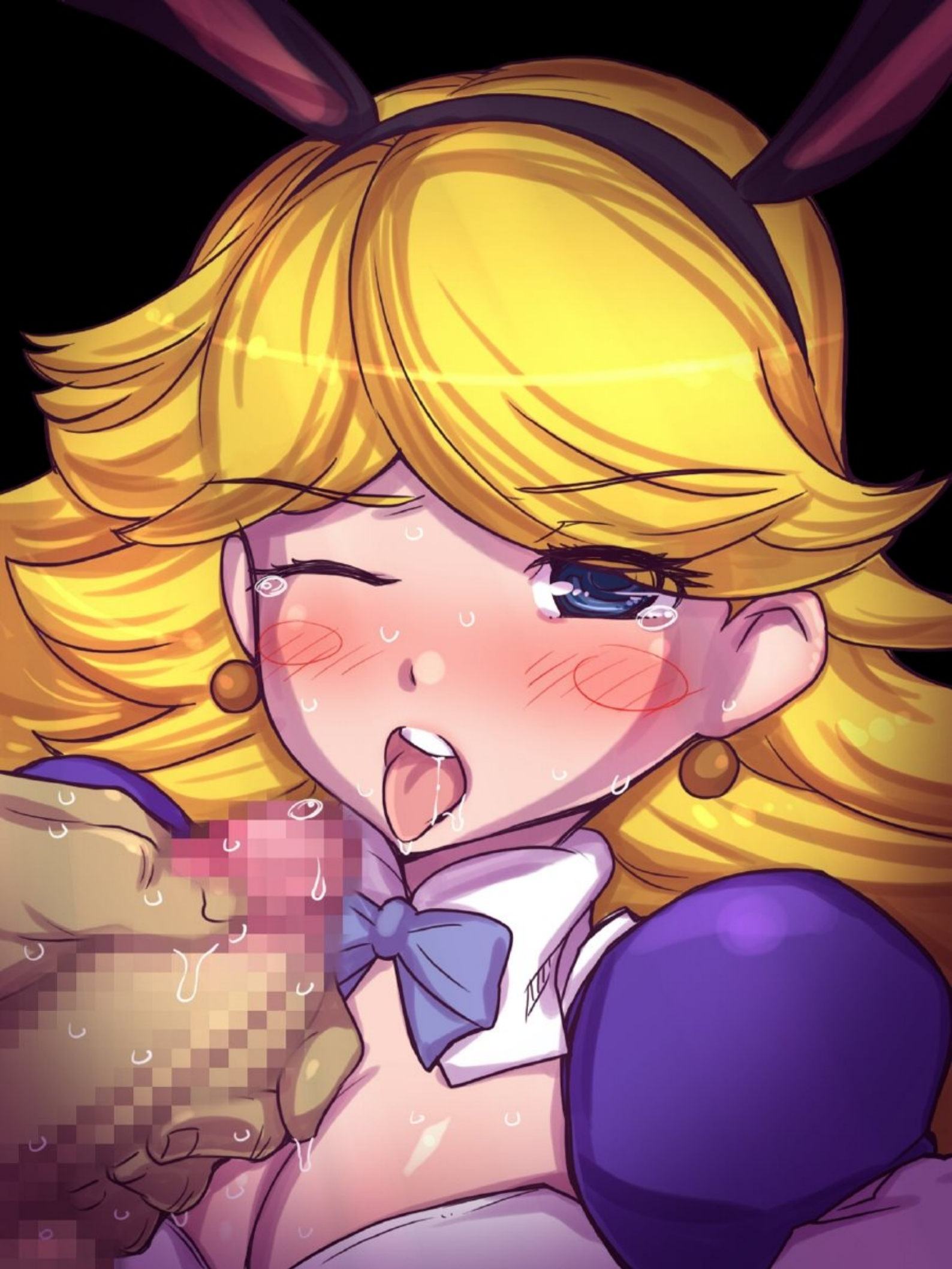
ミルク

ミルク

ミルク





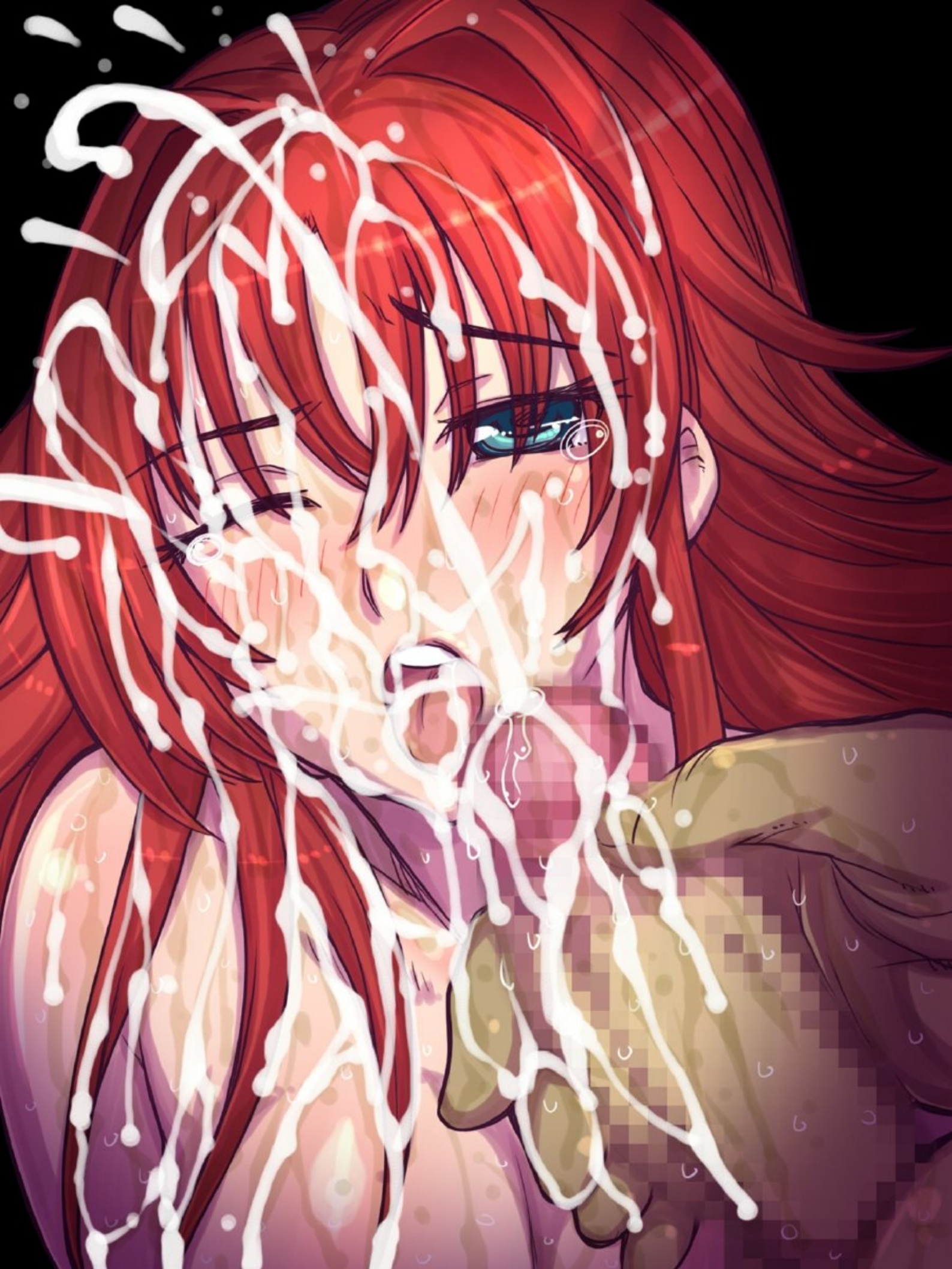






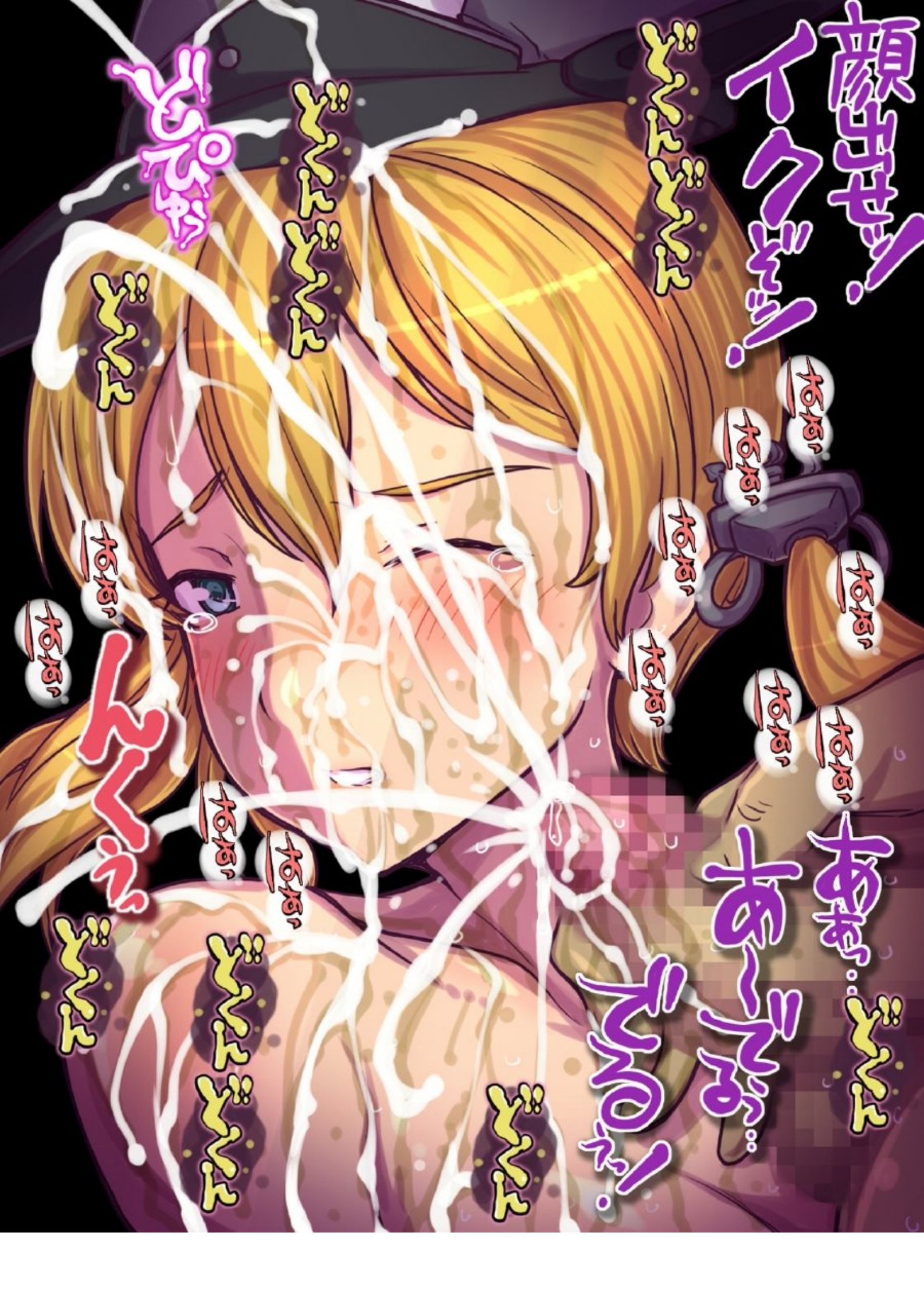












顔を手洗い!
トクニ!

ニムニムニムニムニ

ニムニムニムニムニ

ニムニムニムニムニ

ニムニム

トクニ
トクニ
トクニ
トクニ
トクニ
トクニ
トクニ
トクニ

トクニ
トクニ
トクニ
トクニ

トクニ!

ニムニム

ニムニムニムニムニ

ニムニム

トクニ

トクニ

トクニ

